
狼のしっぽ

山科れん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼のしっぽ

【Nコード】

N9191M

【作者名】

山科れん

【あらすじ】

失った大切な人にもう一度会えるとしたら、どうしますか？

大切な友人を失った女子高生、雨宮香子の前に、不思議な少年が現れる。彼は香子の失った友人に会わせてくれるという。

少年に連れてこられたのは、世界各国の幻獣が実在する、パラレルワールド。

そこで香子は、この世界で恐れられる生き物、狼として生きること

になっただが…
シリアス成分がちょっと多めかもしれませんが。でもコメディ要素も
あり？

登場人物紹介

アマミヤコウコ

雨宮香子

主人公。

高校二年生、17才の女の子。

白い少年に連れられて、「コール」にやってくる。

人の話を聞くのが好きで、人から話を引き出す能力に長けている。けれど、感情移入しやすく、他人の話を自分のことのように感じてしまう。また、熱くなると後先考えずに行動する。

おばあちゃん子で、キレると敬語になり、説教する癖が……。

特技

ヴァイオリン・他人の嘘を見破ること。

趣味

音楽鑑賞

どうでもいい情報

虫歯になったことがない。

【白い少年】

アマミヤを『コール』に連れてきた謎の少年。

『透明な子供たち』《トランスペアレンシー》と呼ばれている。

【サーカス・ベガーズ・バンケット】

ユリアン・フローゲ

推定年齢21才の中性的な美形。

うさぎに牙と鹿の角が生えた幻獣、ヴォルパーティンガーの青年で、ベガーズ・バンケットの芸人にして魔術師。

茶色い髪に茶色い瞳。仕事の時は髪をオールバックにしている。DSでシスコンで、ちょっと子どもっぽい性格で素直じゃない。生い立ちに原因があるのだが、人を信じず、対人恐怖症気味。実は一座の誰よりも常識人で、いつも突っ込み役に回っている。

特技

人をいたぶること。

趣味

人をいたぶること。

どうでもいい情報

実はニンジンが食べられない。

ヴァンゲリス・オデュッセウス

ペガサスの青年。27才。ベガーズ・バンケットの若き座長。リングマスター

プラチナブロンドの髪にスカイブルーの瞳。他人に厳しく自分にも厳しい、真面目な座長。

けれど自分の（変な）ルールを曲げないおかしな性質もあり、常識外れなことをたまーにやってしまう。
賢いのだが、ちょっと天然。

特技

頭脳戦

趣味

絵を描くこと

どうでもいい情報

占いは基本的に信用しないが、ミセス・グレタの言ったことだけは信じる。昔ミセス・グレタの占いに危機を救われたことがあるらしい。

【盗賊団・ヨシユア・ツリイ】

ムカイ トキオ
向井時生

ヨシユア・ツリイの頭。

金髪に黒目の22才の青年。

3年前、主人公と同じように「コール」にやって来た。外見は人間のままだが、魔術師の力を持つ。

基本的に冷静で頭が良い。

いつも無表情で、黙っていると何を考えているのか分からない。しかしよくしゃべる。口先だけで他人を思いのままに動かすことができるほど話がうまい。

特技

口先八丁

趣味

読書

どうでもいい情報

「無表情過ぎる」といちゃもんをつけられて、殴り合いの喧嘩になったことがある。

第1話 夢のさき

夢を見た。

月夜を駆ける「あの子」を。

瞳の色は、見慣れない鮮やかなグリーン。
頭には猫や犬のような、ピンと立った毛皮の耳。

背中にはカラスのように、真っ黒で大きな翼。

それらは、月の光を浴びて銀色に輝いている。

それは不思議な、異形の姿。

…けれど、それは確かに、ずっとずっと会いたかった「あの子」だった。

森の中を、跳躍を繰り返して木々の間を軽やかに飛び回る。

その姿は、ともすれば楽しんでいるようにも見えるけれど…。

泣いている。

「あの子」は、泣いている…。

何かを求めて、何かを探して、何かを叫んでいる。

悲しみに支配されて、絶望にあえいでいる。

木から降り立つと、地に伏して、「あの子」は頭を抱えて泣き叫ぶ。

大声で、全身で慟哭する。

体を大きく震わせて、「あの子」はむせび泣いている。

痛々しい程に。

どうして泣いているの？

何があつたの？

「あの子」を、助けてやりたい。

慰めてやりたい。

声をかけて、話を聞きたい。

側に居てあげたいのに。

どんなに手を伸ばしても、私の手は「あの子」に届かない。

どんなに声を張り上げても、「あの子」が私に気付くことはない。

どんなに願っても、この夢の中では、私の願いは何一つ叶わないのだ。

私は泣いている「あの子」をただ、見つめることしかできなかった。もどかしい思いで私は立ち尽くす。

すると、いつの間にか、泣いている「あの子」の隣に誰かがやって

来る。

その人は「あの子」を抱き締め、「あの子」の涙で濡れた頬を優しく拭う。

そしてその人は、「あの子」の手を握る。

私はほっとしてため息をついた。

これで「あの子」は大丈夫…。

そのとき、私のため息が聞こえてしまったようで、突然その「誰か」がこちらを振り返る。

…振り返る…

私、^{アトミヤ}雨宮 ^{コウコ}香子は目を覚ました。

まだ夜が明けきっていない時間で、部屋の中を青い光が照らしていた。

壁に掛けてある時計を見ると、午前4時。起きるにはまだ早すぎる時間帯だったが、何だか目が冴えてしまった私は、ベッドの中ではんやりと先ほど見た夢について考えていた。

最近いつも見る夢。

同じ夢を何度も見るという経験は初めてだったので、気になってしまふのだ。

しかも必ず同じところで目が覚める。あの「誰か」が振り返って、私の方に顔を向ける、その寸前で必ず夢から覚めてしまうのだ。

あれはいつたい誰なんだろう。

「あの子」

と一緒にいたのは。
知りたい。

… あれは、ただの夢だというのに。

悲しい夢だ。

決して良い夢じゃない。

それでも、夜眠るたびに必ず見るこの夢を、私は楽しみにしていた。
ただの夢でも、「あの子」に会えるから。

話すことができなくても、私は「あの子」の姿が見れるだけで嬉しかった。

もう二度と会えない。

「あの子」はもう、この世界のどこにもいないのだから。

しかし、夢の中で「あの子」は何故あんな異形な姿をしているのだろうか？

そして、そんな姿の「あの子」を見て、絶対に「あの子」だと確信できるのは、自分でも不思議だった。

私はそうやって「あの子」を思い出していたけれど、だんだん涙が溢れ、こらえきれない嗚咽が漏れた。

私にとって、時が過ぎていつか自分が「あの子」の不在を受け入れ、「あの子」を忘れてしまうことが、一番恐ろしかった。

その日の夕方、小さな頃から続けているヴァイオリンのレッスンを終えて、私は電車を待っていた。

いつもなら学校帰りの学生や、仕事帰りの会社員が大勢いるはずの時間帯だけど、夕暮れ時の駅のホームには、私以外誰もいない。不思議に思ったけれど、特に気にはしなかった。

一人でバス停のベンチに座って、ヴァイオリンケースに貼られたステッカーを撫でながら、私はまた「あの子」のことを思い出していた。

このステッカーは、「あの子」が作ってくれたものだ。

三角形にくり抜かれた銀色を背景に、絶滅した日本狼を写實的に意匠化したイラストが、黒一色で描いてある。

何故狼なのか聞くと、夢の中で見たんだ。と、何故か恥ずかしそうな顔をして、彼は笑っていた。

「あの子」…スルガハルカ駿河遥は3カ月前に、死んでしまった。

ハルカは心臓に病気を持っていて、出会った頃にはもう病院に通っていた。

その病が、ハルカを連れて行ってしまった。

ハルカは私と同じ年の男の子で、絵を描くことが得意で、画家になるのが夢だった。

次から次へと絵を描いて、その情熱も創作意欲も、止まることを知らなかった。

そんなハルカは私の幼なじみで、一番身近な憧れの存在でもあった。

いつだって強気で、優しくて、愛情深い。

ちよっとだけとんがった耳が特徴の、可愛い笑顔の男の子だった。

今居る駅のホームで、よく二人で電車を待った。

ハルカは絵画教室の帰りに、私はヴァイオリンのレッスンの帰りに。

ハルカは物知りで、色々なことを教えてくれた。

シモネタの言葉の意味を教えたり、様々な悪口を教えてくれたのもハルカだし…ぶっちゃけ、私の口が悪いのは、ハルカのせいだ。

フア。クからイホデプータ（スペイン語でサノバビ。ち的な悪口）まで、海外の悪口まで網羅して教えてくれたな…

…しかしくだらないことばかり教えてくれたもんだ。

…そういえば、話すことの半分以上があっち系の話だった気がする。

「おい香子、男のア。ルには、性感帯があるらしいよ。でも女にはないんだって。それってつまりは…」

「ハルカ、それ以上言ったら殴るよ」

毎日のようにこんなやり取りしていた様な…

…あれ？最低じゃね？

私は思い出して苦笑いする。

バカなことばかり言っていたやつだった。

でも、ハルカがいつも人を笑わせるようなことばかり言っていたのは、周りに気を使わせないためだったって、私は知っていた。

病気を持つてはいるけど、人と違つかもしれないけど、重荷だなんて思わないで。

俺は大丈夫だから、離れていかないで。

ハル力はずっと、そんなふうに思っていたから。

最後の発作の前の一週間、ハル力はちよっとおかしかった。いつもはそんなことないのに、ボケツとして上の空のことが多かった。

それに、いつもよりよく喋った。少し浮かれているように見えた。そのくせ、ふと真面目な顔をして、友人に「いつもありがとう」なんて、歯の浮くようなセリフを言ったりしていた。

今思えば、自分の死が近いことを、知っているような態度だった気がする。

私とハル力の両親と一緒に、ハル力を看取るのに間に合った私達の共通の友人、坂木宗護は、ハル力が最近、何かで悩んでいたと言っていた。

四六時中一緒にいた宗護にさえ、ハル力はその悩みを、最後まで明かさなかったという。

ハル力を思い出しているうちに、涙が出てきた。堪えきれなくて、思わず呟いた。

「誰にも本音を言わないままで…」

「死んでしまったら、誰がその気持ちを知れるのよ」

あんたを心配する私のこの気持ちも、もうどこにも行き場がないじゃない。

「誰も分らないままじゃん。あんたの気持ちを…！」

「いつも、聞かせてくれてたのに…！私にも言わないままで…」

最後にあなたが悩んでいたことは、何だったの？

「バカ…ハルカ…！」

やり場のない憤りは、溢れ出した悲しみに飲み込まれてしまって、涙が零れた。

ヴァイオリンケースに額をくっつけて、私は嗚咽を漏らす。

こんな気持ちを抱えて、このまま生きていくなんて。

そんなの無理だ。

どうしたら良い？

私はどうしたら良いの？

助けて、ハルカ…

いつも、助けてくれたのに。

こんなに辛くて死にそうなときに、そばにいないなんて。

ねえ、ハルカがいないなんて、耐えられないよ。

もう一度だけ…

会いたいよ、ハルカ。

「人が悲しむ姿は、祈る姿に似ている」

いきなり、私の背後から見知らぬ人の声がした。

それは、歌うような話し方だった。

驚いた私は勢いよく振り返った。

人がいた？いつから？全く気付かなかった。

私の座るベンチの背後に、真っ白な肌に真っ白な髪の毛、真珠のような色のサテンのスーツを着て、プラチナのように輝く白い瞳を持つ少年が立っていた。年は10才くらいの、小さな、けれどゾツとする程、美しい少年だった。

「香子、君を迎えにきたんだ。会いたい人がいるだろう？」

その大人びた口調は小さな少年にはミスマッチだけど、声は歌っているような、子供らしいボーイソプラノだ。

私は突然現れた少年に驚いていて、何も言えなかった。

白い少年は、そんな私に手をさしのべる。

「僕とおいで。君の願いを叶えよう」

「代わりに君は、僕達の願いを叶えるんだ」

私はどうしたらよいのか分からず、動けなかった。
必死に理解しようと、考える

この状況は何？

この少年の言っていることは…どういうこと？

そのときは、小さな子にからかわれているだけだとか、その言葉に意味はないかもしれないとか、何故か少しも思えなかった。
少年はただまっすぐに、私を見ていたから。

私は、思ったことをそのまま口に出した。

「私の願いを知っているの？」

間髪入れずに続ける。

「あなたに、叶えられるの？」

白い少年は、ゆっくりと頷いた。

「知っているよ。同時にあの子も願っている。だからこそ、君の願いは叶う」

あの子…

「ハルカが？」

私の問いに、少年はまたもや、ゆっくりと頷いた。

「君を待っているよ」

「…連れて行って」

私は「あの子」に、ハルカに、どうしても言いたいことがあった。

もう一度逢えるのなら、どんな事でも出来ると思ったから。

私はためらわずに、白い少年の小さな手をとった。

第2話 ステッペン・ブラック・ウルフ

気づいたときには、私の居た駅は影も形もなかった。

白い少年の手に触れた瞬間、真っ暗闇を真っ逆さまに落ちて行く感覚がしたかと思ったら、いつの間にか私は、草もまばらな荒れた地面の上に座っていた。

白い少年はまだ私の傍らに立っている。

私は座ったままの体制で、少年を見上げる。

「ねえ、ここ、どこ？私は何をしたら良い？あなたの願いつて、何？…そういえば、あなたは、誰？」

思い浮かんだことを、矢継ぎ早に私は少年に質問した。

少年は何の感情もこもらないプラチナ色の瞳で、私に言った。

「わたしが誰か、君は知っている。わたしの名前を探しなさい。それを見つけるまでは、元の場所へは返れない」

金縛りにあつたように動けないで、私は少年の言葉を聞いていた。

「君は道中、多くの人に出会う。そして、多くの困難に出会う」

淡々と話しながらも、少年の表情は少しも変わることがない。

「しかし君は、どんなことがあっても、『君』であることを誓いなさい。それが、唯一の道標であることを、忘れないように」

一体、どういう意味なんだろう…？

その言葉を言い終わるが早いか、少年の体から煙が立ち昇り、それ

と共にゆっくりと少年の体が透明になり、見えなくなっていく。

「あ…あ」

私は呆然とそれを眺めた。

「その狼の絵は、帰るときの鍵だ。なくしてはいけないよ」

少年が言った。

もうほとんどその姿は見えなくなってしまうていた。

私は叫んだ。

「ま…待って！ハルカは…？どこにいるの？」

「君が進む先に」

そんな言葉を最後に、白い少年は完全に霧散してしまった。

「ここはどこか、それだけ、聞けてないよ！！」

私は虚空に向かって叫んだ。

ため息をついて周りを見渡すと、そこは何もない、荒野だった。

赤っぽい地面に、痩せた草がいくつかまばらに生えているだけで、強い風が遮られずに吹き抜けている、荒れ果てた土地。

見渡す限りの荒野は、途中岩山で遮られている。生き物なんて気配

もない。あたりには、風が岩山を通り過ぎる音だけが響いていた。

ハルカに逢えるってことは…ここは死後の世界？
私、死んじゃったのかな？

まあ、今の私にとっては、ハルカに会えるならここが地獄だろうと天国だろうと、構わなかった。

「しかし、何にもない…」

空を見上げれば、雲一つない青空なんだけど…なんか太陽の色が薄い気がする。

ただそういう気候なだけかなあ？

そういえば、ヨーロッパの方では太陽は黄色く見えるらしい。…ならここは、外国ってことか？

いや、でも、砂漠では、太陽は白く見えると聞いたこともあったな…

しかしここは、何にもないけど、砂漠って言う程、枯れきっているわけじゃないし…

それに、光が弱い。

雲もない青空で、良い天気なんだけど、影もないのに、暖かくない。快適な温度だ。それに、この、空も地も…全体的に色が薄くないか？

いやまあ、季節が違うだけかもしれないけど。

私は頭を抱えた。この場所とはにかく、海外には違いない。

日本国内にこんな荒んだ場所があるとも思えないし。

ここは、何か焦げたような匂いと、何というのか…死の匂いがした。

生き物が、いない。

この場所には、私以外の生命体はいないと感じる。

乾いた地面、乾いた風。

マジで砂漠化する五秒前って感じだ。…古い？

いったいこれから、どうしたら良いのだろうか？

だんだん自分の選択は間違っている気がしてきた。あの少年の名前を見つけるまで、もとの場所には帰れないだなんて。

「名前を見つkerって…？」

本人に言われるなんて…意味不明だ。

自分の名前を、忘れてしまったとか？

何にせよ、変な使命だ。まず少年の正体を調べなければならないけど…

それに、

『君は、どんなことがあっても、「君」であることを誓いなさい』

という言葉。

正直、全く意味が分からない…

まあ、とにかくね。

いきなり荒れ地に連れてきて、そのまま放置されても！

…私に一体どうしろって言うの？

途方に暮れて、がっくりと頭を垂れると、ヴァイオリンケースがま

だ膝の上にあることに気付いた。
少し安心して、抱え直す。
ふと、ハルカの作ったステッカーをまじまじと見つめる。

ステッカーからは微かに匂いがした。
絵の具と、テレピン油と、整髪料の香り。それと、ハルカの肌の匂い。

自分にはない、男の子の匂いがした。

何だか懐かしくて、嬉しくなる。

「狼の絵って言ったら、これしかないよね…これが、鍵って？」
いったいどういう意味なのかと、私は首をひねる。

とにかく、ヴァイオリンをなくすわけにはいかないということだ。
肌身離さず持っていよう。
無意識にステッカーを撫でる。

そのとき、自分の爪が黒くなっていることに気付いた。しかも元より伸びて、先がちよっと尖っている。
なんだコレ？こんなネイルアートしてないよ？
凄く頑丈そうな、分厚い爪だ。じつと観察していると、突然、微かな音が耳に届いた。

遠くの方で音が近づいてくる。

人の気配がした。話し声もする。

私は爪から意識を移して、耳をすませる。
聞き慣れたこの音は…車のエンジン音？

それと、荷物がギシギシ揺れる音、地面の小石がはじかれる音…結構大きな車のような音。たぶん、トラックだ。

それと、様々な匂いがかすかに、風にのって届いた。
獣の匂いがする。ほかに、高そうな香水の匂いと、清潔な石鹸み
たいな匂い。

車のエンジン音はしても、ガソリンの匂いがしないことに気付いて、
私は違和感を感じる。

とにかくまだこちらからは岩山で見えない側を、トラックに乗って
大勢で移動している団体がいるらしい。

…って、さつきから、私すごくない？

まだ相手の姿も見えないのに、多分一キロ以上離れてるのに、音が
聞こえちゃうよ！？匂いもわかるよ！？何コレ！？

テンションがあがってウハウハしていると、いきなり、背後から人
の気配がした。

わずかに獣の匂いと、清潔そうな、ミントのような香りがした。

とつさに振り返ると、二十代くらいの青年が立っていて、私を見て
目を丸くしている。

整った顔立ちで、目と髪は薄い茶色、その髪を後ろに撫でつけてオ
ールバックにしている。

まず何よりも気になるのは、なんと彼、額から鹿のような角が生え、
耳が…ウサギの耳が、頭から生えている！！

それと…顔の横にあるはずの人間の耳が無い。

私はじろじろ観察してしまった。

特殊メイクだよな？

彼の服装は、青いシャツに濃紺のネクタイをして、ネクタイと同じ色の、ミリタリーテイストの装飾がされた細身のスーツ。…ロンドンの警官の制服を、サイズ直しておしゃれにしましたって感じ。足元は、ドクターマーチンっぽい形の、黒い編み上げブーツ。全体的に、ラフな格好とは言えない。

なんか、近付き難い雰囲気漂っている。

角とウサ耳がなければ、マフィアか警察官のどっちかかと思ってしまいそうだ。

その青年は、両手をポケットに入れたまま、立ち尽くしている。

「お前は…狼…か？」

青年は、心なしかのけぞりながら言った。

…何その態度。

あなたのコスプレの方がどん引きですよ。

その特殊メイク、何かの撮影でもしてるのかな？

…オオカミって？

その青年の、角も耳もまあいいとして…

見渡す限り誰もいなかったのに、彼は突然私の背後に現れた。

一体どこからやってきたのだろうか？

地面の中にでも居たのか？空から？

いや、どちらも有り得ない。今の私には断言できる。

何故か知らないが、さつきから、異常なほど嗅覚と聴覚が働く。こんなに近づくまで、今の私が気付かないはずがない。そんな気がする。

瞬間移動並みの、ものつつそい早さの移動方法があるのかな？
かく言う私も、少年に連れられて、瞬間移動よろしくこの場所に現れたのだし。

色々聞きたいことはあったが、私は一番気になっていることを聞いてみた。

「あの…あなたのそれは、ヴォルパーティンガー？」

ウサギに鹿の角の組み合わせと言ったら、ドイツの民話に出てくる、ヴォルパーティンガーだろう。

満月の夜だけ、美しい女性の前に姿を表すという、鹿の角の生えたウサギのことだ。もちろん、実在しないものだけど。牙が生えていたり、羽がついていたり、足が鳥の足だったりするという話もある。なんでこんなに詳しいのかっていうと、ハルカがこういうUMA（未確認動物）とか、幻の生き物とかの話が好きで、よく話していたから。私も覚えてしまったのだ。

「見たら分かるだろ。他の種族に見えるか？」

青年は私からじりじりと離れながら言った。

…すげえ警戒されとる！

何でか知らないけど！

それはおかしいでしょ。至近距離にいきなり現れたのはあなたの方ですよ！

ああ、けれどやっぱり、ヴォルパーティンガーの仮装か。私は予想が当たって一人頷いた。

口を開くと尖った牙もある。凝っているな。

それぞれは、ちょっと本物みたいに見える。ウサギの耳はたまにピクピク動いているほどだし。

しかしマニアックなチョイスの仮装だなあ。

いや、本場ドイツでは、定番だったりするのかな？ならここは、ドイツ？？

死後の世界とかでなく？

しかしその割には、言葉は理解できるけど。

「…お前は、狼に見えるけど…本当に狼か？そんなのは…初めて見たな」

ヴォルパーティンガー青年は、私に恐々と言った感じで話しかてくる。

何をそんなに恐れているのだろう。

こちらただのいたいけな女子高生なんだけど。

「とって食いやしないから、ビクビクしないで」

ビクつかれるのにイライラしてしまい、私はついそう言ってしまった。言うてから後悔する。

ああ、すごい気が弱い人なんだろうに、きつい言い方しちゃったかな…

私の心配をよそに、ヴォルパーティンガー青年（長い…）はあからさまにホッとして、笑った。

「ああそう。良かった。君はヴェジタリアンか。だから襲って来ないわけね」

エエエエ！？

本気にしちゃった！？

ただの言葉のあやじゃん！！そのまんまの意味で受け取っちゃった！？

私ってそんな危険人物に見える！？

ショックを受けている私に、先ほどまでの警戒が嘘のように、青年（もうこれで良いや）は、私に近づいてきて、親しげに話しかけてくる。

「僕は旅芸人なんだ。占い師が、僕らの一座がこのステッペンを通るなら、幸運な拾いものをするっていったのさ」

それを聞いて私は、じゃあ、トラックでこちらに向かってきてるのは、この人の仲間なんだな。と考えた。

「半信半疑だったんだけど、黒い狼だなんてね」

青年はにつこり笑って、ポケットから白い手袋をした両手を出して、胸の前に掲げ、ゆっくりと握り拳を開いた。

「占いは大当たりだ」

青年がそう言ったとき、その両の手のひらから、白い何かが同時に現れた。

白い…ヴォルパーティンガー？

伝承そのものの、茶色い鹿の角が生えた白いウサギが現れた。と同時に巨大化し、軽く大型犬位のサイズになって、二匹同時に私

に襲いかかってきた。

第3話 ステッペン・ブラック・ウルフ 2（前書き）

1日に一回投稿できるよう頑張ります！
誤字脱字ありましたら、教えていただけたら助かります。

第3話 ステッペン・ブラック・ウルフ 2

「わぁ！」

私はとつさにヴォルパーティンガー達を避けようと横に移動するが、避けた先に青年がいつの間にか移動していた。

私は、まんまと青年の胸に飛び込んでしまった。

瞬時に、青年の手が私の首と片手をとらえる。

「何する…！わうつ」

そのまま押し倒される形で地面に倒れ込んだ。

首を押さえつけられて、動けない私の腹と胸の上に、さっきの白いヴォルパーティンガーが二匹とも、どっかりと座り込んだ。

「ぐえっ」

白くてフワフワしたウサギの癖に、結構重い。

…いや、尋常じゃなく重い。

…てか、だんだん重さ増してないコレ！？

死ぬ！死んじゃう！！

私アワアワジタバタしていると、青年は私の首にかけた手に力を込めながら、言った。

「黒き狼よ、金の首輪の契約のもと、唯今から我に忠実を誓わんとするか？」

「はあ！？」

私は混乱して叫んだ。何も考えられない。

私の上のヴォルパーティンガー達は、さらに重さを増して行く。

こなきじじいか！！

あまりの負担に背骨が鳴る。

ギリギリ、自分の体が悲鳴をあげる音が、耳に届いた。

く…苦しい！！これはヤバい！潰れる！

しかも、胸の上にいる奴の重圧で、息をするのも辛くなってきた！

「い…っ意味が分かりません！それよりこいつら！どけて！重すぎる！」

「誓うと約束するならどけてやるよ。汝、我に、忠実を、誓わんとするか！？」

「誓う！誓うから！」

内臓飛び出るわあ！！！！

私が叫ぶと、青年は私の首から手を離れた。

同時に白いヴォルパーティンガーも、空気のようにかき消えた。重さは一気に感じなくなる。

私はホッとして息をつき、咳き込んだ。

あー！まじで死ぬかと思った！

「やっぱり狼か。すごい力だ…良かった、さつさと誓ってくれて。手加減したらこっちが危ないから、殺すところだったよ」

彼は笑顔で言う。

こいつ…ドSだ！

しかし、狼なんてどこにも居ないけど。
何の話をしてるの？

コロツと態度をひるがえし、青年は私の手を引っ張り上げて立たせてくれた。

「僕はヴォルパーティンガーの、ユリアン・フローゲ。君は？」

改めてコスプレの紹介までしてくれたよ。

…その格好、気に入ってるの？

…しかし！ユリアンてめえコノヤロー、乱暴された恨みは忘れないからな！

てゆうか、なにゆえあんないじめを受けたのかしら、私。

いやまず、いちばん気になるのは、あの謎のヴォルパーティンガー達だよ！どっから出てきやがったあいつら！

そしてどんどん重くなるなんて言う…手品だよね？

とにかく、本当に苦しかった！

内心はらわた煮えくり返りながらも、相手に名乗られてしまったのは、こちらが名乗らない訳にもいかない。
私はおざなりに応えた。

「雨宮、香子」

「アマミヤ?...宜しく、アマミヤ」

ん？名前が雨宮で、姓名が香子だと思われたかな？まあいいか。

「それではアマミヤ、僕らと一緒に来なさい」

ユリアンはにつこり笑って、手をさしのべてきた。

私はユリアンの態度の変わりように拍子抜けして、何だか調子のいいやつだな、と腹がたってきた。しかも、何故に命令形？

けれど、今はユリアンについていった方が、ずっとこの荒れはてた場所にいるよりは、自分の為になるかもしれない。
だって、一緒に来なさいって、トラックに乗せてってくれるってことだよな？

ひいては、ハルカに会い、白い少年の名前を探し出し...元の世界に戻るために。

移動手段が、あっちから来てくれたわけだ。
これは、ラッキーだと思っていいいんじゃないか？

その口調が気に入らなかったから、私はユリアンを睨む。
ユリアンは首をかしげる。

まあ、とりあえず、利用してやる……じゃなくて、好意に甘えようか。
しぶしぶ私は言った。

「宜しく、ユリアン」

第4話 レン！ヴォルフ・レン！（前書き）

話が進むのが遅い…精進します。

第4話 レン！ ヴォルフ・レン！

ユリアン・フローゲは、今まで私が出会った人の中でも、一番のドSだった。

…ヤっちゃっていいですか？

ユリアンはいきなり襲ってきたと思ったら、コロツと態度を変え、私を旅芸人の一座と一緒に来ないかと、誘ってくれた。

まあなんで誘ってくれたのかはよくわからないけど、こいつを利用してやる、と内心では怒りを燃やしつつ、私はそれを快く承諾。

今はこちらに向かってくるトラックを二人で待っている。トラックはまだ遠く岩山の向こうに居るようで、一向に姿が見えない。

超人的な今の私の五感で、音や匂いが近づいて来てるのはわかるんだけど…

地面に座り込んでいると、ユリアンが口を開いた。

「アマミヤ、こんな所で何してたの？」

ですよね！！

こんな生き物が住めない荒野に、一人で居るなんて、意味分らないもんね。

…理由なんて私が知りたいよ！

私は、とりあえず正直に話した。

ユリアンが白い少年について、何か知っているかもしれないし。

全身白い少年に、いきなりこの場所に連れて来られた。けど、ここ

がどこか全然分らないこと。

ハルカについては言わないことにした。
話が長くなるし、人に話すのは、まだ辛い。

「全身白い少年… とういう種族だった？」

種族って… 少年って言うてるじゃん。人間以外にないでしょ。
ユリアンが何を聞きたいのか、私にはいまいちよく分からない。

「とにかく、君はここがどこか分らないんだ。僕が教えてあげようか？」

ユリアンは何故かもったいぶって言う。

私は疑問に思いながらも、教えて欲しいと言った。

「なら、ちょっと狼になってみてよ」

ユリアンは平然と言った。

「ハイ!？」

何言ってるのかしらこの子!？

それともこれはドイツ風ジョーク!？
それなら、どんな返しが正解なの!？

困惑して私が応えられないでいると、ユリアンはニヤリと不吉な笑い方をした。

私にさっき白いヴォルパーティンガーをけしかけたときの悪い顔だ!

私はとっさに立ち上がって後ずさり、ユリアンと距離をあけた。

ユリアンは立ち上がって、言い放つ。

「金の首輪の誓いにのっとって命ずる。黒き狼よ、真の姿を見せてくれ」

どうした！？

色々大丈夫！？

主にアタマ！！

とか、心の中でつつこんでいたら、急に首が熱くなってきた。

「！？」

首に触れてみると、今まで気付かなかったが、私の首には首輪がついていた。

いつから！？てゆーか、何で！？

…こいつにさつき、首、絞められた様な…

…てめーかぁ！ユリアン！

本当に筋金入りのDSだね！

言っとくけど、私はMじゃないから！

そんなプレイはお断りですよ！

私は飛び退いて、ユリアンとの距離をとった。

すごく焦っていたとはいえ、そんなに激しく動いてない筈なのに、私の体はユリアンの背丈以上の高さまで飛び上がっていた。

…え？

とんつ

そして鮮やかに着地する私。

10点！！

…気のせい気のせい。疲れてるんだわ、私…

気を取り直して首輪を再度触って確認する。

首輪は革ではなく、なにかツルツルしたもので出来ている。触り心地は金属のようだ。

触っても熱くはない。

あれ？さっき首が熱かったのは、気のせいかな？

そう思っていたら突然、足から力が抜けてきて、私はガクリと地面に膝をついた。

「…え？」

すると、今度は腕が勝手に動き始め、両手を地に着いた私は四つん這いの体勢になっていた。

なんじゃこりゃあああ！

体を起こそうにも、体は全く言うことをきかない。

パニックになった私は、無意識のうちにのどを鳴らして、うなり声を上げていた。

ユリアンがちょっと困った顔をする。

「怒るなよ。もうやらないから…（たぶん）」

たぶんって言ったな今！小さい声でもはっきり聞こえるんだよこちら！

もうやらないって言うなら、この体の自由がきかなくなったのは、ユリアンに原因があるらしい。

おそらく、さっきの口上るとき、この首輪の、私の体の自由を奪うような仕組みが作動したんだろう。電撃とかで、神経を麻痺させるとか？知らんけど。

なんて恐ろしい道具だろう。市販されているのかな？…ドイツでは、こういう道具はいっぱいあるのだろうか？

ドイツ…恐ろしい子…じゃなくて国…

しかし、この状況は、何だかすごく屈辱的だ。

ユリアン、絶対ぶん殴る！

まあ、いま、動けないんだけども。

私が屈辱に耐えながら、四つん這いのままフリーズしていると、突然私の視界は、真っ黒に塗りつぶされた。

「何！？何コレ！？」

何にも見えない。目をつむっているわけじゃないのに。

何にも分からない暗闇の中で、体温が急上昇するのを感じた。体中の血が沸騰しているような気さえする。

熱い！いやもう熱いどころの騒ぎじゃない！

体が燃える！

そう叫ぼうとした、その瞬間、視界は霧が晴れるように明るさを取り戻す。辺りを見回すと、すっかり元に戻っていた。

何だったんだ、今は…

私は首を傾げる。

そのとき、何だか、体が軽くなったことに気付いた。

…おお？何だろう、この…湧き上がる開放感！？

今なら、何でもできそうな気がする！！

私…私、フリーダム！！！！！！

居てもたってもいられずに、私は走り出した。

「うわ、ヤバイ！」

ユリアンの小さな叫びが聞こえたが、知ったこっちゃない。あんなドSほつといて、とつとあのトラックのどこ行っちゃおう。

私は軽やかに走った。

早い。我ながらめちゃくちゃ早い。

さながら飛ぶように、風をきる私の体。

耳元で風がビュウビュウと鳴く。

体中に力がみなぎってくる気がする。

血が騒ぐってこういう感じなのかな!?

けど私、特に運動得意ってわけでも、運動音痴でもない、良くも悪くも普通の運動神経のはずなんだけど…。

そう考えている間にも私は、すごい速度で荒野を移動し、遠くに見えていた岩山に近づいて来てしまった。

…さてよ。

私、今、四つん這いで走って、この速度なんですけど。

…ん?

戸惑って、自分の手元を見下ろせば、黒い毛皮に覆われた、動物の前足が見えた。

…え?

いやいやいやいや、私こんなに毛深くないよ!?

…よし、落ち着こう。

この足、私の?

私はノリノリで走っていた足を止める。

立ち止まって自分の足を、体を、眺める。
黒い毛皮で覆われている体。

前足、後足。

私自身が動かしているはずのその体は、どう見ても人間の体ではなかった。

最後に目に入ったのは、黒い大きな、犬みたいな、しっぽ。

さすがに信じられなくて、しっぽを動かそうとしてみる。

私の感覚に沿って、パタリと、しっぽが振られる。

…これ…

もしかしたら…

もしかしなくても…

私…

人間じゃ、なくね？

ノオオオオオオオオ！！！！

と叫んだつもりが、悲しげな狼の遠吠えが、荒野に響き渡った。

私がつろたえていると、ウサギがチヨロチヨロ近づいてきた。

フワフワの茶色い毛皮に、黒い鹿の角、背中には毛皮と同じ色の翼、かわいらしい顔に不似合いな、鋭い牙。これぞヴォルパーティンガ

ーだ。

私は考える。

私の体がついさっきまでは人だったはずなのに、あの暗闇に取り巻かれてからは、どうも、黒い毛皮の、獣の姿になってしまったらしい。

そして、目の前には民話の伝承そのままの、ヴォルパーティンガーの姿。

先ほどヴォルパーティンガーと名乗った青年。

それに、彼は私のことを黒い狼と呼んだ。

黒い毛皮に覆われた、私の体…

私、狼なんだ？

ひらめいた。しかも私はなぜか、その奇想天外な結論を、ストンと納得してしまった。

この茶色いフワフワの、ヴォルパーティンガーはきつとユリアンだ。

もしかしたら…ここは、私のよく知る世界とは、異なる場所かもしれない。

つまり、ここでは動物はみんな、人間の姿になれるってこと？または、人間はみんな、動物の姿になれるのかな？

私の聴力と嗅覚が異様に鋭くなっていたのは、私がイヌ科の、狼になれるからなのか。
合点がいった。

何この大变身…

ん？待てよ。

ユリアンと会った時、私は人の姿だったはずだ。

自分でも覚えているとおり、二足歩行だったし、毛皮でもなかった。高校の制服を着ていたし。

なのに、私を見た瞬間ユリアンは、「君は狼か？」と言っていた。

ユリアンは、人の姿をしていたが、角とウサギの耳がついていたし、牙もあった。

ということは…

私も、耳がついてたのかも！？

………きもっ

いぬみみ…じゃなくて、狼耳？

アイタタタタタア！

私、痛い人だ！確実に痛い人だ！

全身骨折及び全身裂傷及び大火傷だよ！
命に関わる！

いやだ！気持ち悪い！

私っしたら気持ち悪い！

ユリアンみたいな美形には、まあ、変だけど、許されると思う。イケメンには何でも似合うよ。でも、こんな私に、美形とか言われた

こともない私に、獣の耳がついてたりしたら、ただひたすら、キモイだけでしょ！！

外見が変わっちゃうなんて、聞いてないよ！白い少年めえ！

私はユリアンに話しかけようとしたが、うなり声しか出なかった。あ、さすがに、狼の口で、言葉の発音は無理か！？

ユリアンが近づいてくると、私はちょっと思った。モフモフした首もと…なんて愛らしい。

噛みつきたい…

おつとお！いかんいかん！
思考まで狼になってどうする！

私は頭をブルブル震わせ、人間に戻りたい、と思った。すると、視界が真っ暗闇になる。あ、さっきと同じだ。ということは…

目の前が元に戻ると、私は人の姿に戻っていた。

私は安心して胸をなで下ろした。一生狼の姿とかじゃなくて良かった…

そして、ユリアンの方を向く。ユリアンもいつの間にか、人型に戻っていた。

聞きたいことは山ほどあるけど。まず…

「ユリアン、この首輪は何？」

怒気を含めて私は言った。

ユリアンは、驚愕の表情で私を見た。

「…知らなかったの？」

「さっき誓ったことが関係あるの？」

「そうか…だからほとんど抵抗しなかったのか…説明してあげるよ。でも、怒らないでよね」

それは無理。

ユリアンは、めんどくさそうに話し始めた。

「それは金の首輪。ガニシュカと金から作られている…」

「ガニシュカって何？」

そんなことも知らないのか、とユリアンはうめいた。

いいから教えて、と私は先を促す。

呆れるよ…とこぼしながらも、ユリアンは丁寧に説明してくれた。

「ガニシュカは、鉱物だよ。貴重なものだ。採れる高山は、この国と、隣の国にしかない。ガニシュカには、人の体を支配する力があるんだ。けど、ガニシュカだけではこの首輪はできない。この…」

そう言いながら、胸元からネックレスを出してきた。歪な形に削られた水晶の様な石が、革ひもにぐるぐる巻きにされて、ぶら下がっている。

「この石、ヤヌシュカ。これは触れている人間の意志を、ガニシュカに送れるんだ。元々1つの石から出来ていて、対になっている。2つ一緒に使うと、人を操れるんだ」

「…」

私は返す言葉を失った。なんて危険な石だ！！

「あと、これには魔法もかけてある」

「魔法！？」

耳を疑う。

何てことだ。まずその石の作用からして有り得ないのに、魔法ときた。

…まあ、自分が狼に変身した時点で、もう何が来ても受け入れられる気がするけど。

「これは、首輪をつけた人に、つけられた人が誓いをたてれば、首輪をつけた人だけが、ヤヌシュカの効力を使用できるって制約の魔法」

「つまりアママヤ、君の場合、僕だけが君に命令できる…ってわけ」

「ええ！？」

なんだそりゃあ！

言ってみれば、自分だけの奴隷が作れちゃう道具だぜ

ってことじゃないか!!

危険このうえない!

てゆーかどっちにしろ今の私はどうしたって、こいつの言いなりってこと!?

それだけは嫌だ!!!!!!

第5話 サディスティック ラビットボーイ

「アマミヤ、いま僕は君を、どうにでもできるんだよ」

ユリアンはそう言つと、片頬をゆがめて笑う。

このドSが…!!

私はこのS男、ユリアンに首輪をつけられてしまった。その首輪と
いうのが、なんと体を支配されてしまうという恐ろしい道具。

私、大ピンチに直面しています！

どうしよう…

人をコントロールできる石なんてものまであるし…

…うん？そのコントロールをする石を、ユリアンから取り上げれば、
私に命令出来なくなるんじゃない？

それだ！

しかしこれ、ほとんど反則な道具だよね。

これさえつけてしまえば、誰でもかかれても自分の奴隷 じゃないか。
だからこそ、こんな万能そうな道具には、どこか落とし穴がありそ
うなものだけど…。

とにかく、ユリアンから石を奪うのが一番早い。

私はちらりと、ユリアンの持つ、ヤヌシユカという鉱物からできた
鍵（いわば私のコントローラー）を盗み見た。

しかし、そんなことはユリアンにはお見通しだったようだ。

「アマミヤ、ヤヌシユカは渡さないよ。…それにどっちにしろ、もうそろそろ、時間切れだ」

ユリアンはそう言いながら、首輪に手をかけた。カチリと音がして、私の首にかけられていた首輪が外れ、ユリアンの手に落ちる。

「あれ？外してくれたの…？」

私は拍子抜けして、ユリアンを見る。

ユリアンは首輪を示しながら、苦笑を浮かべた。

「この石は、使用者の魔力をエネルギーにして作動するんだ。だから、魔術師にしか扱えないし、僕の魔力じゃ…20分くらいが限界だね。それと、これの有効な範囲は限られてる。ガニシユカとヤヌシユカが離れすぎるといけないんだ。これも、僕の魔力だと、三百メートルくらいだ。君が走って行っちゃった時、ちよつと焦ったよ」

「…まじで？」

「まあ、こんな危険なものがあるって知れて、勉強になったんじゃない？」

ふざけんなああああ！！

めちゃくちゃ焦ったよ！

私の人生終了かと思っただよ！
泣きそうだったんだから！

タイムリミットや範囲があるんだつたら先に言えよ！ドSなだけじゃなく、性格もだいぶ歪んでるな！

マジで許せん。ユリアンこのやろう！

ユリアンはびつくりした？と言って笑っている。
私が恨めしげな目を見ると、平気な顔で見返してきた。

「怒るなって！君が狼だから、僕だって必死だったんだよ。だいいち、君が本気を出したら、僕は簡単に死んでた自信があるね。君が優しい狼で助かったよ」

本気なのか馬鹿にしてるのか、よくわからない。

まあ、首輪も外れたし、と私は納得いかないが、頷いた。

けれど、笑って誤魔化してはいるけどこんな道具、普通の精神で、平気な顔で他人に使えるものだろうか。

ユリアンがコレを使う原因が、私にあるんじゃないか？

「でもユリアン、本気で、私が嫌いなんじゃないの？」

ユリアンの顔を見上げて私は言った。

彼は急に、顔を曇らせた。

「…大嫌いなさ。忌まわしい…悪の種族。…狼…なんて」

ユリアンは悲しげな顔で言った。怨みがこもった声と、その表情は合致しない。

けれど、私は納得していた。彼は私ではなく、いや、私を含めた、狼という種族が憎いのだ。

だから…私に会って、ためらいもせずにこんな、人権って何だっけ

？な道具が使えたのだ。

私は無意識に疑問を口にした。

「ユリアン、狼に何をされたの…？」

私はユリアンの悲しみに歪んでいた顔が、驚いた表情に変わるのをじっと見ていた。

けれど、ユリアンは頑なに顔をそらした。

「いや…忘れて」

彼はそれきり口を閉ざす。

私たちは無言で立ち尽くしていた。

気まずいなあ…

すごい言われようだ。忌まわしい、悪の種族って…ちょっとへこむ。なったばかりではあるけど、私も狼なのだから。

しかし、種族でひとくくりに、悪とか善とか決めちゃうのは、おかしいと思う。場所も生まれも外見も関係なく、人には悪い人も良い人もいるんじゃないかな。

けれど何故だか、彼自身そんなふうな偏見をしたい訳じゃないのは、という気もした。狼を忌まわしいと言った時、彼は憎しみではなく、悲しげな表情を浮かべていたから。

だからきつと、悪い狼に何かされて、そのせいで、狼を嫌うようになったんじゃないだろうか。

きつと、私に会って、戸惑っている。彼は、迷っているのだ。私に

対する態度を。

私は狼だけど、ユリアンを苦しめた人とは別人だから。

私は悪人じゃないしね！たぶん！

悪いことは…ちょっとはしてるかもだけど…すごい悪いことはしたことないもん！

たぶん！

ユリアンに対しての怒りはいつの間にか収まっていた。

彼が私に対してひどいことをしたのは、彼が私の今の姿、狼が憎かったから。私自身に対して、憎しみがあるわけじゃない。…よね？さっき会ったばかりだもん。

それと、ユリアンは先ほど、私が狼だから首輪をつけた、というようなことを言った。もしかしたら、狼という種族は元々、この世界の人々に嫌われているのかもしれない。

あの白い男の子ったら…

厄介な姿にしてくれちゃって！

初対面のユリアンにびっくりするほど嫌われて警戒されるくらいだから、他の人にも、狼ってだけで嫌われちゃうことがあるそうだ。何でこんなことになったのか…

白い男の子に、心のなかで怒りを燃やしてしまう。

色々と説明不足でしょう！

ユリアンはさっきから無言で、腕を組んで遠くを見ている。

今は、ユリアンに話を聞くべきだと思った。

私はユリアンに近づいて、その顔を見上げる。

「ユリアン、何も知らないのに、でしゃばったこと言って、ごめんね。でも、もし嫌じゃなければ、あなたが狼を憎む理由を聞かせてくれない？」

私はじっと、ユリアンを見つめる。

ユリアンは戸惑った顔で、一度視線を外す。
けれど、とにかく懇願して見つめ続ける私に根負けして、目を合わせて、しぶしぶ頷いた。

第6話 ユリアン・フローゲ・ディストーション（前書き）

ユリアン視点です。

第6話 ユリアン・フローゲ・ディストーション

「…聞かせて」

アマミヤは僕の目を真っ直ぐに見つめてくる。

絶対に視線が揺らぐことのない彼女のその迫力に、僕は頷いてしまった。

けれども、さっき会ったばかりの、しかも狼なんか語る話があるわけない。

それに、僕はもともと、他人に自分のことを話す気は無い。

僕とアマミヤはその場に座り込んだ。

トラックは、もう10分もしないうちにやってくるだろう。

仲間がいれば、さすがの狼でも逃がしはしない。

それまで、この狼を引き留めて置かなくちゃならない。

僕は口を開いた。

「君は、狼が世間でどんな立場にあるのか、知らないとか言わないよね？」

アマミヤの態度は、自分自身の、と言うか、狼という種族に対する社会の評判を全く知らないみたいだった。

僕に会ったとき、何の警戒もしていなかったことから見て、明らかに世間知らずな事は分かった。

「うん。全然知らない。教えて」

アマミヤは案の定頷いた。

僕はため息をついて、説明を始める。

狼という種族は、毛皮が上等なうえ、獣型の時の体格が人間並みに大きいので、毛皮をとる目的で乱獲された歴史がある。

だから、現在はレッドデータアニマル（絶滅危惧種）に登録されている種族で、狼専用の保護地区も存在する程、手厚く保護されている。

しかしその凶暴性から、自己防衛という名目で殺されることが未だにある。

特に無法地帯では、狼にとっては敵だらけだと考えた方がよい。一般的に狼は凶暴で、その上とんでもなく強い。襲われる前に倒せ、と考える人の方が多いだろう。

しかし逆に、街に住む狼は安全だと言われる。狼の様な猛獣種が街に住む場合、許可をとらなきゃ住めない街が多く、審査をされるのだ。その審査をパスした狼なら、人を襲う心配はない…と言われるている。

「…君はそういう種族だ。社会的にはね。だから、僕の最初の態度も悪かったとは思っけど、自分から仕掛けなきゃ殺されるって思ってのことなんだ。わかってくれる？」

未だに、狼の毛皮は裏では高値で売買されているし、生きたままの狼はもつと高額で取引されていることは、言わないでおく。さすがに、これ以上警戒されるのは避けたい。

話を終えた僕は、アマミヤを見た。

僕の話身をじろぎすらしないで聞いていたアマミヤは、小刻みに頷

いた。

「よく分かった」

心なしに顔色が悪くなっている。…当たり前か。毛皮をはぐとか、大分嫌な話だよな。

ちよつと僕は話し過ぎたらしい。警戒されない訳がなかったか…。

話を変えようと、僕はアマミヤに質問する。

「本当に何にも知らないんだ。一体君は、どこで育ったのさ？」

全身が白い少年にこの場所まで連れてこられた、とさっき言っていたが…とにかく何らかの魔術にかけられてここに移動したのは確かだ。

しかし元は、何処で暮らしていたのだろうか。

黒い狼なんて珍しすぎて、有名になっただけでもおかしくないのに。狼は基本、白かグレーか、薄い茶色の毛皮を持つと言われている。

「…遠くにいたよ」

彼女は曖昧な返事で僕の質問を濁そうとする。

気になって僕は更に聞いた。

「外国の生まれなの？」

「うーん、まあ」

アマミヤは、歯切れの悪い返答しかない。

「どこの国？」

「…島国」

島国？そんなものは無数にあるじゃないか。いちいちはぐらかす奴だな。

何か隠したいことがあるんだろうか。

「…家族は？」

「いるよ。お父さんとお母さんとアホな兄貴が二人」

アマミヤは、それだけは即答する。

僕は少し、羨ましいと思った。

「ユリアンは？」

思い出したようにアマミヤは聞いてきた。

僕は不意をつかれて聞き返してしまう。

「え？」

「家族は？」

「…妹が…一人。今はちょっと、一緒にいられないんだけど…」
僕は答える。

彼女にまっすぐに見つめられて、何だか落ち着かなかった。しかし、落ち着かないけれども、何故だろう、嫌な気はしない。

しかし、相手は狡賢く、人食いで悪名高い狼だ。
油断するな。

そう僕は、自分に言い聞かせる。

さっきの金の首輪は、思いのほか魔力の消費が激しく、すぐに外れてしまった。

この狼が本当にヴェジタリアンだとしても、さっきの怪力で挑まれたら、僕は易々とやられてしまうだろう。実際、さっき首輪の誓いをしたときは、彼女があと一瞬でも誓うのを拒んでいたら、魔法を持ってしても、押さえ続けられなかった。

僕のヴォルパーティンガーの精霊も、もう殆ど実体化しているギリギリだった。あの重さは、普通の人だったら背骨が折れているはずだし。

実際のところ僕は、ほとんど殺すつもりでかかっていたのだ。狼が、憎いから。

全く、忌々しい程、狼は頑丈な生き物だ。

でも僕は、そんな狼にもう一度首輪を着けなければならない。

さつき着けた金の首輪には、僕の奴隷にする魔法以外にも、最後に着けた人を記憶する魔法がかけてある。この魔法に魔力を食われすぎて首輪はすぐに効力を失ってしまったが、これがあれば何処にいても、この狼の居場所を探索出来る。

アマミヤを…この狼を、逃すわけにはいかないから。

次の、純粋な金の首輪は、最低でも2日は保つはず。

突然背後に現れた僕を、この狼は少しも警戒していなかった。だから僕は余裕を感じて、探索用の首輪を先に使った。

首輪を一度に2つ使える程、僕は魔力に長けていないし、魔力の限界もある。もし今取り逃がしたとしても、絶対に逃れられないよう

に、保険をかけたのだ。

「それと…、ベガーズ・バンケットが家族みたいなものかな」

僕はそう言って微笑んだ。

さっきアマミヤに、親切にこの金の首輪について説明したのは、2つ理由がある。

僕を信用させるため。それと、もう一つの理由は、金の首輪を、装着しないと効果がないと思わせるため。

この首輪は、少し触れているだけで効果があるのだ。

この大人しい狼は、僕の丁寧な説明で僕を信用しているはずだから、ちよつとくらい首輪が肌に触れても、油断してくれるはずだ。

本当に危険な道具だから、実際これらの道具は所持も使用も違法なのだが、アマミヤがそれを知らなくて助かった。

しかし、ピストル並みに有名な道具なのに知らないなんて…世間知らずにも程がある。変わった狼だ。

とにかく今は、僕を信用させてやる。

この狼を手に入れるために。

相手が「黒い」生き物で、しかも「狼」なら、使い道が山ほどある。

さつきは感情が抑えられなくて、僕が狼を憎んでいることが伝わってしまったが、もうそんなヘマはしない。

僕を信用させて、この世間知らずな狼を僕のものにする。

僕達の、そして妹の、未来の為に。

簡単だ。こんな警戒心の無い奴。

さつき僕に首輪を着けられておいて、まだ僕を信用しているじゃないか。

「僕たちベガーズ・バンケットは、この国、サンディニスタでは、最大級の旅芸人の一座なんだ。…聞いたこと、ない？」

僕の言葉に、申し訳なさそうにアマミヤは応えた。

「……ない」

「まあ、君は遠い国の狼みたいだし、知らなくて当然か。僕たちは国内から、色々な国まで、旅興行して回ってるんだよ」
僕は優しく笑って言う。

「へえ…ねえ、どんなことするの？」

アマミヤは興味を惹かれたらしく、質問してきた。

「僕達がやるのはサーカス。…サーカスは知ってる？」

アマミヤは片眉を上げて見せて、たぶん、と言った。

「芸人や動物がいて、色々すごい技を見せてくれるんでしょう？」

アマミヤはものすごく簡単に説明した。

まあ基本的にはその通りだ。けれど…

僕は頷いて、でも、と続けた。

「僕達の一座はちょっと変わってて、昼間は、シルク・ド・クレール、夜の公演では、シルク・ド・ノワールと呼ばれてる」

「夜の公演？」

アマミヤは首を傾げる。

「昼間は普通のサーカス。空中ブランコやなんかの、一般的なやつ。でも夜に開かれる公演では、珍しい生き物や、超至近距離で見られる猛獣のショーがあるんだ。特別な招待客以外はお断りの、危険なステージだよ」

僕の説明に、アマミヤは目を輝かせる。

「何それ！楽しそう！」

純粹に好奇心を働かせるアマミヤに、僕は少し罪悪感を感じた。この説明は、嘘ではない。嘘ではないが、全てを語っているわけではない。

シルク・ド・ノワールの本当の目玉は、人や獣の売買にあるのだ。

この黒い狼を手に入れて、その商品にする。それが、僕の本当の目的だ。

狼は、その美しさ、希少性、凶暴性も合わせて、人気が高い。

おまけにアマミヤはものすごく珍しい…黒い毛皮。はつきり言っておそらく彼女は、信じられない程の値で売れるだろう。

僕たちには金が必要なのだ。そんな大金、喉から手が出るほど欲しい。

だから、この黒い狼が欲しい。

現代社会において、人身売買が行われることを、ただの都市伝説だ
と思う人もいる。

けれどもこれは、何千年も前から行われ、現在でも確かに脈々と受
け継がれている、忌まわしい風習だ。僕のいる一座では、人身、獣
身売買が、収入源の一つなのだった。

貧しい地域では、自分の子供を僕達に売りつける親だって、少なく
はない。

…これは、必要悪なのだ。

公演で訪れた街で人や獣を仕入れ、他国で売る。

金持ち、貴族、王族。

国によって階級制度は違うが、どこの国にも、どこの街にも、平気
で人を金で買う、腐った奴はいるのだ。

「…ユリアン？」

考え込んでいた僕は、アマミヤの声で、現実に戻された。
慌てて取り繕う。

「あ、ごめん。何？」

「さっきから、何考えてるの？」

アマミヤは不思議そうに言った。

「別に何も…」

「ユリアン、無理しなくていいよ。私なら、ここに置いてっても構
わないから」

僕は適当に言い訳しようとしたが、アマミヤのその予想外の言葉で、返事に詰まってしまった。

「私の種族が嫌いなんですよ？ユリアン、親切に色々教えてくれてありがとう。私は、自分で何とかするから」

アマミヤはそう言った。心なしか気遣わしげに僕を見ている。

「…は？」

率直な言葉で拒絶された気がした。

ハツタリが通じていない。

僕の取り繕った態度は、全く効果がなかったらしい。

僕は慌てた。

アマミヤはもう既に立ち上がって、この場を離れようとしている。

「ま…待てよ！」

ここまできて、逃すわけにはいかない。僕はとっさに彼女の手首を掴んだ。

アマミヤは慌てる僕を見下ろして、真っ直ぐに見つめてくる。

「ねえ、話したくないなら聞かないし、言わなくて良いよ」

彼女の目は、揺るがない。まっすぐ、まっすぐ、僕を見る。

「だけどユリアン、何か私に、言いたいことがあるでしょ？」

「言って」

僕は彼女に見つめられたまま、どうしても目をそらせなかった。

魅せられたように。

真っ黒な、夜の闇のような、日なたの影のようなその目に、吸い込まれそうな気さえた。

「あなたの話を、聞かせて」

無意識に、言葉が口について出た。

「…友達が、いたんだ」

アマミヤはじつと僕を見ている。

「僕の…名前をつけた人だった」

僕の目からふいに、涙がこぼれた。

「狼が…殺したんだ」

「狼が…お前が、あいつを殺したんじゃないか！」

頭では、わかってる。その狼は、目の前の少女とはなんの関係もないのだ。

それでも、僕の涙は、僕の憎しみは、治まらなかった。

大切な人を殺した狼を、僕は、許せない。
僕は…

そのときだった。

じっと僕を見つめていた筈のアマミヤが、いきなり僕の方に倒れ込んだ。

僕はとっさに、アマミヤを抱き止めた。

「ユリアン！」

「大丈夫か？」

「狼相手に、一人でよく生きていられたな」
聞き慣れた声でした。

気づけば、ベガーズ・バンケットの仲間の、双子のフォン、ロビン・ファキネッティとニコラが僕の背後に立っていて、リングマスター（座長）でペガサスの、ヴァンゲリス・オデュッセウスが、アマミヤの背後に立っていた。

第7話 ユリアン・フローゲと当たらない占い（前書き）

またまたユリアン視点。ちょっと番外編みたいな感じですよ。

第7話 ユリアン・フローゲと当たらない占い

今日の朝、ミセス・グレタが占いをしていたとき、丁度僕はすぐ側にいた。

僕はそのとき、テントの雨漏りの修理をしているところだった。

一座には器具専門の職人もいるのだが、資材調達に出払っていて、とりあえずの応急処置には、魔法を使った方が早く安全にすむ修理だったので、一座で唯一の魔術師である僕がやらされることになった。

めんどくさい、と思いながらも修理していたときだ。

「ユリアン、ちょっとちょっと」

ミセス・グレタに名前を呼ばれて振り返る。

ミセス・グレタは120歳を超える小さなおばあさんで、いつも濃い青色のビロードのマントを着ている。それは、神秘的な雰囲気を出す為だとか。だけどその下に着ているのは、田舎っぽい花柄のワンピースだ。

彼女は、ベガーズ・バンケット一座のいちばんの古株。

大フクロウ、ストリクスの種族で、占いや予言をするのが得意だ。公演のない日や幕間に、客を相手に占いをして金を稼いでいる。

「何？」

僕は手を止めて、高いテントの骨組みの上から、ミセス・グレタに返事をした。

大分高いところにいるのに、ミセス・グレタのしわがれた声は良く響く。

「今日、あんたはステッペンに行くべきだね」

「ステッペン?... なんでさ?」

ステッペンは、今僕等がショーを開いているこの街、ヒッツヴィルの外れにある荒野で、生き物が生息できない、死んだ土地だ。そんな所にわざわざ行ったところで、何もないに決まってる。

僕はミセス・グレタを渋い顔で見つめる。

彼女の占いは当たるときもあるし、外れるときもある。しかも、客には評判が良いんだが、仲間うちにする占いは何故かほとんど外れるものだから、いちいち構ってられない、というのが本音だ。

「ステッペンに、素晴らしいものがあるよ」

彼女は僕の反応なんて気にせず、にっこりと笑って言う。

「あんたを救うものが、そこで待っている」

「僕を救うものー?」

意味が分からない、そう僕は言っただけ、修理を再開する。骨組みを片手で支え、溶接部を魔法で熱して外す。新しい部品を浮かせて、上まで移動させる...

「信じていないのかい?」

ミセス・グレタはなおも言った。

僕は首をすくめる。

「ステッペンにあるのが、あんただけじゃなくて、あんたの妹も、救うものだとしても?」

ミセス・グレタはそう言っ、首を傾げる。

「…何だと?」

僕は手を止めて、ミセス・グレタを睨みつける。

僕の妹の話は、僕の前では禁句だ。

ミセス・グレタはそれをよく知っているはずなのに。

しかし彼女は、にこにこ笑ったまま、僕の視線を受け流す。

「さあユリアン、ステッペンに行っておいで」

彼女はそう言うが、僕はステッペンに行く気なんて無かった。占いなんて信じてない。けれど、リングマスターのヴァンゲリスは、ミセス・グレタの占いをちよつと病的なほど信頼している。

「ヴァン、ちよつとちよつと」

「何だい? ミセス・グレタ」

ミセス・グレタはヴァンにさっきと同じ占い結果を告げた後、「ステッペンにあるのは、一座にも大きな利益をもたらすものだよ」と付け加える。ヴァンはすぐに「行きましよう」と頷いた。

いったい何の弱みを握られているんだと、僕は思わずにいられなかった。

そもそも、ステッペンに何があるって言うんだ？そう聞いても、ミセス・グレタはにっこり笑うだけ。

ちょうど今日は、ショーは休みで、ステッペンから近い隣町のイコライザに商品（つまり、人や獣）を仕入れに行く予定があった。僕を入れて4人ほどの仲間と、イコライザからの帰り道に、ちよつと遠回りになるが、ステッペンを経由することになった。

ステッペンに近付くにつれて、ヴァンがそわそわし始めた。ヴァンはミセス・グレタのように予言ができるわけではないが、勘が良い。僕はミセス・グレタの占いより、ヴァンの勘を頼りにしている程だ。

トラックを運転している僕に、助手席からヴァンが言った。

「ユリアン、運転を代わるから、先にステッペンの中に行って、様子を見てきてくれないか？」

「ええ？嫌だよ。どうせ何もないうて」

ミセス・グレタの占いに、いつも僕らは（主にヴァンが）振り回されているが、占いは外れてばかりだ。だから僕はミセス・グレタが仲間の占いを口にするときは、金を取らないからって適当に言っていると思うてる。今回もでまかせだろう。そう思っていた。

「頼む。何だか、嫌なものを感じる」

そう言つて、ヴァンは自分のアタッシユケースから、金の首輪を2つと、銀の手錠を取り出した。

「えー！？これ全部持つて行けって？」

かなりの重装備だ。スフィックスでも居るのだろうか？
それとも獲物は複数か？

「…本当に何かいる感じがするってこと？」

ヴァンは頷いた。

「多分、とても危険なものだ。魔法が使えるお前がまず行って、拘束しといてくれたら助かる」

「冗談じゃないよ…」

「考えてもみる。このままで、何もないステッペンの中に入っていたら、トラックなんて目立ってしょうがないだろ。間違いなく迎え撃たれるか逃げられる。強い幻獣だったら、不意打ちで攻撃しないと…普通に戦っても負けるだろうし」

僕は有無をいわず、一人で、ステッペンの何者かに特攻する事になっちゃった。

「ユリアンにしかできないことじゃん」

「ユリアン、頑張って」

後部座席に座っている、ニコラとロビンが笑って言う。
他人事だと思っ…

「もし本当に凶暴な幻獣だったらついてるぞ。
久しぶりの大物じゃないか。お前の取り分、多めにしてやるから」

その言葉に少しやる気を出して、僕はしぶしぶ頷いた。
そして、一足先に僕だけ魔法でステップンの中に移動し、黒い狼、
アマミヤに出会ったのだった。

第8話 ベガーズ・パンケット・アンド・アマミヤ

「悲しんでいる人がいたら、その人の話を聞いてあげなさい」

私は小さな頃から、祖母にそう言われていた。

「その人に元気になって欲しいなら、お話を聞いてあげるのよ」

私の祖母は、精神科医だった。病院を辞めてからは、カウンセラーとして国際的に仕事をしていて、日本よりはアメリカで人気だったらしい。

そんな祖母の持論を、私は耳にたこができるほど聞かされた。私は小さな頃からおしゃべりで、他人の話を聞くより、自分が話す方が好きだったから。そんな私を諭すために、祖母はいつも言っていた。

「香子、おしゃべりするのは、楽しい？」

「うん」

幼い私は元気に頷く。

「そうでしょう、誰かに自分の話を聞いてもらうのは、嬉しいことよね」

でもね、と祖母は続ける。

「香子に話を聞いてもらえると、ばあちゃんもおんなじように、嬉しいのよ」

「そうなの？」

私は首を傾げる。

「そう。ばあちゃんじゃなくても、みんな香子に話を聞いてもらえると、嬉しくなるの。だから、話をするばかりじゃなく、人の話をしっかり聞いてあげることが、とても大切なことなのよ」

私は頷いた。自分が誰かを喜ばせることができると思うと、嬉しくなった。

「それじゃあ例えば今ここに、悲しい顔をしてる人がいたら、香子はどうしたい？」

「悲しくなくなつて欲しい」

祖母は私のつたない言い回しに、ふつと笑う。

「そうね。そんなときも、話を聞いてあげるのが一番なのよ」

「でも、この前、お友達が泣いてて、どうしたのって聞いたら、ほつとしてって言われたよ」

私は反論する。祖母は笑ったままで、こう言った。

「そう言われても諦めずに、聞かせてつてお願いするのよ」

「もし話すのを嫌がつていても、話し始めるのを、辛抱強く待つてあげる。聞きたいつて本気で思うなら、きっとお友達も話してくれるわ。そしたら、香子に話しているうちに落ち着いて、元気になるから」

聞いてあげなさい。祖母はそう言つて、話を終える。

あなたは、話を聞いてあげられる子。

聞いて、癒やすことができる。

誰かの悲しみを。

エンジン音が聞こえ、体に際限なく伝わってくる揺れを感じながら、私はまどろんでいた。

…車の中にいるようだ。

先ほどは、幼い頃の、祖母の夢を見ていた。

…ばあちゃん…懐かしい。
大好きだったなあ。

今でも元気で、アメリカと日本を行き来して、忙しくしてますけどね！！

最近あんまり会っていないなあ…。

それはおいといて。

…これは、さつき荒野に居たときに、近付いてきていた車だろうか。相変わらずガソリンの匂いはしないが、代わりに、プールで馴染み

のある塩素に似た匂いが、わずかに鼻についた。

…頭が痛い…

後頭部に鈍い痛みを感じた。

ズキズキと脈を打つように痛む。どっかにぶつけたっけ？

「うー…いたたた…」

うめき声をあげながら目を開くと、緑色の瞳と、目があった。

「おわあっ」

びびった！すごい至近距離なんだもん！

声をあげた私に驚いて、緑色の瞳の持ち主は肩を震わせる。

「狼が起きた！！」

そう言つて、私からピョンと飛び退いて離れる。すごい勢いだつたよ…なんかちょっと悲しい。

車の後部座席に寝かされた私の頭の方に、その子供は、もう一人の子供と二人でくっついて座っていた。車内は広く、それでも席には余裕があった。

「あせったー」

「何してんのさロビン。銀の手錠ついてるから大丈夫だよ」

「それは分かつてるけどさ…」

その二人からは、日なたの匂いがした。

さっきの緑色の瞳の持ち主は、このかわいい男の子だったらいい。一緒にいる子供と瓜二つの顔立ちだ…多分双子なんだろう。年は12才位だろうか。

服装は二人とも、白いTシャツに、幅の広い踝まである麻のパンツに、明るいグリーンのサスペンダーをつけている。

どちらも、深い緑色の目に栗色の巻き髪。頭の横にある耳が大きくて、シカの耳みたいに見える。

私は彼等の容姿に困惑したが、はたと思い出す。

ここは、私のいた日本じゃなかったんだっけ。

よくわからないが、パラレルワールド的な、別次元的な…ファンタジー的な？

考えてもよく分からないので、そこであきらめる。

とにかく、私は見知らぬ地にやってきたんだっけ。ハルカに会っために…

ドイツの存在しない幻獣、ヴォルパーティンガーに変身しちゃう人がいて…頭にウサギの耳と鹿の角がくっついてて、それがなければ相当なイケメンの…

名前何だっけ…？

私が寝ころんだままぼんやりと思い出していると、前の座席から、茶色い瞳が気遣わしげに私の顔をのぞき込んだ。

茶色い髪をオールバックにした青年。

「ユリアン！」

そつだそつだ。ドSヴォルパーティンガーのユリアン！

そこでやっと目が覚める。

「アマミヤ…ごめん」

「何が…」

体を起こそうとして、動かせないことに気づく。頭だけを起こして自分の体を見ると、いつの間にか私は幅の広い革のベルトで全身ぐるぐる巻きにされていた。その上、手首には手錠。

…なんすかこれ。

ぜんぜん体が動かせない。

しかも身体中が痛む。とくに後頭部！

…もうイヤ。

またユリアンの趣味？

「ねえ、頭が痛いし…っていうか身体中痛いけど、私ったら、何でこんなことになってるのかな？」

私は冷たい笑顔をユリアンに向ける。

ユリアンは顔をひきつらせて応えた。

「…言つとくけど、僕は止めたんだよ。君は普通の狼とは違って、凶暴じゃないって…」

「じゃあ、今すぐこれを外してくれる？」

私はユリアンの言い訳を遮り、冷たい笑顔のまま言う。

正直、イライラマックスですよ！

か弱い乙女に、何さらしてくれとんじやい！

もう、何なの、モフモフのかわいいウサギの癖にドSなこの男は。私の平凡な人生で、他人に拘束されるなんて想像もなかったよ！しかもこれで本日二回目です！

「はずすことは、できない」

困った顔で私を見ているユリアンの隣から、落ち着いた声が聞こえた。視線をずらすと、運転席から、白い肌にプラチナブロンドの前髪を斜めにきっちり整え、鮮やかなスカイブルーの目をした男が、顔をこちらに向けていた。黒地にグレーのピンストライプの、高そうなお細身のスーツを着ていて、ビジネスマンのような雰囲気だ。ムスクのような、大人の香水の香りがした。

…ん？運転席から？

「えええ！？何してんの！？ヴァン！前！前みろって！」

ユリアンが絶叫する。

運転しているというのにがつつりこちらに顔を向けたままで、ヴァンと呼ばれた男は動じずに言う。

「大丈夫だ。ここはステッペンだし、ぶつかるものなんて何もない」
そう言うけど、さっきから車がものすごく蛇行してますよ！
揺れも酷いよ！

「うわっ」

「痛ー！」

さっきのシカ耳の双子が、車の揺れでドアや座席にぶつかって、怯えて叫んでいる。そんな中、何故か私の体は、寝かされた座席からほとんど移動しなかった。

このベルトや手錠に、何か仕掛けがあるのだろうか？

まあ、同じ席にいる双子が何度もぶつかってくるから、ちょっとダメージ受けたけどね！でも、このままじゃあ、この子達が危ないじゃないか。

車の揺れは相変わらず激しい……くはっ！

双子の一人のひじが私の顔面にクリーンヒット！

わあわあ喚いている双子を気にもせず、ヴァンはこちらを向いたまま言った。

「いいかい、黒い狼。君はもう我々のものになった。明日のシルク・ド・ノワールの、きみは目玉商品だ。逃げようなんて……」
「いいから！ちゃんと前を見て運転しなさい！」

私は一喝する。

ばかもんが！小さい子が怪我するでしょうが！

ヴァンは、何とも言えない表情をすると、やっと前に向き直った。
車の揺れは収まり、蛇行もしなくなる。

…良かった…

この人…大丈夫？

まあ、ユリアンも相当だけど。

てゆうかこいつ今、私のこと、商品とか言った？

「ユリアン…？」

「…」

ユリアンはしょんぼりと耳を垂れている。

か…かわいい…！

いやいやいや、そんなこと考えてる場合じゃない。

「私はどうなるって？」

私はユリアンを見つめる。ユリアンは視線を下に向けて、苦い顔で

説明を始めた。

「僕らベガーズ・バンケットの夜の公演、シルク・ド・ノワールの本当の目玉は、人身、獣身売買だ。君はそこで、売りに出される」

へえー本当にそんなことあるんだー… って面白がつてる場合じゃない！

やばい超やばい。

売り飛ばされる！

今の私は狼の姿なんだっけ。さっきユリアンが教えてくれた話によると、狼は毛皮が売れるから乱獲された歴史が… って待って！

私、皮剥がれてしまうの！？

グロい！やばい！

いや、ふざけてる場合じゃない。

そんなの、最悪殺されるんじゃないか。

ユリアンについてくるべきじゃ… なかった？

私は、渾身の力を込めて上半身を起こした。

肩に巻き付いていたベルトが千切れて落ち、上半身が自由になる。

手錠をつけられたままの手で、私は勢いをつけてユリアンの襟首を掴んだ。

驚いた表情のユリアンを、額がぶつかるくらいの至近距離で睨みつ

けながら言った。

「私をだましたのね？」

わお！こんなセリフを吐く瞬間が、私の人生に訪れるなんて…！
でもこの言葉しか出てこなかったんだ…。

男に騙されて売り飛ばされるなんて…私ったらなんて不幸な…。

ユリアンを睨みつけながらそう考えていたら、突然意識が遠く
なっ
た。

あれ…？

「ユリアン、大丈夫か？噛まれてないか？」

「ヴァン！勝手なことするなって…」

そんな話し声を聞きながら、視界が暗転する。
私はまたしても、意識を失ってしまった。

第9話 テルミィ

最初から、ユリアンが襲って来た時点から、もっと警戒しておけば良かったのかもしれない。

ずっと、嘘を言っているな、とかこの言葉は本心じゃないな、とか、ユリアンの態度に違和感を感じてはいたけれど。

なぜあんな酷いことをされても、彼を信用してしまったのか…。

言い訳すると、ユリアンはずっと、私を見るたびに悲しそうな目をしていたから。

彼の話聞いてみたくなったのだ。
私を憎んでいるような態度をしながらも、彼はずっと、悲しんでいた。

『聞いてあげなさい』

頭の中で、ばあちゃんの声が響くんだもの

『その、悲しみの物語を』

私はその日2度目の失神から覚醒した。

目をこすりながら起き上がると、自分の体にはベルトも手錠もなく、拘束が解かれていることに気付いた。

日が暮れているようで、あたりは暗い。

けれど、狼は夜目が利くらしく、私の目には、周りの様子がぼんやりと見えていた。

私が居るのは、四角い小さな部屋だ。三方の壁はコンクリート打ち

っぱなしって感じで、のっぺりとしていて窓もなく、一方の壁は透明なガラスのようなものでできている。隅の方に鍵のついたドアがあり、それもガラスで出来ていた。

…檻？

そこは、小さい頃に動物園で見たような、動物を観察できる型の…檻に似ていた。

私は青ざめて立ち上がった。

「目が覚めた？」

ガラスの向こうに、ユリアンが座っていた。

オールバックにしていた茶色い髪をおろしていて、そうするとずっと幼く見えた。

私が寝ている間中そこにいたのだろうか。…私が目を覚ますまで？

「アマイヤ…どっか、痛くない？」

ユリアンは、どこからか小さな半球のガラスを取り出して、床に置いた。すると、オレンジ色の明かりがついて、辺りを照らし出した。

ユリアンは沈んだ表情で私を見ていた。

「みんなちょっと荒っぽくて…ごめん」

「…狼って、そういう種族なんだね」

私は呟くように言った。

檻に入れられて、売られてしまう。
そんな扱いが当たり前前の生き物。

危険な猛獣としての扱い。

人権はないのだろうか。

見かけは、ユリアンとそう変わらないのに。

「私は、いつ売りに出されちゃうんだっけ？」

「…明日の夜だ」

「…ユリアン、最初から私をだましてたのね？」

私はさっき聞きそびれたことを、もう一度聞いてみた。

「…そうだ。君を捕まえるために、僕達はあの荒野に来たんだ。生きたままの狼は…すごい高値で、売れるから」

ユリアンは淡々と質問に答えた。

「そう…」

ユリアンの話を聞いてあげなきゃ。

私はユリアンの沈んだ表情を見て、突然思い出した。

荒野で、狼に友達を殺されたと、ユリアンは泣いていたじゃないか。
狼である私に、恨みつらみを話せば、ちょっとしたでも気が軽くなるん

じゃないだろうか。

…けど、自分を騙した人間の気を軽くしてやる義理がどこにあるだろうか？

いや、ユリアンは私を心配して、ずっと檻の外から、いつ目を覚ますか分からない私の様子を見ていたらしい。

だから本当は、優しい人なんだろう。

けれど、自分が売っぱられる大ピンチの時に、その自分を売っぱらおうとしている相手の為に何かしてやる、意味は何？

今考えるべきなのは、すべきなのは、そんなことじゃないだろうに。

このままここにいたら、皮を剥がれてしまいかもしれないのに？

最悪、死んでしまいかもしれないのに？

…でも、それでも私は聞きたい。

ただ純粹に、ユリアンの話が聞きたいと思った。

白い男の子が言っていた事を思い出す。

『君は、君であることを誓いなさい』

私が私であるということ。

それは、私が私らしくいること。

私らしいこと。

いつだって誰かに話を、聞かせてほしい。
それが私。

売り飛ばされるがどうした。

ユリアンの話を聞けるのは多分今しかない。

檻のそばにはユリアンだけしかないようだし、今ならきつと、頑固に口を開かなかったユリアンも話をしてくれるだろう。

私に真実を明かすことになった今なら。

私はただ、話が聞きたい。私の為に。私は人の話を、気かすにはいられないのだから。

「ユリアン・フローゲ」

ピクリとうさぎの耳で反応して、ユリアンは顔をあげた。

私はガラス越しに、ユリアンの目から視線を反らさないようにしながら言った。

「話を聞かせてって、言ったよね？」

「話してよ」

「私に、狼に、聞かせたいんでしょう？」

「あなたの、悲しみの物語を」

第10話 ユリアン・フローゲの物語1

僕がアマミヤを初めて見たとき。

強い風が吹いて、美しい黒髪が舞うのを、僕はただ見ていた。

声をかけられず、僕は息をのんで見つめていた。漆黒の毛皮を持つ、生き物。

これは…

頭の上の耳の形を確認する。

ピンと立った耳は三角形で、尖っている。

短い服の裾から覗く、艶やかな長くて太い尾。

後ろ姿でも僕には分かる。間違いない。

それは、狼だった。

黒い狼なんて初めて見た。

黒い生き物は、カラスと猫類、それ以外には存在しないと言われていくくらい珍しいのに。

狼は人食いで知られる、呪われた、忌み嫌われた動物。

僕の友人を食い殺した、憎むべき悪の種族だ。

危険だ、こんなに狼の近くにいるなんて…

そのとき、狼がこちらを振り向いた。

背筋が凍り、身がすくむ。

瞬間、僕は自分の死を予感した。

狼に襲われた友人の死体が思い浮かんでくる。全身を噛み千切られて貪り尽くされ、ただの肉塊になった彼の姿。

僕は、あんなふうにならぬのか？

そう思っただけ、戦慄する。

漆黒の闇色の瞳をきらめかせ、力強いまなざしが僕を射抜いた。

狼は女性……いや、少女だった。

僕は圧倒された。

先ほどの恐怖を忘れて、目を見張る。

……なんて、美しい生き物なんだろう。

流れる艶やかな黒い髪、対比するように、白く輝く陶器のような肌。

小さな体をして、堂々と、悠々と立つ。

何より、迷い無く僕を真っ直ぐに見つめてくる、黒い瞳。

黒い狼……彼女は、活き活きと輝いて美しく、圧倒されてしまうような力強さに溢れていた。

ふと僕は、

こんなに美しいものになら、

殺されても良いかな。

少しだけ、そう思ったのだった。

僕はアマミヤの迫力に気圧されるかたちで、重い口を開いた。

しかし何故彼女は、そんなに僕の話を書きたがるんだろうか。

自分が商品として、僕らに売り飛ばされるのだと知って、それなのにどうして、いまだに僕の話なんか聞きたがるんだ？

他に聞くべきことがあるんじゃないのか？

助かりたいとは思わないのだろうか？

僕に腹が立っているんじゃないのか？

恐ろしくはないのか？

まるで自分のことなんか、少しも気にしていないように。

もう、話そう。話してしまおう。

不思議な気持ちになっていた。

彼女に、全て話してしまいたい。
話を聞いて欲しい。そう思った。

彼女にはそう思わせる雰囲気がある。

僕は檻のガラス扉を開けて中に入り、アマミヤの隣に座った。

嘘をついても、さっき僕の態度が偽りだと気付いたように、彼女にはわかってしまう。

だから僕は偽り無く、自分に起こった本当のことを、語り始めた。

「僕は――」

僕は自分が、どこ誰なのか、どんな街で生まれたのか、何一つ知らなかった。

気付いたら、妹と二人で生きていた。

いちばん古い記憶は、貧民街の裏通りで、まだ生まれて間もない赤ん坊だった幼い妹を抱きかかえて、抱きしめて暖めていたこと。妹のかじかんで冷えきった小さな小さな手に、熱い息を吹きかけてやっていた。

僕より二つか三つ年下の小さな妹は、僕と同じように茶色い毛皮のヴォルパーティングガーで、物心ついたころには二人で、家もなく路上で暮らしていた。

僕達兄妹は、僕が3歳くらいの時に揃って捨てられたのだ。

けれど不幸中の幸いで、僕達は同じように路上に生きる老人や、年上の少年達に助けられ、辛うじて生き延びた。僕も、まだ生まれたばかりだった妹も、彼等の助けがなかったなら、すぐに野垂れ死んでいただろう。

W・ライオット。それが僕等のいた国の名前だ。

世界一大きな国で、世界一発展していて、世界一不公平な国。

しかし、その国さえも手に負えず、政治が関与できない状態にある

広大なスラム地区、ガレージランド。

それが僕達の育った街だった。

この21世紀の現代にあって、毎日戦争みたいな野蛮な街。商店には必ずライフルが置いてあり、レジの下には魔法で強化されたピストルが常備されている。

そんな腐った街。それがガレージランドだ。

この街で、仕事もできない小さな子供が、自分の力で生きていくためにできることは、盗むことだけだった。

僕は、仲間と一緒に、盗んで、逃げて、捕まって、殴られて、また逃げて…その繰り返しの日だった。

夢も希望も何にもない生活だったけれど、僕には、守るべき妹が居た。

妹だけが僕の光で、ただ一人、自分よりも大切な存在だった。妹がいたから僕は、こんな腐った街でも、生きてこられたのだ。

ガレージランドには時々、僕達のような路上暮らしの子供を施設に收容するために、政府の役人がやってくるがあった。しかし広すぎるガレージランドの中では、路上暮らしの子供の数は、施設に入れるには多すぎる。それでも、政府は役割を果たしていると思わせないやならない。だから役人達は、子供を選んで連れて行くのだ。健康そうで綺麗な顔の子供や、珍しい種族の子供、それと、魔法が使える子供なんかを。

僕と妹は、魔法が使える。

けれど、魔法の力を持つのは、基本的には人間だけだ。僕達みたいな、幻獣種族にはちょっと珍しい。

魔法は使えるだけで雇ってくれる所も増えるし、それだけで金になる。しかし、魔法が使えると知られてしまえば、こんな無法地帯では、捕まってすぐに売り飛ばされてしまう。だから僕達兄妹は、魔法の力を隠して暮らしていた。

もっと成長してからこの街を出て、魔法をちゃんと習いに行こうと、

二人で決めていたから。

施設に送られるのは、一見路上暮らしよりは良いような気がするが、政府は捕まえた身寄りの無い子供を、商人に売り払ったり、国のために死ぬまで無理やり働かす、という話だった。

だからほとんどの子供は、政府の車が来ると逃げ出していた。僕等も、政府の役人は毛嫌いしていた。

けれども僕の妹は現在、その政府に、組している。

今から5年前、僕は魔法薬になる植物やドラッグなんかを栽培している、もちろん非合法な農場の仕事についていた。

僕達の面倒を見てくれていた年上の少年達の一人、ルーディ・シェンカーが飲食店を始めて、その商店の二階のボロい空き部屋を一つ、僕と妹にあてがってくれた。もちろん家賃は払うが、食うには困らない生活が送れていた。

貧しいが、悪くはない日々だった。

そんなある日のことだ。

「お兄ちゃん、さっき黒いスーツの人が、この家を覗いてたよ」

買い物から帰って来るなり、しかめつらで、僕の妹、アイリスは言った。

「お前そいつを見て、何にもせずに帰ってきたのか？」

アイリスには、護身用に自動拳銃を持たせていた。

「せっかくルーディに新しいヴァルサーもらったのに。使わなきゃ意味ないだろ」

「やだよ。怖いもん」

アイリスはむくれて言った。

まだ12才だが、大きな茶色い目、茶色い巻き毛、兄の欲目かもしれないが、悪くない容姿をしている。そのぶん、尚更心配なのだ。

「お前が死んだら、俺も死ぬ」

「やだ。お兄ちゃんが死ぬなんて」

「だったら、絶対死ぬなよ」

アイリスは笑う。

「死なないよ。この街で、毎日死ぬような目に合ってるのに、死んでないでしょ？」

毎日どこかの通りで銃声がする。

毎日どこかの通りで人が野垂れ死ぬ。

こんな街を、早く出て行こうと、

いつも思っていた。

それはアイリスも同じだった。いや、僕以上に、あの街、ガレージランドを、アイリスは憎んでいたのかもしれない。

その数日後。

アイリスは街を去った。

僕の仕事中に、ルーディが大慌てで知らせにきた。見ていた仲間が

言うには、アイリスは、政府の役人と思しき車に、自分から乗り込んだと言うのだ。

僕は信じられなかった。

とにかく仕事を抜け出して、アイリスが乗り込んだというトラックを、僕はルーディのバイクの後ろに乗り込んで追いかけた。

猛スピードでトラックに並ぶと、僕は、ヴォルパーティンガー特有の脚力で、バイクの後部座席を蹴り上げ、トラックの屋根に飛び乗った。

「アイリスを返せ！」

そう叫んだ僕は、トラックの後ろの、格子のはまった窓から、アイリスの小さな顔が覗くのを見た。

「アイリス！」

僕は叫んだ。

「お兄ちゃん、来ちゃ駄目だよ！」

アイリスは青ざめた顔で言った。

「アイリス、大丈夫か？ 帰るよ」

僕がそう言うと、アイリスは首を振る。

「私は大丈夫。ごめん。お兄ちゃん、許してくれる…？」

「何を言ってるんだ？ 行こう、アイリス…」

窓の格子に手をかけ、力を込める。

けれど、窓の格子には魔法がかかっているようで、普通の鉄なら曲

げる自信はあったのに、びくともしなかった。

僕は泣き出した。アイリスも泣いていた。

「お前が居なきゃ、生きていけないよ」

僕が言うと、アイリスは泣きながら笑った。

「お兄ちゃんが死んだら、私も死ぬ」

「だから、生きていて」

格子の隙間から指を出し、僕の手に触れ、アイリスはそう言った。

そして、魔法で出した自分の精霊に、いきなり僕の足元をすくわせた。

「うわっ」

僕はそんな叫び声をあげながら、道路に落下した。

…殺す気か!!

そう思いながらも、しっかりと道路に着地して、トラックに向かって僕は叫んだ。

「アイリス!!」

「この馬鹿——!!」

それから数ヶ月、アイリスの行方を探し回ったが、全く掴むことが

できなかった。アイリスが何故自分からトラックに乗ったのか、何故僕の元を離れてしまったのか、全くわからなかった。僕達は、今まで一度も離れたことがなかったのだ。だから僕にとっては、片腕をもがれたようなものだった。

このときの僕は、政府の車を見ると片っ端から喧嘩を売った。

アイリスの居る場所に行けるかと思って、トラックや車を追いかけたことも幾度があったが、銃で狙撃されて命からがら逃げ帰った。ヤケになって暴れまわっていた僕は、政府相手に武器や違法商品を売っている、新参者のマフィアの一味アン・デイ・フロイデ、通称「フロイデ」に疎まれ、捕まって売り飛ばされた。

けれども、僕は売られた場所から逃げ延びて、生き倒れているところを、この一座、ベガーズ・バンケットのリングマスター、ヴァンに拾われたのだった。

ルーデイ・シエンカーは、白いヴォルパーティンガーで、僕たち兄妹のほとんど親代わりみたいなものだった。

僕達を最初に見つけたのが自分だと言って、何かと目をかけてくれた。見かけは二十代くらいだが、誰も、彼自身も本当の年齢や名前は知らない。彼も捨て子だったからだ。

ヴァンに助けられてから、僕はいったんガレージランドに戻った。

ルーデイに会って、自分は無事だと報告したかったから。僕を目の敵にしていたフロイデは、もうガレージランドにはいないと思ったのだ。さほど大きくない新しい組織だったし、無法地帯であるガレージランドの中では、政府相手の仕事は更に危険で、やりにくいものになると考えたのだ。

今考えれば、僕は大馬鹿だった。

無法地帯だからこそ、政府の要人ですら違法商品の売買ができる。

そのために政府がフロイデを立ち上げたのだ。

言ってみればフロイデは、国営の犯罪組織。

フロイデは、短期間のうちにガレージランドで幅を利かせる一味になっていた。

そしてルーディは、僕と親しい者として目をつけられていた。

「久しぶり、ルーディ」

「ユリアン！？」

僕は夕方頃、ルーディのバーに顔を出した。ルーディは驚いて大声をあげたが、すぐに声を潜めた。

「馬鹿かお前！よりによってここに来るやつがあるか」

ルーディはそう言ったが、僕の無事を喜んでくれた。その日はルーディの家に泊まって、次の日一座に戻るつもりだった。

このとき既に、フロイデの一味は、僕がこの街に戻ってきたことに気付いていたのだ。…この夜、どうしてもすぐに街を出なかったのか。

今でもそれが悔やまれる。

第11話 ユリアン・フローゲの物語2（前書き）

ちよつと残酷な描写があります。苦手な方はお気をつけ下さい。

第11話 ユリアン・フローゲの物語2

真夜中。

ルーディの寝室のソファで眠っていた僕は、妙な音で目が覚めた。それは、獰猛な動物のうなり声のようだった。

起き上がった僕の目に入ったのは、ルーディが眠っているはずのベッドに立つ、大きな銀色の狼の姿。

狼は、人型の時の僕の倍はあろうかという巨大な体で、銀色の毛並みは月光にあたって白く光っていた。

ルーディに覆い被さるように立っていたが、僕が目覚めたことに気付くと、顔をこちらに向ける。

毛皮の口元は、月明かりでもそれと分かるほど、真っ赤に染まっていた。

狼は僕に向かって、地の底から響いてくるような、低いうなり声をあげた。その肌を刺すような威圧感に、僕は動くことができない。動いたら…殺される。

それは予感ではなく、確信だった。

そのとき、狼は闇に取り巻かれた。闇はすぐに消滅し、そこには、銀色の髪を持つ、美しい男が立っていた。

造り物かのように整った顔立ちだが、そのぶん全く生氣のない目が、余計に不気味だった。

顔の血を手で無造作に拭い、銀の狼は口を開いた。

「貴様が、ユリアン・フローゲだな？」

僕は動けなかった。

狼は僕の返事を期待しておらず、構わず話を続ける。

「わたしはアマデウス・ヴォルフガング」

狼の顔にはなんの表情も浮かんでいない。

「お前は、完璧に我々を敵に回した。取引先から逃げて、また街に戻ってくるなんて、舐めた真似をするもんじゃないな」

アマデウスは、少し表情を険しくする。

「言っても分からないお前に、実力行使をしにきた。お前自身ではなく、お前の親しい人に」

僕はゾツとした。

実力行使…？

そうだ…何をしていたんだこいつは？

…ルーディ？

僕は眠っているはずのルーディの方を見る。

「しかし、我々のボスは、お前の事が気に入ったらしくてね」

ルーディの足が、ベッドからはみ出している。

ああ、寝相が悪いんだよな、ルーディは…

僕は少し安心して、名前を呼ぶ。

「ルーディ」

ルーディは応えない。

「なかなか骨がある奴だから、遊んでやるつてさ」

「ルーディ…？」

僕はそのとき、やっと気付いた。

そこには、ベッドには、

ルーディの足、

それだけ、しかなかった…

「ルーディ！？」

血溜まりのシートには、赤い、塊と、裂けて、尖った骨。

「うあつ……ああああ！！」

頭が真っ白になった。

こんな…

こんなこと、あつてたまるか！

僕は夢中でアマデウスに飛びかかる。

ほとんど最強の種族と言われている狼に、勝てるわけが無いかもしれないが、そうせずにはいられなかった。

けれど、アマデウスは襲いかかった僕の拳を軽く交わして、片手で僕の顔をつかむと、力を込めて床に投げつけた。

「あぐっ！！」

床で頭を強かに打ちつけ、意識が一瞬飛ぶ。

ルーディ…

嘘だ。こいつ、ルーディを…

「喰ったよ」

アマデウスは言った。どこか楽しげな響きに、僕は怒りで我を忘れた。

「お前…！！」

渾身の力を込めて体を動か…そうとした。けれど、顔はまだ捕まれたままで動かせず、両腕をアマデウスの足で踏みつけられ、頼りの足はいつの間にか、魔法封じの鎖でがんじがらめにされていた。

鎖に注目している僕を見て、アマデウスは笑った。鎖が勝手に動いて、両脚が更に強く締め付けられる。

「うああっ！！」

僕は骨が軋むほどの痛みに、うめき声をあげた。

アマデウスは僕をいたぶることを、見るからに楽しんでた。

「残念ながら、お前には何もするなって言われていてね」

ふう、と息をつき、アマデウスは微笑む。

「ボスは、お前と遊びたいんだってさ」

「ユリアン・フローゲ、ボスからのお誘いだ」

「ボスまでたどり着けたら、相手をしてやる」

「俺でも、ボスでも」

「たどり着けたら、ね」

アマデウスはそう言うと、開いた窓から音もなく出て行った。

足の鎖が消えると、すぐさま僕は窓に駆け寄った。

けれど、夜明けの街には、もう奴の影すら見つけれなかった。

僕はルーディの片足と、血まみれのシーツを前に、慟哭し…復讐を誓った。

それが、奴らのボスの思い通りでも何でも、それ以外に選べる道はもう僕にはなかった。

親友にして名付け親。兄にして父親。

それが、僕にとってのルーディだった。

僕から妹を奪い、ルーディまでも…

アマデウスと、あいつらの組織、フロイデと、そのボス。
ひいては裏で糸を引いている、この国の政府。

そして、浅はかで愚かな自分。

全てを許さないと、誓った。

全てに復讐を、僕は誓った。

第12話 blood, sweat & tears

話を終え、ユリアンは悲しげに目を伏せる。

私は、今聞いた話を飲み込むために、少しの間沈黙して考え込んだ。彼の壮絶な人生をじっと聞いていたら、それを一緒に体験しているような気持ちになっていた。

大切な人をことごとく国に奪われ、復讐を誓った少年。

彼は、大切な人を巻き込み、守れなかった自分を許せないでいる。

ユリアンは似ていると思った。

ハルカを失った私と。

ハルカを亡くして、泣き叫んで絶望して、死んでしまいたいと願った私と――

3ヶ月前、ハルカが亡くなったとき、祖母は公演の為に帰っていたアメリカからすぐに帰って来てくれた。

絶望して何も食わず、話しめせず、泣きもしなかった私を祖母は抱

きしめて、ただこう言った。

「香子…今あなたが考えていることを、言ってみなさい」

その祖母の言葉で、堰を切ったように私は話し始めた。

口に出したって周りの人を困らせるだけだから、言えなかったこと。

それでも、頭の中で考えるのをやめられなかったこと。

それらを口に出すことで、どんなに気持ちが悪われるか、私はそのとき身を持って知ったのだ。

「私は…私が許せない」

呟いた言葉と一緒に、涙が流れた。

「ハルカに…ひどいことを言った自分が、許せない」

泣きながら、喘ぎながら、絞り出すように私は話した。

「ハルカを、大切にしなかった自分が、許せないの…！」

どうして生きているときに、もっと大切にできなかったのだろう。

あんなに大事な人だったのに。

「死にたい。ハルカがいないなんて、耐えられない…。私、ハルカがいないのに、何にも変わらない世界が…自分が、許せないの。生きてるのが…苦しい…よ…」

私の心はハルカを失った絶望に、押しつぶされそうだった。

私は、ハルカを失ってからずっと、自分を責めていた。

ハルカとの些細な喧嘩さえ何度も思い出して、後悔を繰り返していた。

彼の命にはタイムリミットがあると、出会った時から聞かされていたのに。

彼の死がいつも、彼のすぐ傍らにあるものだったと、分かっていたのに。

だからこそ、彼を大切にできなかった全ての時を、私は悔いていた。

許して…

ハルカ

戻って来て…

投げかけたその願いに、私は自分で返事をする。

…戻ってなんて、来ない。

もう二度と、ハルカには会えない。

もう、この世界のどこにもハルカはいないのだ。

いないの…？

嫌だ

嫌だよ…

「嫌だよ…！」

苦しくて辛くて、どこにもやり場のない感情を爆発させて泣き叫ぶ私を、祖母は抱きしめ、私の頬を力強く両手で包み込んで引き寄せながら、静かな声で語り始めた。

祖母の声以外の音が、消えた気がした。

世界が息をひそめて、祖母の声に聞き耳を立てているようだった。

『香子、香子。聞きなさい。ちゃんとこちらを見なさい。いい？香子…』

ユリアンの茶色い目をじっと見つめ、私は祖母に言われたことを思い出しながら、口を開いた。

『香子、あなたが全てを許せないのなら…』

「ユリアン、あなたが全てを許せないのなら、きっとそれで良いんだよ」

ユリアンはいぶかしげに眉をひそめる。

でも、と私は言葉を続ける。

『どうして許せないのか…』

「どうして許せないのか、その理由を、決して忘れないで」

ユリアンが復讐するとまで、誓ったのは何故か。

簡単なこと。誰にでも分かること。

けれど特別意識されることはないままに、その大切な気持ちは薄れやすい。

一番大切なことは、復讐をすることではないはずで、自分を罰することでもなくて…

ユリアンの頬をそつと両手で包み込んで、私は言った。

「忘れないで、ユリアン」

頭の中では、祖母の声が響いていた。私を救った言葉。

ユリアンにとっても、少しでも助けになれば良いのだけれど。

『あなたがあなたを許せないのは…』

「あなたがあなたを許せないのは、狼を許せないのは…それはあなたが、ルーディを愛したから」

『悲しむのは…』

「悲しいのはね、あなたが妹を愛したから」

『そして、悲しむのは…』

「悲しむのは、あなたが二人を、今も愛しているから…」

一番大切なことは、たった一つ。

ただ、愛したこと。

その人を、愛したという真実。

それを忘れないでいれば、きっと大丈夫。
祖母はそう教えてくれた。

泣きながらしがみついていたユリアンを、私は抱き締める。

「うつ…えっ…」

嗚咽を漏らしながら、ユリアンは言った。

「僕は…」

「許されたくないかない…」

「うん」

吐き出されたユリアンの言葉に、私は頷いて応えた。

「二人とも僕を…恨んでくれたらいい」

「僕を許さないでほしい…」

「二人が大切だったのに…守れなかった僕を」

「じ…自分より大事だったのに」

「…うつあぁっ…」

喉をひきつらせて、ユリアンは激しく嗚咽を漏らす。
私はその震える背中をそつと撫でる。

「そう…だからなんだね…？今でもこんなに苦しいのは…」

「僕がルーディを、アイリスを…」

「…愛しているから」

「そうだね…」

私は微笑んで頷いた。

自分が人を愛したことを確認すると、人は安心できる。
祖母に教わったことだ。

私自身、祖母のおかげで、理解した。

この悲しみ、この絶望、それはどこから来た？

愛したから。喪ったその人を愛していたから。だからこそこんなに悲しい。こんなに苦しい。だからこそ、絶望に打ちのめされてしまふのだと言うこと。

それを理解したとき、ほんの少しだけ、悲しみは遠ざかるから。

ユリアンの背中を撫でながら、あやすように静かな声で、私は言った。

「よしよし、いい子……」

「あなたは大丈夫……」

頬に流れる涙をぬぐってやりながら、微笑んで言う。

「私はそう信じてる」

「だってユリアンは、人を愛せる、優しい子だもの…」

私は、ユリアンの頬を撫で、背中を撫で、なだめ続けた。

私も人に同じことを言われたことがある。
ハルカに言われたんだ。

『香子、この先どんなに酷いことがあっても』

『お前なら大丈夫』

『俺は、そう信じてるよ』

それは、すごく幸せな記憶だったから。

私は大丈夫なのだ。ハルカが信じてくれているから。そう思って安心できた。

誰かに、君は大丈夫って、言ってもらえたら、どんなに心が軽くなることか。

ユリアンに今日会ったばかりの私では、あまり説得力がないかもしれないけど。

私が憎いはずなのに、ユリアンからはずっと、怒りよりも悲しみを

強く感じてた。

今の彼は、憎しみに取り憑かれた復讐鬼にはとても見えない。

ただ悲しみにくれる、優しい青年。

だから私は彼を、人を愛せる優しい子だと、思ったのだ。

第12話 blood、sweat&tears（後書き）

シリアス続きですみません！ちょっとずつ明るくなる予定ですから、
もう少しお付き合い下さいませ。

第13話 s e l l m e ! !

私の膝を枕にしたままで、泣き疲れて眠ってしまったユリアンを起こさないように、動けなくなっ…

…二時間くらい経ったんじゃないかな…？

あ…足が！

もう痺れを通り越して！

感覚がありません！

誰か助けて！

ユリアンが全然全く起きる気配がないの！
この子すごいぐっすり寝てるんだもの！

甘えん坊だなあ…。

私はユリアンの髪を指でそつと梳く。
それから鹿の角に、ちよつとだけ触ってみる。ツルツルして、なめらかだ。

根元はちよつとザラザラしていて、やっぱり作り物ではないことを実感する。

このうさ耳を撫でるのが気持ち良いんだよね…
そう思いながらずっと撫でていると、ユリアンの耳は、私の手を避けるようにパタパタと動いた。

うはっ可愛い！！

一人でニヤニヤしてしまう私。

癒やされるなあ…

あぁっでも足が…足が死ぬ！

ユリアン起きて！

それでもぐっすり気持ちよさそうに眠っているユリアンを無理やり起こす気にはなれず、私は忍耐強くその姿勢を保っていた。

辺りが真っ暗から青い光に移り変わり、夜明けを告げる。私もウトウトし始めたそんなとき、ヴァンがやってきた。

ガラスの扉が開いていることをまず目にした彼は、驚いて中をライトで照らし、さらに驚いて声をあげた。

「ユ…ユリアン!？」

私の膝に頭を乗せて寝転がるユリアンをみて絶句する。そして私を睨みつけて言った。

「ユリアンに何をした!？」

ええ!?!誤解だよ!何もしてないよ!

ちよびつとだけ、角やウサ耳を引っ張ったりしたけどっ

私は慌てて言った。

「しー!寝てるだけ。大きな声出さないで。起きちゃうでしょ」

囁き声で怒る。

ヴァンはちよつとまごついて、静かに警戒しながら…つまり私にピストルを向けながら、ガラス扉から檻の中に入ってきた。

うおおおい！

なんて物騒なもの持ってたんだYO！

こっちに向けないでよそんなもん！

「ユリアンは…寝てるだけか。噛みついたりしてないだろうな？」

「しつこいなあ。鬱陶しいね、あなた」

私は眉をひそめてこぼした。

あ、つい本音が…

でも、ヴァンも人をちよつとは信じる！

「舐めた口を聞くなよ、ガキが」

ヴァンはピストルをしっかりと私に突きつけて言った。

うぎゃあつ…怖！ヴァンが本性を表したよ！

しかし、ヴァンは引き金を弾こうとはしない。ちよつとびびったけど、こっちが何もしなきゃあ、ヴァンも多分何もしてこない…よね？ 雰囲気はそんな感じた。殺す気はないんじゃないかな…私、まがりなりに商品ですから！

…なんか自分で言つて、悲しくなった…。

しかし、助かった。それなら互いに武器は口だけ。

…私、口では負けない自信があるんだぜ

ピストルが目の前にあるというのに、私の気持ちは落ち着いていた。何故だか、私は自分が絶対にここでは死なないという、自信に満ち溢れていた。

絶対にハルカに会う、と決めていたからかもしれない。

「そんなガキに怯えてんのはお前だろ」

口について出たのは、ハルカが怒ったときの口調だった。

私の突然の乱暴な言い方に、ヴァンはちょっとだけ動揺して瞳が揺らぐ。

私はにやりと笑う。

「あなた、会ったときから、私が怖くてしかたなかったでしょ？」

さっき思い出していて、分かったことがあった。

荒野で私が意識を失ったときも、車の中で意識を失ったときも、両方とも、十中八九ヴァンが私を攻撃したからだ。

さっき、泣き止んだユリアンがまどろみながら話してくれた。

私にかけられていた銀の手錠、あれは、力では外れない魔法がかかっており、条件を満たさないと外れない仕組みなのだそうだ。

そして、あれは特別製で、つけている人を失神させられる魔法までかけられていた。

また、荒野での私への攻撃、後頭部に入れられた、たんこぶになった一撃は、私の視界に一人だけ入らなかったヴァンで間違いない。私は荒野で意識を失う寸前、シカ耳の双子がユリアンの背後に立っているのを見ている。

そのことは後から思い出したのだけど…。

私をことごとく失神させることで、話す機会も与えなかったのは、ヴァンが私を恐れ、対等な扱いをしたがらなかった為だと思う。

「ねえ、あなたは私の何がそんなに怖いのか？」

私は首を斜めに傾けて、純粹に好奇心で質問する。

「ただの舐めたガキの私の、どこが怖いのか？」

ヴァンは言葉を失って、私を睨みつけている。

「…」

何も言わないヴァンに、私は唐突に質問を変えた。

「私の名前は雨宮香子。あなたは？」

ヴァンは困惑して眉を寄せたが、意外にも応えてくれた。

「…俺は、ヴァンゲリス・オデュッセウス。ペガサスだ」

「よろしく、ヴァンゲリス」

やっぱり私が狼だからだろうか。

凶悪な生き物と言われてる狼だから、こんなに警戒されているだけか？

…ん？

ヴァンはペガサスなの？まじで？日本でもお馴染みの、白馬に翼がはえた、あのペガサス？

すごいな！是非とも変身して見せてほしい！私は一瞬、ヴァンに熱い眼差しを送る。

その時、ユリアンが身じろぎして目を覚ました。

「…うーん？」

ぼんやりとして、目をこすりながら私を見上げてうなる。

小さな子供みたいだ。

なんかユリアンが可愛く思えてきたな…ドSで可愛いだなんて、危険な子だわ…

私は笑顔を返し、目にかかる前髪をよけてやる。

「目が覚めた？」

「…アマミヤ!？」

ユリアンは真っ赤になって、いきなりガバツと跳ね起きた。

「ごめん!僕…」

「ユリアン」

ヴァンが声をかける。

「大丈夫か? 噛まれたりしてないか?… お前、弱みでも握られてるのか?」

コルア! それどういう意味!?

私の膝枕は罰ゲーム的なアレだと言いたいわけ!?

床に寝かせたら硬くて痛いかと思ったから、膝を貸しただけなのに!!

私はヴァンに言い返そうと口を開いたが、ユリアンの言葉に遮られた。

「ヴァン、違うよ。誓って言うけど、この狼…アマミヤは、僕に何にもしてない。それどころか…アマミヤは、僕を助けてくれたんだ」

…えっ

…私なんかしたっけ?

今日は困惑してばっかで、建設的なことは何一つできてない私です

が…。

「…よく分からんが」

ヴァンが困った顔でユリアンを見て、説明を求めるように私を見る。
いや、私もわかんないよ。

「とにかく、この狼に害がないと主張したいことはわかった。だが…何度も言わせるなよ。狼だぞ。俺は信用できない」

「じゃあ…見逃すことは…できないのはわかってるけど、なんとかできないか？ 変わりに僕がまた、違う商品を…」

ユリアンの言葉に、ヴァンは首を横に振る。

「この狼の貴重さから言って、見逃すなんてことはあり得ない。いくら値がつくと思ってるんだ？」 ヴァンは眉間に皺を寄せ、本当に困惑して、焦っているようだった。

「…ユリアン、本当にどうしたんだ、商品に肩入れするなんて。この狼の何がそんなに気に入ったって言うんだ？」

「…とにかく…アマミヤは、普通の狼とは違うよ」

二人の言い争いの元は、私の売買についてなんだと気付いた私は、ユリアンに問いかける。

「ユリアン、私を助けてくれようとしてるの？」

ユリアンは頷いて、私を見た。

「アマミヤ…騙したりして、悪かった」

私は頷いて言った。

そんなこと、私はもう気にしてなんかいない。
それよりも…

「…ねえユリアン、私以外にも商品として、捕まえた人はいる？」

ユリアンはちよつと戸惑った表情を浮かべる。

「…今は他に、クー・シーが一人と、ペリの種族が二人…いるけど」

クー・シーはしゃべる犬で、ペリ…と言ったら、イランの民話に出てくる翼のある人間のことだ。香りを食べて生きているという美しい人だ。世界中の幻想の生物がいるのかな、この世界は…ていうか私、よく知ってたな。ペリとかマニアックな…。まあそれは良いとして。

「その人たちも、逃がすの？」

私が首を傾げて聞くと、ユリアンは渋い顔をして言った。

「いや…それはできないよ」

「じゃあ、私だけ特別扱いするの？ユリアン」

私はユリアンを見つめる。

ユリアンは心底意味が分からない、という顔で見返してきた。

「君は…自分が売られてもいいの？」

私は首を力いっぱい横に振って応える。

「嫌に決まってるでしょ」

ユリアンはちよつとイライラして声を荒げた。

「アママ、きみ、何がしたいのさ？」

「なんで私一人だけ逃がしてくれるの？」

「いや、それは…」

「一人だけ特別扱いするのなら、おかしいじゃない」

「いや…君は…今はそんなこと言ってる場合じゃないだろ？」

ユリアンは私を諭すように言うが、私はさらに首を傾げる。

「ユリアン、意味が分からないよ。私を売るために捕まえて、ここに連れてきたのは、あなたじゃない」

ユリアンは青ざめている。

私は立ち上がり、仁王立ちの格好になって、言い放った。

「売ればいい。私を。お金がほしいんでしょ？」

そういえば、大金がほしい理由を聞いてなかったな。ただ、贅沢が
したいだけって理由ではないと思うんだけど。

「なら、ユリアン、責任持って、私を売りなさい」

ユリアンは血の気の失せた表情で、驚愕して私を見つめていた。

第14話 アマミヤ・チェンソー

今夜私は、売りに出される。

お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許してください…

香子は、皮を剥がれて敷物に…嫌だ。

せめてえりまきとか服がいい…いや、全部だめ、そもそも死にたくないっつーの！

うわーん！

どうしよう（涙）

自分で自分にびっくりだよ。

ユリアンがせっかく、

「人身売買とかやつぱありえんわ。アマミヤ逃がしてやんよ」

って言うてくれたのに、

「私だけとかなくね？意味わかんねえし」

って私が自分から拒否ってしまいました！

注 今の会話はイメージです。

あー…

やっちゃったわー…

私のアホ！！自分でも引いちゃうほどのアホ！！

ユリアンの助けしてくれるって申し出を拒否し、あまつさえ「ちゃんと私を売っぱらえ」的なことを言ってしまうなんて…

で、でも、これにはちゃんと理由がある…！！

ちょっと自信なくなってきたけど。

私はずっと、白い少年に言われた『君は、どんなことがあっても、「君」であることを誓いなさい』という言葉の、その意味を考えていた。

私が私であるということ。

それは、立場や関わり合う人がどんなに変わってしまっても、いつもの私を貫けってことだと思ったのだ。

そう考えていたからこそ、自分が売られちゃうなんて言う一大事が判明しても後回しにして、ユリアンの話を聞かせてもらった。

私は、いつだって自分のことなんかより、目の前で悲しんでいる誰かの方が、気になってしまうから。

そうやってどんな状況でも、私は私の正しいと思うものを信じて、正しいと思うことをする。

…あんまり無茶はしたくないけど。

それが、私。

まあ、この解釈があつていようが間違つていようが、私のやることにあんまり変わりはないけどね。

ハルカに会う。

それが一番重要なことだ。

少年は言っていたじゃないか。私の進む先にハルカがいると。だから私は、進み続ける。

私が考えたのは、私を売ることで、他の人たちが売られるのを阻止できたら...と思つたんだよね。

私が高額で売れるつてユリアンは言つてたし、ヴァンも私が高値で売れるつてことを言つてたみたいだし。

さつき私は、驚愕するユリアンと、困惑するヴァンをほつといて、檻の中に座り込んだ。

ヴァンは困惑しながらも少しほつとした顔で、この檻を出て行つた。

けれどユリアンは納得いかない表情で、未だに檻の前に座っている。

いつの間にか、すっかり夜も明けて、あたりは明るい。

この檻は屋外にあり、檻の外には、サーカスのテントや、その周りに屋台が並んでいるのが見えた。今はまだ、ショーの準備中だ。

ショーが始まる時間になれば私のいる檻は、やって来たお客さんから丸見えになる。

「ねえ、裏の商売の商品がお客さんに丸見えじゃあ、怪しまれないの？」

座り込んで押し黙っているユリアンに話しかける。

ユリアンは拗ねた口調で答えた。

「見世物として…貴重な猛獣を飾っているだけだよ。誰も気にしない」

へえ…そういうものか。本当に人として扱われないんだな。

この檻、壁に作り付けられた簡易ベッドしかないこの空間は、生活が丸見えだ。トイレはあり、ちゃんとガラスの壁からは見えない作りになっていて、それだけは心底ほっとしたけど…。

うら若い乙女を見世物にするなんて、ひどいじゃない！

まあ、今の私は普通の人とは言えないかもしれないけどさ。

自分の、フサフサの太くて長い、黒いしっぽをふりながら、私は思った。

そのしっぽは、もしかしたら飾りかも…？と思っていた私の願いに反して、私の尾てい骨から、しっかりと生えていた。

しかも引つ張ると…超痛い。

夜が明けて少ししてから、ユリアンの横にあのシカ耳の双子がやって来て、ユリアンに付き合っただけの檻の前にあぐらをかいていた。

シカ耳の双子は、多分フォーンだ。ローマ神話に登場する牧神で、下半身と耳だけがシカで、あとは人間の形をしているという。

多分サーカスの衣装だろう、一人は青いレオタード、もう一人は緑のレオタードを着ている。

怖々と私を見ている双子が面白くて、私は牙をむいて唸って見せたりして、ちよつとからかった。…ら、ますます怖がられて、嫌われました。

反省…

私は所在なくなつて、ユリアンに質問した。

「さっき言ってた、ペリとか、クー・シーって、今どこにいるの？」

「…ペリは2人とともに大人しくしているから、二人で個室を使わせてる。クー・シーは、その隣の個室に閉じ込めてる。…泣き疲れて寝てるよ。まだ小さいけど、自分が両親に売られたことを理解してるみたいだ」

「そう…」悲しくなって、私は頷いた。

「アママ、そんなに僕が許せないか？」

ユリアンは、私の様子を窺いながら、思い詰めた表情で聞いてきた。

ユリアンは、私が腹を立てているからあんな「私を売ればいいじゃない」発言をしたのだと思っているらしい。

けれど、ユリアンにされたことなんて、今はもう、少しも気にしてはいない。

実はあんな、ユリアンを責めるような言い方をしたのは、訳があった。

ユリアンに言わせたいことがあるのだ。

ユリアンの本音を。

それは、ユリアン自身も気付いていないものかもしれない。

私は言った。

「ユリアン、私は何も怒ってなんかいないよ。…そう思うのは、ユ

リアン自身で後ろめたく感じているからでしょう。何をそんなに後悔しているの？」

「君を、傷つけたことを……」

「それだけじゃあないでしょ？」

私はユリアンの目をじっと見つめる。薄い茶色の瞳が揺れていた。

「ねえ、ユリアン、後悔しているのは、後ろめたく思っているのは、何故？」

ユリアンは目をつむって考えている。

「僕は……僕は」

パツと目を見開いて、呟いた。

「この仕事が、後ろめたい……」

ユリアンは、驚いた顔をした。

自分でもそんなことを言うとは思っていなかったようだ。

しかし、私が言わせたかったのは、まさにこれだったのだ。ユリアンに、自覚させたかった。ユリアン自身が、この仕事を辛く思っていること。

この仕事は必要悪なのだと、まどろみながら彼は言っていたけれど、その言葉は本心ではないと思ったから。

私はユリアンに、この人身売買という仕事を、辞めさせたいと思っていた。

彼にとってそれが、やりたくない仕事なんだと感じたから。

大きなお世話かもしれないけど、ほっとけなかった。

これは私のエゴだ。

だって、ユリアンが自分自身で納得していない仕事を、するべきじゃないと思ったから。

「ユリアン！」

いつの間にか、ヴァンが檻の前にやって来ていて、不愉快そうに顔を歪めている。

今の話を聞いていたらしい。

声を荒げて言った。

「ユリアン、お前は言ったじゃないか、これは、必要なことだと。

…誰かがやらなきゃならない仕事なんだ。貧民街スラムのやつらが、子供を売らなきゃ金がなくて、本当に飢え死にすることになってしまふ。それに、危険な獣を捕まえていることで、その被害にあっている人々を守れていたじゃないか。それをみんなほっとけるのか？」

「ヴァン、それは…」

ユリアンは弱々しく呟いた。

ユリアンの言葉を遮って、ヴァンはさらに言う。

「俺たちが悪いんじゃない。こんな仕事をしなきゃまわらない、国が、世界が悪いんじゃないか」私はヴァンの言葉に、カチンときた。それは、ちょっとおかしいんじゃないか？

「ヴァンゲリス・オデュッセウス」

私は静かにヴァンの名前を呼ぶと、檻のガラス越しにつかつかとヴァンに近付いて、見上げて言った。

「あなたは、自分は悪くないと思っているの？」

私はヴァンをじっと見つめて続ける。ヴァンは怯えた表情を浮かべて、私を見下ろしていた。

「自分のせいじゃないって、自分がやらなくても誰かがやるんだって言うのは、ただの責任逃れでしょう。自分のやっていることが誰かにとっての悪行で、誰かにとっては、自分は悪なのだと、ちゃんと認めなさい」

ヴァンはたじろいで、檻から、私から一歩離れた。

「そうしないと、変わりたいとすら思えないでしょう。人のせいになっているんだから。本当の、いまの自分から、目を反らしているんだから……」

「知ったような口をきくな、野蛮な狼…おぞましい獣風情が」

ヴァンは苦々しい顔で言う。

「ヴァン！言い過ぎだ！」

ユリアンが立ち上がった。

私は気にせず、ただひたすらヴァンを見つめた。

「それじゃあ、ヴァン、あなたは何故、この商売をやっているの？」

「あなたは何を、そんなに怖がっているの？」

ヴァンは私を睨みつけて、動揺しながら、胸元からピストルを取り出した。

私に銃口を向けて、早口でまくしたてる。

「口を閉じろ！調子に乗るんじゃない。お前を、猛獣強姦が趣味の、変態貴族に売り飛ばそうか？それとも今すぐ、毛皮職人を呼んで、お前を襟巻きにしてみらおうか？」

「お好きなように」

につこり微笑んで、私は言った。

「私の体がどうなろうと、私の心は私のもの。あなたには、この口

を閉ざすことはできません」

H 実は私、キレると無駄に言葉使いが丁寧になる癖があるんDEAT

もう怒った！

ヴァンゲリス、覚悟しやがれっ！
てめえの腐った根性を、叩きのめしてやるあ！

第15話 ヴァンゲリス・オデュッセウス・ダウン

黒い狼は、ピストルを向けられても落ち着いたままで、俺をまっすぐに見つめてくる。

「ヴァンゲリス、それを下ろしてください」

狼は、有無を言わせない様子でピストルを示す。

口調こそ丁寧だが、それは懇願ではなく、命令だった。

まだ年若い雌の狼だと言うのに、この狼の一体何が、こんな威圧感を感じさせるのだろう。

俺は視線をさまよわせる。

絶対に、狼の目を見てはいけないと思った。

強い声にさえ、服従しそうになる。

どうして俺は、この狼に、圧倒されてしまっているんだろう？

「ヴァンゲリス…あなたに言ってるんですよ」

俺は何も言えなかった。

「こちらを見なさい！」

鋭い声に、俺はつい狼を見てしまった。

その真っ黒な、強い瞳に捕らえられて、もつ目を反らせなくなった。

「ヴァンゲリス・オデュッセウス。それを下ろしなさい」

俺は狼の激しい眼差しに、戦慄した。
なぜだろう？わからない。

同時にその眼差しに、魅了された。
なぜだろう？
…わからない。

その眼差しに射すくめられて、俺は金縛りにあつたように、動けなかった。

狼が軽くピストルに触れて、銃を持った俺の手を下ろす。
俺はされるがままになっていた。

「ヴァンゲリス、話をしましょう」

真剣に、真っ直ぐに俺を見つめてくる狼に、何故だかあらがつことができなかった。

何故だろう。

この狼、何者なんだ？

牙も爪も使わずに、俺を屈服させてしまった。

居心地が悪くて視線を外すと、怯えて遠巻きにこちらを窺う双子が見え、心配そうに俺を見るユリアンと目が合った。

「…何が聞きたい」

俺は観念して、狼に言った。

何故、脅された訳でもないのに、俺はこの狼の言葉に従ってしまうんだろう。

狼は微笑んだ。

「あなたが何故この仕事をしてるのか、聞かせて欲しいな」

長年この稼業をやってきたが、こんなにふてぶてしい商品は初めてだ。一体どうしてこんなに自信満々なのだろう。

自分が殺されないという、自信。

商品として捕らえられた人々はいつだって、ただ怯えるか、怒りを露わにするか、逃げるためにこちらを利用しようと同情を誘ってくるか…いつだってその何れかの態度をとるものなのに。どうしてこんなに、堂々として居られるのだろう。

子供には話を聞かせたくなかったため、双子を追い払う。恨めしげに見返してくる双子を睨みつけてから、俺は狼…アマミヤに向き直った。

「先に聞くが、お前はそんなことを聞いて、何がしたいんだ」

「あなたの本心が聞きたいだけだよ。ねえ、二人とも、大金が欲しいんだよね？」

その言葉に、俺とユリアンは絶句した。

アマミヤは続けて言った。

「…大金が必要な、理由があるんじゃない？」

首を傾げて同意を求めてくるアマミヤを呆然と見つめ、俺とユリアンはまた視線を交わした。

何故知っているんだろう。

…まさか、奴らの手先なのだろうか？

そんな考えが頭をよぎった。しかし、すぐに打ち消す。奴らはこの貴重な生き物を、ただの刺客として送ってくるような無駄はしない。普通の狼ならまだしも、黒い毛皮の狼だなんて。

おそらく、やつらがこの存在を知ればすぐに拘束して、思いつく全ての方法で、この狼を使って利益を貪り取るだろう。

それに、俺やユリアンみたいな組織立っていない敵を、奴らは意識すらしていない筈だ。

アン・デイ・フロイデ。通称「フロイデ」

そして、犯罪組織であるフロイデを設立し、操っている国、W・ライオット。

…その全てを裏で操る男、フロイデのボスであり、W・ライオットの若き独裁者…世襲制によってその地位を手にしたプレジデント、ルートヴィヒ・ヴァン・ネーフェ。

それが、俺とユリアンの共通の敵だ。

大金が必要だった。

ユリアンは妹の為に。俺は俺の為、ネーフェに近付くために、どうしても必要だった。

アママミヤはそれを知っているのだろうか？俺が勘ぐっていると、アママミヤが言った。

「理由は知らないけど…」

ふとアママミヤを見ると、アママミヤはユリアンをじっと見つめていた。

ユリアンの方を見ると、顔色が真っ青だった。

さっきの俺の様に、アママミヤの視線に射すくめられている。

ユリアンはアママミヤの揺るがない眼差しに根負けしたようで、躊躇いがちに口を開いた。

俺はまた驚愕する。

まさか、昨日今日会ったばかりの人間に、しかも商品にしようとしている相手に、そのことを話すつもりなのだろうか？

そもそも基本的に、いつもなら商品とは会話さえしない事になっているのだ。情が移ってしまわないように。

しかし今回は特別だ。この狼に、調子を狂わされている。

俺は内心頭を抱えた。

「大金が必要なのは…」

「ユリアン！」俺は話し始めてしまったユリアンの言葉を遮る。ア

マミヤとユリアンは、俺がここにいることを今思い出した、とでも
というような表情を向けてきた。

「お前、どういっつもりだ？ユリアンから金の使い道を聞き出して
どうしようって言うんだ？弱みを握って利用するつもりか？」

俺はアマミヤに言った。この言葉に怒るか動揺するかと思ったのだ
が、アマミヤはただ不思議そうな顔をした。

「聞き出す？…別に、ユリアンが話したくないなら聞かないよ」

そう言って、ユリアンの顔を窺う。

「ユリアン、言ったでしょ。話したくないことは話さなくていいん
だよ」

ゆっくりと言い聞かせるように、それはユリアンを子供扱いするよ
うな言い方だった。

俺は違和感を感じて眉をひそめたが、ユリアンは顔色が回復してい
て、アマミヤに笑顔を向けた。

「いや、アマミヤ、君にならもう何でも話せる気がするよ」

俺は、耳を疑った。

ユリアンとは長年付き合ってきたから、その言葉に嘘がないことが
分かった。

あの、疑り深く、仲間にさえ絶対の信頼を寄せることのない、冷静
で思慮深くずる賢く、必要な時意外は自らのことを話すこともない
…そんなユリアンが、こんな昨日今日会ったばかりの、それも狼に、

こんなことを言うなんて。

何だ？何なんだ？ユリアンはこの狼を何故そんなに信頼できるんだ？
本当にどうしてしまったんだ。

あまりにも理解しがたくて、魔法でユリアンが操られているのでは
と思い、俺はこっそり、いつも携帯している魔法道具でその場の魔
法を観測した。

けれども、アマミヤからは魔法の気配を少しも感じていなかったか
ら、それが取り越し苦労だと分かっていた。

案の定、俺の持つ、魔法で威力を上げてあるピストル以外、その場
には何の魔法も検知されなかった。

それで安心したような、むしろ更に不安なような、複雑な心境にな
る。ユリアンが話を始めたが、止めるのは諦めた。

「妹が、アイリスがW・ライオットの政府に連れて行かれてから、
僕はヴァンに協力してもらって、その行方を探していた。同時に、
ルーディのかたき、アン・ディ・フロイデの一味についても調べた」

アマミヤが頷く。ルーディの話は既に聞いていたのか。俺はますま
す困惑した。アマミヤとユリアンは以前からの知り合いか？その位
の信頼関係を築いているじゃないか。

けれど、ユリアンはアマミヤについては何も知らないようだったし
…。

俺がそんな思考を巡らしている間にも、ユリアンは話を続ける。

「そして分かったのは、フロイデのボスとW・ライオットの大統領
ルートヴィヒ・ヴァン・ネーフェが、同一人物だということだった。
僕はとある権力者に頼んで、ネーフェに数分間だけ近づくことがで

きた。…まあ、手も足も出せない状況ではあったんだけどね。国際会談に、知り合いの権力者の秘書の一人として潜り込ませてもらったんだ。武器も魔法の道具も、そういったものは何一つ持ち込めないし、何十人ものSPが見守ってる場面だから、ちよつとでも変な動きをしたら即取り押さえられる。そんな中で僕はネーフェを呼び止めて、サインを求めた」

「サイン？」

アマミヤは首を傾げた。

それも知らないのか。俺は無意識に口を開いていた。

「ネーフェは独裁政治だが評判が良く、国民から指示されていて、国外でも人気があったからな」アマミヤがふうん、と頷く。

ユリアンは続ける。

「ネーフェはグリフィンのSP…」

「グリフィンって、グリフィンって下半身がライオンで上半身が鷲の！？」

アマミヤが突然話を遮って聞いた。

ユリアンはその迫力にちよつと気圧されながら頷いた。なんでそんなわかりきったことを聞いてくるんだろっ、この少女は。

ユリアンが話を続ける。

「…SP5人に囲まれていたけど、あいつ、僕を見て…笑いやがって…かと思うと紙に何か書いて、SPに言っ僕によこした。その紙には、アイリスを10億で売ってやると書いてあったんだ」

「…こんな言い方はなんだけど、その約束、信用できるの？」
アマミヤは、訝しげに聞いた。

「それが、ただの紙ならそうなんだけどね…それを書いた紙は、魔法道具だったんだ。魔法の道具は持ち込めない筈なのにどうやったかは分からないけど、その紙は、書いた契約を破ることができない魔法がかかっていた。散々調べたけど魔法は本物だったから、とにかく信じるしかないと思った」

「だから、金が必要だったんだ」

ユリアンは話を終えた。

「そっか…」

とアマミヤは頷いた。そして、体ごと動かして俺の方を向いた。

「ヴァン、教えてくれる？」

ユリアンには言いたくなければ言わなくていいと言っておいて、俺は強制なのか？と思ったが、その凶器のような、強烈な鋭い視線に負かされて、俺は頷いた。

「…いいか、この話をするのはお前で二人目だ。俺以外はユリアンしか知らない。会ったばかりのお前に話すのは、お前がお前の売買を承諾する交換条件だと思うことにするが、それでもいいんだな？それに、他言できないように、ユリアンに魔法をかけてもらう」

こう言えばアマミヤは諦めると思ったのだが、アマミヤはなんの気

も無しに頷いた。

「うん、いいよ」

なんて図太い神経なんだろう。全く理解できない。

俺の話を聞く代わりに、自分は売られても構わない、ということなのに。他言もできないから、話を聞けてもなんの役にも立たない。

そんなことも理解できない愚か者なのか？

「ヴァン、話したくなくても、聞かせてもらおうよ」

アマミヤの眼差しと視線ががち合う。

真っ黒い炎が燃えているかのような…

揺るがない眼差し。

よく見れば、少女の真剣な表情は、少し上目遣いの大きくてまつすぐな黒い眼は、胸が痛むほどに美しいと、俺はそのとき初めて気付いた。

なんてことだ。

…それでも売ってしまえるのか？

この少女を？

あまりにも貴重な獣であり、同時にこんなにも魅力的な、一人の少女を？

だから商品と話をするのは嫌だったんだ…

俺は考えあぐねて、迷っていた。

何故だろう？

俺はこの狼に、話を聞いてほしいなんて、思い始めている。何なんだ？この狼は？

これは、魔法なのか？

「聞かせて。あなたの、物語を」

アマミヤに促されて、俺は無意識に口を開いていた。

第16話ウァンゲリス・オデュッセウスの物語

「…俺は、W・ライオットの隣国、ドーランの貴族の息子だった。

16歳になったある日、ルートヴィヒ・ヴァン・ネーフェ率いる盗賊団に…これは後のアン・デイ・フロイデの奴らでもあるんだが…
そいつらに、俺の両親と姉弟は殺された。

俺の父は食品を扱っている、世界的に有名な企業のトップだった。

ネーフェは、あいつ自身世襲制で大統領を決めるような国のその一家に生まれて、ほとんど王族のような扱いを受けて育った奴なんだ。
だから、欲しいものも、欲しくないものすら、何でも手に入る環境を持っていた。

それがなんで盗賊団なんてやっていたと思う？

自分の家にあるものの方が、盗みに入った先にある何よりも価値があると言っのに。

あいつはな、殺戮が好きなんだ。

そして、他人を苦しめることも。

人を惑わし叫ばせて喜ぶような、そんな人間なんだ。

でも残念ながら、恐ろしく頭の良い人間でもあった。

だから、盗賊団の手足に行動させて、自分の正体を念入りに隠しながらも、念には念を入れて自国では何の犯罪も犯さなかった。他国で人を殺し、他国の誰かの大切なものを遊び半分で盗み、壊す。

俺の家族を殺したのも、やつ遊びの一つだった。

どうして家族の中で、あいつと同年代の俺だけが生き残ったと思う？

それに何故、俺があいつの正体を知っていると思う？

あいつが巧妙にひた隠しにしていた自分の罪を、何故被害者の俺やユリアンが知っているのか？

あいつは、遊んでいるんだ。いや、遊んでるつもりでいる。

あいつは自分が殺した人間の身内をわざと、一人だけ生き延びさせる。

そしてその「生き残り」に、その事件の首謀者がネーフェだと、強大な権力を持つ自身なのだと、わざと教えるんだ。

しかし、今や大統領となり、人々からは信頼を得て、賢き治世者として他国にもその名を轟かせている…そんな人間の罪をいち個人が糾弾したところで、誰が耳を貸すだろう。

だからネーフェは、どんなに罪を重ねたところで、絶対に捕まらない。

そうやって奴は、自分の選んだ人物に復讐心を植え付ける。

わざと殺して、わざと一人残し、わざと復讐を煽る。

あいつは、そんな風に自分への憎しみを撒き散らして、遊んでいるんだ。

いつか復讐を遂げに、誰かが自分にたどり着くのを待っている。

それも、奴にとっては、暇つぶしの「遊び」の一つでしかない。

狂った男だ。

絶対に許さない。

俺はあいつを、必ず殺す。

そう誓ったんだ。

そして、その為になら、俺は何だって出来る。

家族を失い、家も燃やされ、一人逃げ延びた俺は、このベガーズ・バンケットの一座に拾われた。

一座はそのときから既にシルク・ド・ノワールを開いていた。世界中が参加できるような規模になってからは、まだ10年も経っていないが、元々人身売買で大きくなった一座だ。

一座で世話になり、俺はリングマスターに息子として扱ってもらって、家族を失った悲しみは、いつしかゆっくりと癒されていった。

そんなある日のことだ。

突然、ネーフエの使者が俺を訪れた。

その時の使者は、アマデウスという名の…銀色の狼だった。

あんな恐ろしい生き物がいるなんて思わなかった。

俺の前に現れたとき、一座のマーメイドの一人の女性の腕を噛み千切って、奴は…その腕を喰ったんだ。本人の目の前で。

マーメイドは運良く生きてはいたが…

ゾツとしたよ。

人型になれる幻獣同士での共食いなんて…おぞましい。
だから、未だに狼は恐ろしくて仕方ないんだ。

…とにかく、俺はアマデウスにネーフエの話を聞いた。ユリアンと同じように、俺もあいつらを憎むように仕向けられたんだ。そしてその通り、憎まずにはいらなかった。

そして、俺は一度、ネーフエを殺す寸前まで奴に近づいた。

…その時は失敗したが、そのときの事はもう思い出すのも辛いから、勘弁してほしい。

そのときあいつの手下に捕まった俺を、はじめて自分を殺しかけた者として、奴は生かした。

「一度だけだよ」

そう言っただけで笑ったネーフェの顔は、今でも忘れない。すごく嬉しそうに、あいつは笑っていたんだ。

俺はその時ネーフェが、アマデウスより、この世界中の誰より、おぞましいと思った。

俺は、今のままではネーフェの近くには行けても、あいつを滅ぼすことはできないと悟った。

だから、大金が必要なんだ。

金で、俺が貴族だった頃の家柄と爵位を買い戻す。

そうすれば俺は元々住んでいた国の王族に仕えることができる。

その地位と権力があれば、やっとあいつと同じステージに立てる。

互角に戦えるんだ。

俺の母国……ドーランの王族に仕えられれば、ドーランとW・ライオットは隣国同士で親交が深いから、ネーフェ自身や奴の国についての情報は格段に手に入りやすい。

いつかネーフェを今の地位から引きずり下ろし、民衆の前にあいつの正体を見せつけてから、あいつを殺す。

W・ライオットは強大な世界一の大国だが、何年かかろうとやってやる。

それは、俺の生きている意味だ。

…だけどな。

ベガーズ・バンケットも、俺の生きる意味なんだ。

前のリングマスターが死んでからは、その息子代わりだった俺がリングマスターをやってる。

俺は仲間達を失いたくないんだ。

みんな、良い奴らばかりで…。

一度に大金が手に入る人身売買は、罪悪感を持っているけれど、恰好の収入源だったから辞められずにいた。

いいか、アマミヤ。

人身売買なんてするような人間でもな、別に生まれつき極悪人なわけじゃない。

俺の前のリングマスターだって、はじめから人身売買で生計を立てようとした訳じゃない。

人が良くて、目に映った全てを手っ取り早く、救える時に、その時だけ救ってきた結果が、こんな形になったただけだ。

行動は結果的には悪になつていたかもしれないし、金が欲しかったことを否定はしないが、それがその行動の全てでもない。

言い訳だ。けれどそれでも、これは事実だ。

アマミヤ、お前は俺が自分を悪だと認めていないと、人のせいにしていただけと言つたな。…それは間違つていないかもしれない。でも、俺がいつも自分自身には何の罪もないと思つていたわけではないと、分かつてくれ。

人を売る度、いつだって、懺悔して許されたい気分だったさ。でもな、目の前に、たとえ汚い方法しかなくても救える命があつたとしたら、俺はそつちをとつてきたんだ。

それがただの自己満足だと分かつていても、俺にはそうする以外に術がなかったから。

それが俺の正義だと、信じていたから。

第17話 サムシングアバウト…

「…話を聞かせてくれてありがとう」

私は話を終えたヴァンに言った。

無理やり話を聞き出してしまったことを私は少し後悔していた。
語りながらヴァンは、自身に降りかかったことを思い出して苦しんでいたから。

酷いことをしてしまった。

おばあちゃんが、人の話は聞かせてくれるまで待てって言うてたのに…。

もう、やらない。私は反省する。

絶対の悪なんて無い…もちろん、絶対の正義も。

それでも、ヴァンはヴァンなりに、正しいと思うことをやって来たんだ。

誰もそれを、否定できない。

誰もそれを、肯定できないように。

私を売れば助かる人がいて。

いま自分の助けられる誰かの為に、モラルを捨てることは悪いことだろうか？

分らない。分らないけれど、もし悪いことだとしても、私もそちらを選ぶ。

ヴァンは復讐のため、ユリアンは妹を助け出すために、お金が必要だった。

ユリアンの妹を助ける為の10億は、私を売ればお釣りがくるという。

…10億ってなんじゃい。

こっちの通貨の単位ってどんな感じなのかな…日本円でどんくらいなんだろう？

まあ、とにかくにも、私を売ればユリアンの妹は助かるし、今商品にされそうな人達も売られずにすむかも。

…ヴァンの計画の手助けにはなりそうもないけど…いま私にとって大切なことは、自分に助けられる人を助けることだ。

「ねえ、私を売って大金を手に入れる。それから二人が私を逃がす！…って、できないかな？」

「はあ？」

ヴァンとユリアンは、同時に呆れた声をあげた。
あまりにも自分勝手な言い分なのは、私も承知の上だ。

「そんなことをしたら、もうこの商売、できなくなるでしょ？ユリアンもヴァンも、心置きなく辞められるじゃない。私も襟巻きにされないで済むし」

私は微笑む。

ヴァンはすごい剣幕で言った。

「お前を購入できるのは、街一つ余裕で買えるようなレベルの大金持ちだ。それに、シルクドノワールのショーは、貴重な商品が出るときは“ブレイド”で生中継される。お前みたいな高額確実な幻獣種なら、世界中が注目する大規模な競売になるだろう。だから、下手したら「国」にお前が買い取られることがあるかもしれない。そんな強大なものが、お前を逃がさない設備にも大金はたくことになるんだぞ。その上、配信された映像で、アンダーワールドではお前の持ち主が誰か世界中に知れ渡るんだ。逃げ出すなんて、絶対に不可能になる」

ユリアンも、ちょっと怖いくらい血相を変えて言った。

「それに、万一逃げることでできたとして、君にメリットは一つもないだろ！？」

私は、困惑する二人の反応を無視する。

何を言われても、意志を曲げるつもりはなかった。

私自身、自分を売るなんて、正気の沙汰じゃないと思う。

それでも私は、私の選んだ正しいと思った道しか、進めないから。不器用で考えなしでも、それでも。

二人を見つめて私は言った。

「私の進む先に、待っている人が居るの」

「私にとって正しいことをするんだ」

「力を貸してくれない？」

「…お願い」

真剣に2人をじつと見ると、2人は戸惑いながらも、しぶしぶ頷いてくれた。

ユリアンに、私がオークションどころか、自分の種族のことさえ知らないと聞かされて、ヴァンは困惑しながらも、狼について丁寧に説明を初めてくれた。

「まず…黒い狼なんて、聞いたこともない。そもそも黒い生き物が珍しい。そんなことも知らないのか？」

私はなんだか気後れしながら、頷いた。

私の常識の無さを、世間知らずどころの騒ぎじゃない、とこぼしながらも分かりやすく説明してくれるヴァンは、以外と面倒見の良い人なのかもしれない。

出身国や街を聞かれても、何て答えたらいいのか分からず、私は曖昧に答える。

ちよつと怪しまれてる気がするけど、まあ、しょうがない。何も知らないことをヴァンに驚かれる度に、ちよつと凹んできたけど。

「…いいか、幻獣種の中で、黒い獣は、猫科と鳥類にしかないと言われてる。それでもすごく少ないんだ。突然変異の黒い生き物が現れることはあるらしいが、最近は殆ど聞いたことはない」

「…自分で黒く染めたりしないの？」

私は不思議に思つて聞いた。

「人間じゃあるまいし…俺たちのような幻獣種には、染料が効かないだろ？」

そうなんだ！？…不思議だなあ。

「狼は絶滅危惧種として保護されているから捕まえるのは違法だし、怪力で凶暴で、最強の種族とも言われている。しかも、基本的に狼は群れで生活する。だから普通なら、捕まえるには実力のある人手が大勢必要だから、リスクもコストも高すぎる。だから、狼つてだけですごい値段になるわけだ。それに加えて黒い毛皮ときたら、お前は、この一座の全員を買っても釣りが来るくらいの値段になるな」

私は目を見張る。

「ベガーズ・バンケットには、何人位の人がいるの？」

「いつもなら仲間の芸人だけで50人くらい。今は、この地域だけで雇っている人間も入れて、70人程度かな」

「…そんなに？」

ヴァンとユリアンは頷いた。

私はあまりの自分の高額商品っぷりに驚いた。いや私が、70人分…以上の値段つてさ…
詐欺にならない？

その後のヴァンの話を整理すると、こちらの世界には、“ブレイド”と呼ばれるコンピューターネットワークがあり、それで世界中が繋がっているらしい。

二人の説明を聞くと、それは呼び方が違うだけで、私の居た世界のインターネットと同じ様なものだと思われる。

ただ、魔法も絡んでくるらしく、現代のインターネットよりもちよつと万能みたいだ。

「えーつとつまり、ここで開催される人身売買の様子は一般の人は見れないけど、闇取引をする犯罪コミュニティのネットワークであるアンダーワールドでは、世界中に中継されるから、誰が誰の『主人』になったのかが知れ渡っちゃう…」

私はユリアンとヴァンを見る。二人は頷く。

「で、例えば私が売れて、そこから逃げ出せたところで私の顔は割れてるし、『主人』も知られてるから、捕まったらすぐに『主人』に送り返されちゃうわけね？」

「そういうことだ。それにお前の買い手は、生態系を揺るがすほどの貴重な生き物を手に入れたわけだから、お前の逃亡よりも盗難を心配して、セキュリティは最上級のものにするだろうな」

…今この人、さらつと生態系を揺るがすほどとか言わなかった？

黒い狼…パネエ…

啞然とする私に気づかず、ヴァンは続けた。

「…そうになると、コンピューターと大掛かりな魔法を使つての複合ロツクだろうな…」

そっかーそれは大変だね。

知らんけど！

…そもそも、魔法って何…？

さつきも契約書が魔法の道具であーたらこうたらと言つてたけど、魔法と言われても私には、あの有名な、イナズマ型の傷のある丸メガネに黒髪の魔法使いの少年しか思い浮かばない。

箒で空飛んじやう系なの？

「魔法って…ユリアンが使つてたやつとか、さつきの紙の話とかのことでしょ？…それって、そんななんでもありなものなの？」

そう言いながら顔を二人に向けると、二人共愕然とした表情で、口をあぐり開けて私を見ていた。

わあ、どん引きされてる

「…もう、お前にいちいち説明していたら埒があかない。かいつまんで今の話だけ説明するから、しっかり聞いとけ。質問は後にしろ」
うわあ、ヴァンがめっちゃイライラしてる。しょうがないじゃない、知らないもんはさ…

「複合ロックの場合、コンピューターでのパスワードや指紋や虹彩や声紋の認証やらをパスしても、定めた人間しか入れない魔法や、瞬間移動魔法、番人召還魔法、条件魔法とか…まあ、そういう様々な魔法が二重三重にかけられている。それらを全て解除するには、飛び抜けて優秀なハッカーか詐欺師か、高位の魔法使いが、数人は必要だ。そのくらいの腕を持つ奴を雇うなんて、経済力も権力も持っていないと無理だな。だからそんなところからお前を助け出すなんて…俺たちには不可能だ」

あああ…

なんて世界だ…

アンダーワールド（裏の世界）なんて言われても、私が知ってるのは、ヤ。ザってという言葉くらいのもんなのに…そんなの、本当に存在するだなんて。

しかも、科学と…魔法が両方発達しているだなんて。
なんだか複雑だな。

私を売れなんてかつこつけて言っちゃったけど、これは思ったより大変なことになりそうだ…。
毛皮より生きたままの狼の方が値打ちがあるとユリアンに聞いたから、殺されることはないと思ってただけど…そこまで黒い狼って

ことが珍しいとしたら、私、人体実験とかされちゃったりしないかな？この世界のことがまだよく分からないから、ちよつと不安だ。

わあ！どうしよう！

私は頭を抱えた。

売られたらもう、逃げられない。

けど、私を売らないと、ユリアンの妹を助ける為に必要なお金が手に入らない。

それに、この人たちに、人身売買なんて残酷な商売を辞めさせたい。

ヴァンは必要悪と言ったけれど、ユリアンもそう思ったがっていたみたいけど…

人身売買は、それは立派な極悪稼業だ。

人は物じゃないし、自分が売られたいと本当に思う人なんていない。

だから私は、私を売ってほしいんだ。

他人が辛いのは嫌だけど、自分が辛いのは我慢すれば良いだけだからね！

せつかく今私、貴重な生き物らしいから、自分のそれを利用しない手はない。

…本当に高値で売れるのか、はなはだ疑問ですけどね！

現物（リアルで私を）見たら、「やっぱりいいりませんこんな貧相なの」と言われちゃわないかな…

…誰が貧相だ！！

まあとにかく、お金は手に入れて、誰かのものにされずにすむ方法はないかなあ…

いや、それも犯罪だけだね。でも、人を金で買おうとするあくどい奴からちよつとぶんどるくらいなら…ギリギリ有りかなって…。

私は頭を抱えて考え込んだ。

私…黒い狼を買ってもらって…そんで買った人が、どうしても買ったばかりの黒い狼を手放さなきゃならない状況に持って行けたら…。

「ねえ、「主人」が私を手放さなきゃならないようにできないかな？警察に助けてもらうとかさ」

ユリアンとヴァンはまたもや顔を見合わせる。

「…政府は信用できない。もちろん警察も」

ユリアンが憎悪を隠そうともしない表情で言った。

ヴァンも苦々しく言う。

「主人になったのがどの国の住人でも、はっきり言って人身売買について口を出す政府はない。アンダーワールドでは当たり前のことだし、どの国の政府も黙認している」

「そんな…」

私はちよつと絶望的な気持ちになった。

私のそんな呟きを聞いて、ユリアンが申し訳なさそうに視線をよこす。責任を感じているみたいだ。

私は、気にすんな！って意味を込めて、微笑んでみせる。いきなりユリアンはすごい勢いで顔ごと視線をそらした。

…私の笑顔がそんなにきもかったか！

すいませんね！

でもそんなにあからさまに顔を背けなくてもいいでしょ！

気をとりなおして、私はヴァンの方に顔を向けて言った。

「ヴァン、何か手段はないかなあ？」

ヴァンは何故か、ちょっと戸惑った表情をしていた。

「何故お前は、自分が売られることを、何とも思っていないみたい
な言い方ができるんだ？」

「…そんなことはないけど」

ヴァンの言い分も分からないでもない。

私は実感が湧いてないのかもしれない。

「今」が元々の自分の日常とは、あまりにも違いすぎて。

けれど、たった一つだけ、変わらないこと。

どこに行ったって、私は私だってこと。

貫き通したいんだ。自分が正しいと思うことを。

「だって、誰かが悲しい思いをするのは嫌なんだもん」

ヴァンの目をじっと見つめて言った。

「私もヴァンと一緒になんだよ。目に映る全てを助けられないとしても、今自分にできるはやりたい。自分にできることで誰かが救われるら、それをしないではいられないでしょ？」

私がそう言つと、ヴァンの表情が和らいだ。

「アママミヤ、俺はもうお前を売る気はないよ」

ヴァンは、静かにそう言った。

第18話 アマミヤ・ジャステイス

ヴァンは私を売る気がなくなったと言う。

えっ何ゆえ？

「…何で？」

私は首を傾げて聞いた。いきなりどうしたんだろう？さっきまで私を売る気満々だったじゃないか。

「…お前が気に入ったから」

ヴァンは言った。

…いや、意味わかんないよ！？

私、ヴァンとは口論しかしてない気がするんだけど。

さらに首を傾げて私は尋ねる。

「…それじゃ、今捕まえてるクー・シーヤペリの人たちも、売るのを辞める？」

「…」

ヴァンは無言で渋い顔をする。

「私だけ売って、それでこの商売を引退するって約束してほしい。この商売は、私で最後にしてよ、ヴァン。そうじゃなきゃ、意味が

ないの」

本当は最初から、私に選択の余地なんてない。ヴァン達は私を捕まえたのだから、本当なら私の了承なんてとらずに、さっさと競売にかけてしまえば良いことなのだ。

それを、売る気は無くなったとヴァンは言ってくれたけど…。

けれど私にとっては、自分だけが免れても意味がないから。

ヴァンは困った顔で、考え込んでいる。

「ヴァン…お願い」

「…分かった」

ヴァンはとうとう頷いた。

ユリアンがギョツとしてヴァンを見た。

「ヴァン…」

「シルク・ド・ノワールを廃止するだけだ。ベガーズ・バンケットがただのサーカスになるだけのことだよ。アマミヤ、その代わりお前を高値で買ったたく。そして解放する…さっきのお前の言葉で思いついたんだが、一つだけ、俺達にも可能な方法がある」

「だが、もちろんリスクは高いし、お前が完全に無事でいられる保証はできない。少し…だいぶ運任せだ。ただ、お前も、お前を売った俺達をも守れるのは、その方法しかない。それでもいいか？」

私はヴァンに策があることに安心しながら頷いた。

…完全に無事でいられる保証は…のあたりは聞かなかったことにする！

「うん！ありがとう！…どんな方法なの？」

しかし良かった！

どうなることかと思っただよ…。

「俺達には、頼れるお友達がいるんだ」

ヴァンはユリアンに、含み笑いを向けた。ユリアンもそれに気付くと、ニヤリと笑った。

「つい最近、恩を売ったばかりだしな。あのプライドの高いライオン、嫌な顔するぜ」

「楽しみだな」

ユリアンとヴァンはそう言うのと、いたずらっこみたいに笑った。

ヴァンの言っていた「私を高値で売ってそのあと逃がして金は持ち逃げだキャッホー！大作戦」は、すぐには実行できないらしい。

あ、キャッホーとは言ってませんでした。すいません。

1ヶ月程準備期間が欲しいと言われてしまった。

ハルカに会うのはいつになることやら…。

まあ、私自身ノープランだったわけだから、文句は言えない。

私は、ヴァンとユリアンと話した後、捕まえていたペリとマーメイドが解放されるのを見届けることになり、ガラスの檻から出してもらえた。

ヴァンはどうも、決めたことはすぐ行動に移して約束もキツチリ守ってくれる、非常に生真面目な性質の人だと分かった。

…顔とか、怖いけど。

私に対して警戒心がありすぎたのも、アマデウスという銀色の狼へのトラウマのせいだったようだ。

全く、ユリアンの敵でもあるし、アマデウスというのは、なんて恐ろしい奴なんだろう。

でも、狼の種族がみんなそんな感じだったらどうしよう。絶対仲良くなれない。

まあ、とりあえずヴァンとユリアンを説得できて、良かった。ホッとして私は胸をなで下ろす。

ペリの男女は六十代位の老齡の女性と五歳位の少年だった。背中に翼はなかったので、おそらく人型に変身しているのだと思われる。

少年は女性に懐いていて、ヴァンが部屋に入ると、女性の後ろに縮こまった。

「あなた方を売ることは出来なくなりました。今からお二人は自由です。この街で仕事を紹介できますが、私達と二度と関わりたくないと仰るなら、お金をお渡ししますので好きな所へ行って下さい。残念ですがご家族の元へはお送りしません。私達はあなた方を、あなた方のご家族から買い取りましたから。…手荒な真似をして、申

し訳ありませんでした」

ヴァンはビジネスマンのような口調で喋った。けれど、最後の謝罪だけは心がこもっていた。

「…そう。それはこの子の為に、良かったこと」

女性は、影のある表情だけど、若い頃はさぞ美しい人だったろう、と私は思った。彼女は動揺もせず、怒りもしないで、ヴァンに言った。

「わたくしとこの子にはもう、本当の家族は居なかったのよ。あなたに連れてこられてからの方が、この子と一緒にいられて、ここ数年間よりもずっと楽しい日々でしたわ…」

私はその話にゾツとした。

彼女にとってヴァンに売られたことは、良いことだったと言うの？

じゃあ、私がヴァン達に人身売買を辞めさせたいのは、ただの自分の思い込みと下らないエゴで、それこそ、逆効果なのだろうか？

青ざめている私に気を使って、ユリアンが言った。

「彼女が売られたら、買うのは多分奴隷として扱う奴だ。もしアマミヤに助けられなかったら、死ぬまでただ働きさせられていたよ。ペリは長生きだし、食べ物に『香り』だけだから安上がりだって、使用人として人気なんだ」

ユリアンのフォローで少し気を取り直したものの、私は考えなしだったかと悩む。

「マダム、どうなさいますか？」

ヴァンは聞いた。

女性は男の子と一瞬目を合わせて言った。

「わたくし達二人を、こちらで雇っていただけないかしら？」

「…ええ、それは助かります」

ヴァンは微笑んだ。最初からそれを予想していたようだ。

「サーカスというのは、人手がいくらあっても足りないものですか」

女性はヴィマラ・ビスミラという名で、遠い国のお金持ちさんだったそうだ。夫と一人娘を亡くしてから、親切心と寂しさで世話を引き受けた遠縁の親戚の子供（といっても四十代だそうだが）の兄弟が好き勝手にヴィマラさんの財産を食い潰し、おまけに売り飛ばしたと言う。なんて恩知らずな…と内心怒り心頭だった私達だったが、女性は柔らかい微笑みを浮かべる。

「良いのよ。もう…」

何だかもう、全て許してしまっているみたいだった。

少し懂れる。

私もいつかこんな風に…許せるようになるのだろうか。

一緒に居た少年は、ポール・ヴェラという名前で、両親に売られてしまったという。体のいたるところに痛々しい痣があり…多分、虐待されていたんだろう。

彼はずっと怯えていて、話を全くしない。けれど、ヴィマラさんには心を開いているらしく、言葉は発しないものの、ヴィマラさんだけに笑顔を見せる。

この子も、ヴァンにここに連れてこられて良かったのだろうか？

私は早くも、自分の選んだ道に自信がなくなってきた。

何通りもの正義があつて。

それが、ある位置から見れば悪であるということ。

そうだ。私の人身売買を辞めさせる、という行為も、誰かから見れば…悪になるのだ。

それならもう、自分の信じたものを信じるしかないじゃない？

『あなたは、自分は悪くないと思っているの？』

『自分のやっていることが誰かにとっての悪行で、誰かにとっては自分は悪なのだと、ちゃんと認めなさい』

私自身でさっきヴァンに言ったことを思い出す。

あんな言葉、私がヴァンに言える立場だっただろうか。
私も、私の罪を意識していなかったのだ。

ああ、でも、ならば、どうしたら良かった？

この人たちが売られるのを見ていれば良かったの？

どうしたら…？

どうしたらいい…

頭がクラクラしてきた。

私は部屋の入り口から一步、後ずさる。

ユリアンとヴァンは私の前に立っていて、部屋の中でヴィマラさんと話していた。

ハルカなら、どうしたかな…

…助けて…

ハルカ…

ハルカ、ハルカ、会いたいよ。

話がしたい。

私は大丈夫って、言って…

突然、視界が真っ白になり、私は意識を手離した。

第19話 ペシミスティック・ユリアン・フローゲ

さっき、アマミヤが倒れた。

ヴィマラさんと話していた時のことだ。

背後に立つアマミヤの雰囲気の変容に気づいて、僕は何気なく振り返った。

アマミヤは部屋の外の壁に手を突いて、片方の手で頬を押さえている。その手は震えていて、顔色は驚くほど血の気を失って、漂白したように白かった。

「アマミヤ？」

名前を呼ぶが、聞こえていないようだ。

次の瞬間、アマミヤは支えを失って、その場に崩れ落ちる。僕はとっさに手を伸ばしたが、間に合わなかった。

本が落ちるような軽い音を立てて、アマミヤは廊下に倒れた。

僕はゾツとした。

アマミヤが倒れたことよりも、その、音の軽さが怖かった。

堂々として揺るがない瞳を持つ彼女の、真っ直ぐな姿に、僕は揺るぎない力強さを感じていたのに。

実際は、彼女の体は頼りなげで、容易く失われてしまいそうな、脆

い音を立てたから。

彼女だって、絶対に負けないわけじゃない。

傷つかない訳じゃない。

死なない訳じゃない。

僕はそのことに、今更ながら気づいてしまった。

…もう誰も、失いたくないのに。

僕はアマミヤに駆け寄ると、必死で彼女に呼びかけた。

「アマミヤ？大丈夫か？アマミヤ！！」

「ただの貧血だよ」

一座の専属医師、グリフォンのブライアン・ジョブズが、呆れ顔で言った。

僕の反応はあまりに大げさだ、と言いたげな顔だ。

少し取り乱して、アマミヤをヴァンの部屋のベッドに運び込んでから、一目散に医務室からブライアンを引っ張ってきた僕は、拍子抜けしてしまった。

彼女が日に2度もヴァンによって失神させられていることを話すと、ブライアンは「その影響がまだ体にちよつと残ってるかもね。でもすぐ治るよ」と、軽い感じで頷く。

「でも、本当に大丈夫？ 体に変な後遺症が残ってやしない？」
僕は必死でブライアンに言い募るが、ブライアンは首を傾げる。

「攻撃の魔法を何度も重ねてかけたって言うなら危険だが、魔法で失神させたのは一度だけだろ？ 最初のはヴァンの急所狙いの打撃でだけで」

僕が頷くと、ブライアンは苦笑して言う。

「大丈夫だよ。狼ってのは、その辺の犬や猫の幻獣や、ましてやお前みたいなさぎの幻獣とは頑丈さが違うんだから。俺でさえ、狼とやり合うのは御免だね」

「…うさぎじゃない。僕はヴォルパーティンガーだ」

僕はイライラしながら、ブライアンの言葉を訂正する。

グリフォンは、性格こそ理知的だが、ライオンと鷲という二種類の捕食生物の性質を持っているため、体が非常に剛健な上に好戦的で、普通の幻獣ならまともに戦って勝てる相手じゃない。

そんなグリフォン自身が闘いたくない相手だと言うなら、狼はグリフォン並みに丈夫だという言葉を、僕は納得せざるを得なかった。

「このお嬢さんが起きたら、しつかり栄養とらせてちょっと安静にしとけば、すぐに元気になる。お前は心配性なんだよ」

ブライアンは笑ってそう言うと、ヴァンの部屋から出て行った。

僕は放置していたテントの修理をしなければならなかった。アマミヤのことが頭を離れず、作業がもどかしかった。

一座の技術士である、マンティコアのルーに手伝ってもらって急いで終わらせ、僕は昼飯に誘おうと、アマミヤの様子を見に行った。

部屋のドアをノックするけれど、アマミヤから返事はない。まだ寝ているらしい。

僕はそっと部屋のドアを開いて、中に入った。

アマミヤはぐっすり寝ている。

起こそうとしてアマミヤの肩に触れようとした、その瞬間、アマミヤが呟いた。

「ハルカ…」

「！」

僕は驚いて、動きを止める。

起きてたのか？

そう思つてそつと顔を窺うが、意識は無いようだ。寢言か。
ハルカつて何だろう？

一瞬考えながらアママミヤの顔を見ていたら、アママミヤの閉じた瞼から、涙が一筋、零れ落ちた。

「…っ！」

あまりに驚いてしまつて、僕はそのときとつさに、魔法を使つていた。

気配を消す魔法だ。透明人間になるようなもので、効果は短いが、完全に気付かれないで人に近寄れる。

真つ黒なまつげを濡らして、涙は肌を伝つてシーツに落ちる。

濡れたまつげに触れたい…

そう思いながら僕は、じつと彼女の顔を眺めていたことに気付いて、恥ずかしくなった。

他人の無意識の涙なんて見てしまうのはバツが悪いから、僕はそそくさとドアへ向かう。

けれど、アママミヤの涙で頭の中はいっぱいだった。

僕に、涙の理由を教えてはくれないだろうか。

僕は彼女に全てを話してしまつたのだから、彼女も僕に全て語ってくれたら良いのに、と僕は思った。彼女は本当に、自分のことを言わない。

僕は、会って1日と少ししか経っていないと言つのに、アマミヤという狼の少女を、信頼するようになっていた。

いつもなら僕は、おいそれと他人を信用しない性質だと自覚しているのに。

アマミヤは、自分のことをあまり語らないが、嘘もつかない。しかも、荒野で話したとき、アマミヤを捕まえようとしていた僕の装った態度に気付いていたように、彼女には嘘が通用しない。

だから、アマミヤと話していると、自分の素直な本音を言うしかないのだ。

それに、アマミヤは驚くほど聞き上手で、話しやすい。

少ない言葉で僕の気持ちを救ってくれたように、僕よりだいぶ若いのに、他人の苦しみを理解できる、不思議な少女。

「私を売りなさい」

なんて、破天荒なことを言われた時は度肝を抜かれたけど、彼女はいつも、自分以外の『誰かのために』行動しているのだと分かった。そんな、優しい黒い狼。

彼女に、僕のことを信頼してほしい。

その、涙の理由を聞かせてほしい。

ハルカって、何だ？

僕はドアの近くの壁に寄りかかって、考えを巡らせていた。

するとまた、アマミヤが言った。

「ハルカ…！」

今度は少し大きな、悲痛な声だった。

アマミヤの様子を見てみると、目を覚まして、ゆっくりベッドから上半身を起こしているところだった。

「夢か…」

と呟いて、辺りをキョロキョロ見回している。魔法の効果はまだ続いていたため、僕には気付いていない。

アマミヤが目元の涙を拭う姿を見ると、僕は何故か胸が痛んだ。

何だろう。

彼女を見てみると、胸が苦しい。

魔法の効果が切れて、アマミヤと目が合った。

彼女はハッとして目を丸くするが、僕だと気付くと、すぐに笑いかけてきた。

嬉しそうに笑って。

まっすぐに僕を見る。

その視線に射抜かれるのが、好きだ。

突然、この子が欲しいな、と僕は思った。

狼が、ではなく、アマミヤが欲しい。

僕はそう思った。

第20話 l o s t t h i n g

気付くと、目の前にハルカが立っていた。

私の大切な男の子。

ちよつとだけ首を傾げて、目をすがめて、優しく笑っている。

ああ、ハルカがいなんて、悪い夢だったんだ。

そう思って、私は安心する。

ハルカは言った。

『香子、お前は分かったふりをしてる』

『思ってるだろ?』

『絶対の何かなんて存在しないって』

『絶対の悪も、絶対の正義も…』

『でもね、一個だけは信じていいよ』

『絶対の愛を』

「ハルカ…」

自分の声に目を覚ますと、私は見知らぬ部屋のベッドにいた。

「夢か…」

何て残酷な夢だったんだろう。
そして、なんて救われる夢。

私は目元の涙をぬぐいながら、部屋をぐるりと見回した。

そこはペリの二人が居た部屋と似ていた。

大型トラックの中の、こぢんまりとした一室。

木製の、アールヌーヴォー調の小さなチェストとベッド、それだけで部屋はいっぱいで、壁には額に入った写真がたくさん飾っていた。

なんだか、懐かしい感じがした。古い木造の建物みたいな匂いがするからだろうか。他にも、ムスクのような香水の匂いがした。

この匂い、ヴァン…？

そう思いながらベッドから出ると、空いたドアの横にユリアンが立っていることに気づいた。

うお！？

いつからいたの！？
ちよつとー！怖いじゃん！

「…ここって、ヴァンの部屋？」
何故か目が合っても無言のユリアンに、私の方から話しかける。

「…ああ。ヴィマラさん達の部屋のすぐ隣だったから、ここに君を運んだんだ。体の調子はどう？」

あれ、運ぶって…私、どうしたんだっけ？
あんまり覚えてないけど…ヴィマラさん達がベガーズ・バンケットに入ることになって…その後の記憶がない。

考えこむ私に、ユリアンは言った。

「君がいきなり倒れるから、びっくりしたよ…一応医者に見てもらったけど、貧血だったさ。今から昼飯だから、食べて今日は寝てれば？」

ユリアンはぶっきらぼうに言うけど、氣遣ってくれていると分かる。

そういえば私、まる一日くらい何にも食べてないんだっ…。
空腹過ぎて倒れちゃったのかな。
…それってすごいまぬけじゃん！

「ありがとう。ごめん、迷惑かけちゃったね」

申し訳なくてしょんぼりと頭を下げる。
私が倒れるなんて、珍しいことだ。
健康だけが取り柄なのに…！

「僕の方が迷惑かけてるし、いいよ」

ユリアンはちよつと決まり悪そうにしている。

「じゃあ、お互いさま」

私は言った。ユリアンはちよつとホツとした表情になる。

今、ユリアンはTシャツにジーンズのすごくラフな格好で、出会ったときのマフィアが警察官かのような、トゲトゲしい近寄りがたい雰囲気はしなかった。そういう格好だと、髪を下ろしているのもあって、さらに幼く見えた。

「…ねえ、そういえばさ、ユリアンっていくつなの？」

私は話を変えようと聞いてみる。

ちよつと気になってたんだよね。

外見の印象でいうと、予想では私と同年くらいなんだけど…。

「僕は…はつきりとは分かんないけど、大体21くらいかな」

意外にも、ユリアンは年上だった！

DSで甘えんぼでいじけむしのくせに、私より四才も年上だったとは…

「アマミヤは？」

ユリアンに聞かれて、私はにっこり笑って言った。

「いくつに見える？」

これって、一度は言ってみたいセリフだよね！

ユリアンは真顔で即答する。

「12才くらい」

えええええ！？

待て待て待て！！

そんなに若いと思われてたの！？

「違うよ！私はもう17だよ！」

ピチピチの女子高生だっつーの！

ショックを隠しきれずに慌てて訂正すると、ユリアンはちょっと笑って言う。

「嘘だつて。最初からその位だと思ってた」

なんだ…ホツとする私に、ユリアンはすかさず続けた。

「…でも、ヴァンは最初は本気で10才位だと思ってたみたいだけど」

「うそ！」

私の衝撃を受けた顔に吹き出して、ユリアンは声をあげて笑った。

私はちょっとショックだったけど、同時に安心した。
何故だかさつきからユリアンはぼんやりして、ちよつと元気がなかったから。笑顔が見れて、嬉しくなる。

「行こうアマミヤ。早くしないと、食いつばぐれることになるよ」

ユリアンに促されてトラックを出ると、すぐ前の広場に、祭りの屋台みたいなカラフルなテントが張っており、大勢の人がその周りに集まっていた。

その光景に、私は啞然としてしまった。

そこには、完全に人間と同じ様な容姿を持つ人は見当たらなかった。
ユリアンのように頭に獣の耳のある人なんて序の口で、人間の要素が皆無な、幻獣そのままの姿もちあらへ見える。

下半身がライオンで上半身が鷲のグリフォン。

半人半馬のケンタウロス。

頭に山羊のようになると曲がった角を持つ女の子。

確実に私の二倍は大きい人。

猫耳なのに、背中にコウモリのような翼を持ち、おしりにサソリの毒針の尾がついている…何だかよくわかんない人。

もうとにかく、ありとあらゆる不思議な生き物から、ギリギリ普通の人が仮装しただけみたいに見える人まで、老若男女、わんさか。

ベガーズ・バンケットの仲間は今70人とか言っていたけど、確実にそれ以上の人が広場にひしめいていて、それは圧倒される光景だった。

ユリアンは、せわしくキョロキョロする私を引っ張って屋台までたどり着くと、私を屋台の脇の日陰に残し、果敢に屋台に群がる人ごみに飛び込んでいった。

私が屋台の脇で手持ち無沙汰に突っ立っている間、周りから痛いくらいの視線を感じた。

横を通る人にジロジロ見られ、大胆な人にはしげしげと顔をのぞき込まれた。

大半の人は、恐々と遠巻きに、けれど興味津々と言った様子で私を見てくる。

一瞬不思議に思ったけれど、私はヴァンの話を思い出した。

黒い毛皮を持つ生き物は、めちゃくちゃ珍しいんだっけ。

そう考えて周りを見ると、人々は全体的に…色が薄かった。

髪が黒い人は本当に全くない。

色が濃くても、しっかりした赤や茶色くらいが限界で、殆どの人の髪色が金髪や薄茶色、シルバーや栗色、亜麻色、白。

肌の色もホワイトからゴールドスキンまで様々だけど、黒や褐色の肌の人はいない。

でも顔の造形やなんかを見ると、人種も種族もいろいろのようだ。

この世界の人たちは基本、色素が薄いのかも。洋服の色も、濃い色や、ビビッドカラーは少ない。

視界は、意図的にペールトーンに統一されているのかと思えるほど明るい色合いだった。

そのとき、ユリアンがカレー（っぽいもの）が入った器を2つと、座布団並みに大きなナン（っぽいもの）を一つ、四角いビニール袋にストローを刺した（…袋がコップ代わりらしい）ジュースを2つ手に持って、屋台の人ごみから出てきた。

「ヴェジタリアン向けの、大豆肉の野菜カレーにしといたから」

そう言いながらユリアンはカレーを寄越す。

ユリアン、いまだに私がヴェジタリアンだと勘違いしてる…まあ、それでも別に困らないし、良いか。

…この世界にも大豆あるの？

私はお礼を言いながら器を受け取り、その場に座り込んだ。ナンをユリアンと半分こして、カレーを食べ始める。

香辛料の良い香りがした。カレーの色は、薄い茶色。

以外と普通だ。

食文化は、私の居た世界と変わらないのかな…？
口に入れる寸前にちよつと躊躇したけれど、空腹には勝てず、私は

ナンにカレーをつけてほおばった。

口いっぱい、カレーの香りが広がる。味は本格的なカレーだ。めちゃくちゃおいしい。あんまり辛いもないけど。

受け取ったジューズは真っ青で、恐々飲んでみると、甘くて酸っぱい、レモネードみたいな味がした。ジャスミンみたいな、花の香りもする。

食べ物がおいしくて、気分が大分良くなる。

食べ終わってから一息ついて、私は聞いた。

「ねえ、ここにいる人たち、みんなベガーズ・バンケットのひとなの？」

ユリアンは首を横に振る。

「いや、屋台やってるのはデリバリーの仕事の人だし、飯のときは勝手に近所の人も買いに来るから、いつもこんな感じで人数多くて騒がしく…」

その話はそこで、知らない人の声に遮られた。

「ユリアン！」

ユリアンと私が声のした方を見ると、さっきの、猫耳にコウモリの翼にサソリの尾の、何の幻獣かよくわからない人が立っていた。

燃えるような赤い髪はちよつと長めで、グシャグシャで、目にかかっている。筋肉質な体に黒いヨレヨレのシャツを、首元をボタン3つくらい開けて着ている。でもそれがだらしないって言うより、ワイルドな感じで、似合ってる。

タバコの煙の匂いと火の匂い、それと不思議な甘い匂いがした。

なんだか色気のある人だ。

一体なんの幻獣だろう…

「紹介しろよ、ユリアン！…こちらの可愛いお嬢さんが、お前に子守歌を聞かせてくれたっていう…噂のブラックウルフちゃんだろ？」

ルーと呼ばれた彼は、そう言うのにこにこ笑って私を見た。

…なんだか人懐っこい…悪く言えば軽い人だな。せつかく大人っぽいと思ったのに。

まあ、憎めない感じだけど。

「子守歌って何だよ！？昨日は、アミヤと話したらそのまま寝ちゃっただけで…」

「照れんなよ、いい大人が。このロリコン！」

「…やんのかコラ」

ルーは何だかすごく嬉しそうににやにやしてユリアンをからかっている。ユリアンは苦々しくルーを睨みつける。

…仲の良ろしいことで。

ルーはユリアンをからかうのをやめると、私の方に向き直った。

「一座の技術士をやってる、マンティコアのルー・アブラハム・ロードだ。よろしくね。今度俺にも、子守歌聴かせてよ」

…この人チャライよ！

「雨宮香子です。よろしく…」

マンティコアかあ。納得。ライオンの体に人面、サソリの毒針があつて、コウモリの翼を持っているという…。インドの怪物だったかな。

…あれ？

そのとき、

『聴かせてくれない？』

この言葉で、私は大変なことを思い出した。

青ざめて動きが止まってしまった私を、ルーは「あれ？怒った？」
と言ってオロオロしてる。ちょっとかわいい。でも今は無視。

「アマミヤ？」

心配顔のユリアンに顔をのぞき込まれた。

その途端、私はすごい勢いでユリアンに詰め寄った。

「ユリアン！」

「な、なに？」

ユリアンはちょっと私の剣幕にひいてるけど、そんなん気にしている場合じゃない！

ヤバイ！

大変だー！

「私のヴァイオリン、知らない!？」

第21話 マジカル・ミステリー・ツアー

「うわぁん！良かった！本当にありがとう！」

なんと、私のヴァイオリンは、ユリアンが持ってくれていた。

私がユリアンに荒野で強制的に狼に変身させられたとき、走り出した私はヴァイオリンをその場に置き去りにしていた。

その後、ヴァンに失神させられた私を車に運び入れているとき、私がおか持っていたことを思い出して、ユリアンはわざわざ取りに行ってくれていたのだという。

ユリアンったら、なんて気が利く、良い奴なのかしら！

ルーが、

「人身売買の商品になる人の持ち物は基本、誰かが取り戻しに来たりすると厄介だからね、探索用の魔法の道具とか、探知機とか、金目の物とか入ってないか、いろいろチェックすることになってるから」

…とか言っていたけど、そんなの聞かなかったことにする。

とにかく良かった！助かった！

本当に危なかった…。

これを無くせば、私はもとの場所に帰れなくなるところだった。

「元の世界に帰るための鍵」

が、ヴァイオリンケースに貼ってあるステッカーであるらしいから。すぐにユリアンの部屋に行き、置いてあったヴァイオリンと感動の再会を果たす。

会いたかったよ！私のヴァイオリンちゃん！

まあ、ずっと忘れてたけどねっ

ヴァイオリンを手に持つと、その確かな重みを感じて、私はちよつと安心した。考えてみれば、元の世界と私とを繋ぐ唯一の物だ。

さつき、ヴァンの部屋に置いてあった鏡で、私はこの世界に来て初めて自分の容姿を見た。

見慣れた自分の顔。

見慣れた黒いブレザー、白いシャツ、赤いリボン、黒と白の、すごく細かい千鳥格子のプリーツスカート、黒いハイソックス、黒い革のローファー。

着慣れた高校の制服だ。

それらは元の世界と何ひとつ変わっていない。

違うのは、髪の毛に混ざって頭から飛び出している三角形の獣の耳。私の本当の耳があったところは、髪の毛の生え際以外、何もなくなっていた。

なんかグロテスク…

口を開けば前より尖った犬歯が見え、太くて長い尻尾が短い制服のスカートから揺れている。

そして、真っ黒で尖っている、手足の爪。

凄まじい違和感だった。

やっぱり頭に狼の耳がついてたよ…痛々しいわ！
色んな意味で！

自分の外見が変わってしまったことで、私は本当にこの世界の住人になってしまったような気がした。

けれど、使い古したヴァイオリンはハルカとの思い出もいっぱい、元居た世界の事を鮮明に思い出させてくれた。

私は大丈夫。

ハルカに会いに、ここに来た。

私は私。どこに行っても、変わらない。

ホッとして、私は心の中で呟いた。

よし！もう絶対手離さないぞ！

ヴァイオリンを持ったままユリアンの部屋のあるトラックを出たところで、ユリアンが聞いてきた。

「ところでアミヤ、それって…ヴァイオリンって、何なの？」

「え？知らないの？これは楽器だよ」

「??？」

ユリアンと、ここまでついて来ていたルーは首を傾げた。ヴァイオリンは、この世界にはないんだろうか。

「じゃあ、何か弾いてみようか」

私はケースからヴァイオリンを取り出して、あごと肩の間にはさみ、弓とヴァイオリンの弦を調節して、弾き慣れた曲「パッヘルベルのカノン」を弾き始めた。

明るい旋律の、有名な曲だ。

いつも私は、目の前に光で溢れた花畑が広がっていくイメージをしながら、この曲を弾いていた。

ヴァイオリンの先生（36才独身オトコ。しかし彼氏がいる）に、「頭の中でイメージした世界を音で作りあげるのよっ」って言われているから、弾くときは昔から、めちゃくちゃ妄想する癖がついてるんだよね。

弾き終わると、ユリアンとルーは目を見張って私を見ていた。

しかもなんかギャラリーが増えてる！！

私、20人くらいに囲まれてる！

うわっ恥ずかしっ…プロのヴァイオリニストの真似して、気取って目をつむって弾いちゃったから…

腕はまだまだな癖にね！

自分でもちよつと寒いです！

すいません調子のりました！

照れ隠しにユリアンの方を向く。

…え

気づけば、ユリアンとルーの頭に、お花が乗っていた。

…大丈夫？

いろんな意味で。

でもさっきまでついてなかったと思うけど…

その時、ギャラリーをかき分けて、ヴァンが近付いてきた。商品になる寸前だった一人だろう、クー・シーの女の子を抱いている。

ペリの男の子ポールと同じ年くらいの可愛い女の子で、クリーム色の肌と髪の毛をして、頭には私の耳と似た、犬の耳がついている。大きな目はきれいな紫色で、角度によつてはすごく淡い水色。目の色素が極端に少ないとそうなることもあるって、テレビで見たことがある。

気付くとヴァンが目の前で、何故か今にも飛びかかってきそうな表情をしていた。

「アママミヤ、何故言わなかった？」

え？なにになに？どうしたの？

私は困惑して首を傾げる。

ヴァンの次の言葉に、私は啞然とした。

「お前が、魔法を使えることを」

ヴァンが言った言葉にあいた口が塞がらない私を、ギャラリーが興味津々といった感じで様子を見ている。

まほう？

魔法って、ユリアンが使ってたあれ？

私にできるわけがないのに…ヴァンは何を言ってるんだろう？

ヴァンは抱いていたクー・シーの女の子を下ろすと、私に詰め寄る。

「なぜこんな、大勢に見られるところで魔法を使ったりしたんだ！」

こ…怖い！

ヴァンの剣幕にちょっと引きながら私は応える。

「うん、あの、ちょっと意味がわかんないんだけど…」

クー・シーの女の子が近づいてきた。その子からは、ほのかにヴァ

ンの香水の移り香と、さつき食べたんだろっ、カレーの匂いと、甘いクチナシの花の香りがした。

彼女はじりじりと私に近づくと、いきなり私の足にしがみついていた。

…やだ！何この子かわいい！

…いや、今はそうじゃなくて！

「お前、自分で今魔法を使ったじゃないか」

ヴァンが睨みを効かせて更に詰め寄ってくる。
近い。近いよ。

しかもめちゃくちゃ顔怖いよお！

この人なんでこんなに怒ってるの！？

「だから、私が魔法なんて使えるわけないじゃん！」

私がそう叫ぶと、広場はしんと静まり返った。

第22話 アマミヤのヴァイオリン

静まり返る広場。

え？何この感じ？

ありえないコイツ… って感じでみんなが見てくるよ？

「アマミヤ… ちょっと、こっちに来て」

ヴァンが周りの視線を気にして私に、近くにあった小さめのテントへ移動するよう促した。

私は頷いてヴァンについて行く。

クー・シーの女の子は、さっきから何故か私から離れようとしない。今は勝手によじ登ってきて、私の背中にしがみついている。

これってなんだか、すごい懷かれてる？

なんで？あ、まさか狼って犬科だから？

私に同類の匂いを感じているのかな？

まあ、小さい子だし、寂しいんだろう。

両親に売られちゃったんだもんね… 信じてた人に裏切られて。特に幼い頃なんて親は世界の中心みたいなもんじゃないか。かわいそうに… 今は心細いに違いない。

私はそう思って、女の子を好きにさせておいた。頼られるのも悪い気はしないしね。

見かけはまだ五歳くらいで、背中に乗られてるけど、小柄で痛々しいくらいガリガリに痩せているせいですごく軽い。

名前を聞くと、耳元で「アレクサンドラ・カプラーノス」と囁かれた。

けれど、あとは何を聞いてもしゃべってくれなかった。

ヴァンに続いて入ったテントの中では、ショーを控えた芸人たちが、ストレッチや技の練習をしていた。

コリアンやヴァンやルーはいろんな人に声をかけられて、挨拶を返している。

中には私を見てギョツとした顔をする人が数人いた。たぶん私が狼だと気づいて、怖がっているのだろう。

そのテントの中はむわっとした熱気が漂っていて、ちょっとだけ汗の匂いがした。

基本インドアで文化系の私には、あまり馴染みのない雰囲気だ。

芸人たちの中には、空中ブランコの練習をしているあのフォーンの双子もいた。

コリアンによると、あの双子は兄のロビンと妹のニコラの男女の兄妹らしい。

けれど、顔も体つきもそっくり過ぎて、どっちがどっちなのか私にはまだよく分からない。

双子は私に気づいて、恐々としながらもチラチラと視線をよこす。

「あいつら、アマミヤを気に入ってるらしいよ」

ユリアンがその様子を見て、私に言った。

「へえ？…何で？」

本当なら嬉しいけど…嘘でしょ？今だってすごく怖がられてるんだけど。

「昨日、車の中でヴァンを怒鳴りつけたらしいね？」

ルーがニヤニヤしながら聞いてきた。

ああ、そんなこともあったような…ヴァンがクレイジーな運転するから、あれは言わずにいらなかったというか。

ユリアンはいたずらっぽい笑みを浮かべて、小さな声で言った。

「ヴァンは厳しいからみんなに怖がられてるんだけど、変なところ適当でさ。車の運転とか、料理とか、掃除とか…でもみんなヴァンが怖いから、怒ったり注意したりできないんだよね。僕はもうヴァンとは長いつきあいだから、突っ込むのもめんどくさくてほっとしてるんだけど…」

「だから、君がヴァンを説教して負かしたのが、二人は相当嬉しかったらしいよ。あのヴァンが、女の子の狼に一喝されただけで黙っちゃったって」

ルーも嬉しそうに笑って言った。

「そっなんだ…」

私もつられてニヤリと笑う。

ふっふっふ。ヴァンめ。

してやったりだわ。

意図してやったわけじゃないけど。

裏方っぽい人に指示を出していたヴァンが振り向き、私達がニヤニヤしながら見ているのに気づくと、眉間に皺をよせて睨んできた。私達はしれっと視線を外す。

ヴァンはため息をつきながら、こちらに戻ってくる。

「アママ、さっきの口振りからすると、お前は自分が魔法を使えることすら、知らないんだな？」

ああ、そういう話だったわけ。
すっかり忘れてた。

「…まずさ、私が、どんなことをしたっていうの？」

腑に落ちない私は言った。

「2人の頭をしてみる」

ヴァンは顎をしゃくってユリアンとルーを示した。

「あたま…」

そういえば、何故かお花がのっていたね…
キモッて思ったけど。

ユリアンの鹿の角に引っかかっている花を手取る。

それは、紛れもなく生花だ。強めの甘く爽やかな香りが漂う白い花……フリージアだ。

ちようど、私がヴァイオリンを弾いていたときにイメージしていた春の花。

「この花がどうかしたの？」

「だから、お前がその花を出したんだよ。さっき楽器を弾いたときに」

「……はい？」

「お前は、魔術師なんだ」

嘘だあ！そんなわけあるかい！

自分で何の意識もしてないのに、そんなこと、できるものなの？

でも、ヴァイオリンを弾くときは、偶然かもしれないけど、実際にフリージアを頭の中で思い浮かべていたんだよな。

……じゃあ、試してみよう。

私は突然手をかざして、言ってみた。

「出てこい、バラ！」

「……………」

…何にも起こらない。

まわりはシーンと静まり返っている。

やだっ…だいぶ恥ずかしい！

「アマミヤ…たぶん、お前の楽器でないと、魔法は作用しないんじゃないか？」

ヴァンにおずおずと指摘される。

「そうか…じゃあ、また何か弾いても良い？」

私はアレクサンドラに背中から降りてもらい、ずっと手に持っていたヴァイオリンを肩にあてる。

練習をしていた芸人たちが、手を休めて私の様子を見守っていた。大勢の視線の中で弾くなんて、発表会みたいでちよつと緊張する。

簡単なのにしとこっ…

弾き出した曲は、ボツケリーニのメヌエット。

この曲、朝ご飯ってイメージなんだよね。

いつも、白いティーローズを飾ったテーブルに座って、焼きたてのパンにバターを塗って食べているロココな貴婦人をイメージしてたんだよね。

ヴァイオリンの先生には、「貧困で意地汚い想像力ね」って罵られてたけど…。

パン出てこないかな〜って思いながら弾く私。けれども、一向に何も起こらない。

さつきは花だったみたいだしなあ…と思い直して、白いティーローズだけを一心に思い浮かべる。

すると、辺りに小さな白いティーローズが、雪のように降り始めた。びっくりして手を止めると、それはパタリと降り止む。

一つ、ちょうど手の上に落ちて来たのを掴む。

小さいけれど、本物の薔薇だ。

上品な甘い香りがする。瑞々しい生花だった。

うわっ

私すげー！！

あれ、でもこれ私じゃなくてヴァイオリンがすごいんじゃない…

目を丸くして私を見ていた人たちは、私の演奏が止まるやいなや、拍手をしてくれた。

「変わった楽器だね！」

「魔法も素敵」

そう口々に褒めてくれる。

誉められ慣れてない私は顔を赤くして、深々とお辞儀をした。ヴァイオリンの先生には、基本罵られてたからね…

アレクサンドラは何も言わないけれど、キラキラした目で見てくる。ずっと沈んでいた彼女が嬉しそうなので、私はちょっと安心した。

ユリアンとルーも笑顔で褒めてくれたが、ヴァンは一人渋い顔をしている。

「これでまた、アマミヤの値段がつり上がった」

苦々しげに言うヴァンに、ルーが首を傾げる。

「別に、良い事じゃない？」

「俺は誘拐を心配してるんだ。あんな目立つ場所で、しかも一座の関係者以外も居るところで魔法を使うなんて」

「あー…」

ヴァンが言うと、ユリアンとルーは納得して頷いた。

「アマミヤ、お前…」

ルーは私が売られることは知っているんだ…とちょっと見当違いなことを考えていた私は、ヴァンの言葉を聞き逃してしまった。

「おい、アマミヤー！」

「…ん？…あ、ごめん聞いてなかった」

「…お前は、とらえどころのない奴だな。さっきは本当に關心したのに…真面目に聞け」

ヴァンは不機嫌そうに言う。

何だか私、ヴァンと話すと怒らせてばかりだ。

ヴァンの説明によると、魔法を使えるのは基本的に人間だけで、ユリアンのように幻獣で魔術師になれるケースは少ないそうだ。

「言ってみれば幻獣はその存在の一部が魔法で出来ているようなもので、だからこそ魔法を使わずに人型や獣型などの多形態をとれると言われている」

うーん…よくわかんないなあ。

「そもそも魔法というのは…」

この後のヴァンの話は長いので省略。

かいつまんで説明すると、この世界では、魔法を使う側が魔法にかかっていると、魔法は発動しないらしい。だから、幻獣は存在自体に魔法が絡んでいるために、幻獣自身は魔法を使うことができないのではないかと考えられている。

まだはつきりとは解明されていないらしい。

おそらくユリアンは、存在が幻獣よりも人間に近いのではないかな。だからおそらく、私も同じような存在なのだろう。

と、ヴァンは言いたいようだ。

だから幻獣で魔法が使えるのは、ものすごく珍しいことらしい。私にはすでに、黒いことと、狼であるという珍しさがあるので、魔

法が使えることも加わって、値段が予測不可能だとヴァンは困惑している。

「参ったな…これでお前がもし国際的な機関に知られでもしたら、保護を名目に、裏社会だけでなく、世界中の表立った立場からも狙われることになるかもしれない」

…すごくオオゴトになってる！

「アマミヤの競売を早めるしかないな…」
ヴァンは心底困った顔で呟いた。

私はちよつと申し訳なくなつて、ヴァンに言った。

「…ごめんなさい」

悪気はなかったんだ…てゆうか、意識もしてなかったんだけどね！
自分が魔法を疲えるなんて思わなかったもん。

私がちよつと頭を下げると、ヴァンは目を細めて眉を寄せ、すごく嫌そうな顔をした。

…何でだよ！悪いと思つてゐるんじゃない！

「お前がそんなことを言う…変なかんじだ」

失礼な！

もしかして私のことキレキャラだと思つてる？
ヴァンと話してるときくらいだからね！私が怒るのって！

普段そこまで短気じゃない…はず。

「悪いと思ったら、謝るものでしょ」

そう言って私は顔を背ける。

…ちょっと子供っぽかったかな。

ヴァンの顔を横目でうかがうと、ヴァンは笑っていた。

…なんか笑われとる！

私は恥ずかしくなって、ユリアンに話しかける。

「そういえばさ、ユリアン、ショーは何時から始まるの？」

「うん…ああ、そうだった！やばい！ルー！お前こんなところに居て良いのか？今11時半だから、始まるまであと30分もないよ」
ああ、と声をあげてルーは走り出した。

「アマミヤ、また後でね」

そう言いながら、ルーはテントを出て行った。

「もうすぐ開演なの！？二人共、ここにいて大丈夫！？」

焦る私に反して、ユリアンもヴァンものんびり構えている。

「ショーは基本的に、1日二回、休憩入れて三時間の公演がある。
演目はその都度変わって、芸人も何人かは交代するんだ。僕は今日

は、夕方の公演にしか出ないよ」

「俺は、シルク・ド・クレールでは、前口上と締めに出るくらいだな」

「そつか…」

ちよつとホツとしたけど、私は不思議に思つて聞いた。

「ヴァン、座長のくせに、暇なの？」
リングマスター

「お前…！」

その結果、ヴァンを本気で怒らせました。

…いや、怒るかなあと思つたけど、つい言っちゃつた。
ヴァンをからかうの、ちよつと楽しいんだもん

でもさすがに言い過ぎたよ…

リングマスターが、暇なわけ無いよね…

私に付き合つてくれるとは思つてたんだけどね。

ユリアンが言うには、山ほどある仕事をおいて、気絶した私の様子を心配して見にきてくれていたらしい。

ヴァンはそれから、目を合わせてもくれませんでした…。

第23話 アマミヤ・イン・ベガーズ・バンケット

ヴァンはちよつと怒りながら、仕事を片付けに行ってしまった。

魔術師だと知られると危険だから、もう人前で魔法は使っな、一人にもなるな、何度もそう言ってから戻って行った。

お母さんがあいつは。

アレクサンドラはまたよじ登ってきて、私の背中に収まる。

…何でこんなに懷かれてるんだろう。

全然重くないから良いけどね。

「アレクサンドラって、年はいくつ？」

聞いてみると、彼女は今度は普通に喋ってくれた。

「アリ！」

「え？」

アリオ？ユリアンに年を聞いた時、数字の考え方は、同じなんだって安心したのに…勘違いだった？やっぱりこの世界の数字は違うのか…？でも言葉も通じるのに…

いろいろなことを考えて無言になった私に、アレクサンドラはちよつと声を張り上げて言った。

「あのね、アレクサンドラじゃなくて、アリって呼んで」

ああ、ニックネームがアリなのか。なんだ。ちょっとドキドキしちゃった。

「わかった。アリ。アリはおいくつ？」

アリは満足そうに頷くと、8才、と言った。

あれ？五歳くらいだと思ったのに。ずいぶん小柄だ。

「アリ、何でアマミヤに負ぶさってるんだよお前は？アマミヤは体調が悪かったんだぞ」

ユリアンは厳しい声色で言う。

けれど、アリはユリアンに舌を出して言った。

「ユリアンなんかどっか行っちゃえ」

「何だと？」

ユリアンはアリの睨みつける。

ユリアン、7才の子にその態度は大人げないよ…

二人の間を割って私は言った。

「ねえ、アリも一座で働くことになったの？」

ユリアンはアリにしかめつらしたまま言う。

「…うん。アリは双子に教育させることになったんだけど…そういうば、アリ、双子に仕事を言いつけられてるんじゃないのか？」

「…」

アリは何も言わない。仕事が嫌なのかな？

「アリ、仕事を任されたの？すごいね」

私は言った。

けれど、アリはやっぱり何も言わない。

「…黙ってたら、誰もあなたの気持ちをわかってくれないよ？」

私はわざと冷たく言ってみた。アリは、ピタッと動きを止める。

「聞かせてくれなきゃみんなわからないんだよ。だから、みんなあなたの考えてることを、聞かせて欲しいんだよ？アリ、仕事がしたくないの？」

私は首を曲げて、背中のアリと視線を合わせて言った。

「…ちょっと首痛い。」

アリは、眉を寄せてしかめつらをする、ぴょんと私の背中から飛び降りて、どこかに走って行ってしまった。

めちやくちゃ足が早くて、追いかける間もなかった。

「行っちゃった…」

「仕事しに行ったんじゃないの。あいつ、聞き分けがなくて困ってるんだ。返事もしないし。…そうだアマミヤ、君の泊まる部屋に案内しようか。」

それで今日は、ゆっくり休むといいよ」

「もうゆっくり寝かせてもらったし、カレーも食べたし、全然大丈夫だって」

「いいや。今日はもうゆっくりしてろよ」

ユリアンは案内するために先に歩き始めた。

私はアリが走っていった方を気にしながら、ユリアンについて行く。

「…ユリアン、私も一座にお世話になるわけだから、何か仕事をさせてもらいたいんだけど…」

私はずっと考えていたことを聞いてみる。

何もせずに、自分が売られるまでのんびりしているわけにはいかないもんね。…売られるまでって何か変だけど。

「ああ、そっか…そうだね。サーカスは人が多いし、やることからいから、そうしてもらったほうが助かるよ。でも、やるとしたら何が良いかな。楽器が弾けるから、ステージに立ってもらっても良いと思うんだけど、ヴァンは嫌がりそうだな」

ユリアンは腕を組んで考えている。

私は気になって言った。

「私、魔法のコントロールができないから、ヴァイオリン弾いたら必ず花が出てきちゃうかもしれないけど…」

ただの花だから害はないと思うけど、ヴァンが人前で魔法は使うつて口を酸っぱくして言ってたし。ヴァイオリン弾いてまた何かやっちゃっても、自分ではわかんないだろう。

…やっぱり、私じゃなくて、ヴァイオリンが魔法に絡んでるんじゃないだろうか。

「ああ、それは大丈夫。サーカスのテントの中は、ショーが始まれば魔法が使えなくなるから」

「そうなの？」

そんなことができるんだ？

「そういう決まりになってるんだ。ショーで魔法が使えたら、何でも有りになるだろう？ そうなったら、お客さんに幻覚を見せるだけのことたりちゃうじゃない」

なるほど、と私は納得する。

魔法があるこの世界でも、サーカスの芸人さんの技は芸人さん自身の体を使ったパフォーマンスなんだ。

やっぱり人の磨き上げられた技を見て興奮する気持ちは、どこの世界でも一緒なんだろうな。

「ユリアンは、どんな芸をするの？」

「僕は、ヴォルパーティンガーの脚力を活かした技を見せるんだ。まあ、簡単なことだと、壁を走ったり、客席の端から端までジャンプしたり、テントを突き抜ける高さにジャンプしてまた戻ってみた

り…とか」

…うん。ちょっと、レベルが違うかな。

この世界、あれだね。あの、想像を絶するね。

私に用意された部屋は、ユリアンの部屋のあるトラックのすぐ近くの、すごく大きなトラックの中にあった。

「このトラックはいちばん新しいから、今はまだ空き部屋があるんだ。隣は双子の部屋だよ。奴らいつも騒がしいから、うるさかったら言って」

私はベッドにヴァイオリンを置いて、部屋を見渡した。来客用って感じの、こざっぱりとして装飾品のほとんどない部屋だ。

やっぱりあまり広くはなくて、白く塗られた鉄製のシングルベッドと、その横に白い小さなナイトテーブルが置いてあって、壁はクロ―ゼットになっている。

壁からベッドから真っ白だ。新しい建物によくある、木の良い匂いがした。

「こんなきれいな部屋を使わせてもらっていいの？」

「うん。競売はいつになるかまだちょっとわからないから…好きなだけ」

「…ありがとうね、ユリアン」

私は改めてユリアンに向き直って言った。ユリアンは困惑して眉を寄せる。

「何、いきなり」

「ユリアンには、お世話になりっぱなしだし。それに、私を助けようとしてくれたじゃない？お礼言えてなかったから」

私を売れば妹を助けられるというのに、ユリアンは私を売らないようにヴァンに言ってくれたんだから。

まあ、私を最初に捕まえたのはユリアンな訳だけど…それでも、私を助けようとしてくれたんだから、ユリアンは私の恩人だ。

「お礼を言われるようなことじゃないよ。僕が君にしたことの方が…」

「ねえ、その話は、もう終わりにしない？」

私はユリアンの話を遮って言った。

「私たちはもう、チーム『金持ちからがっぱり大金せしめてやるぜ！』だよ。お互いに言いたいことは水に流して…」

「何そのチーム名…」

ユリアンはさらに眉根をよせる。

「分かった。もう謝らないよ」

そして、困っているみたいなの、優しい笑顔を浮かべる。

ユリアンは美形だけど、笑うと何だか可愛くって、人なつっこい雰囲気になる。

これでSじゃなきゃ、モテるだろうに…

「ユリアンって彼女いるの？」

私はつい気になって聞いてしまった。

「…」

ユリアンは何故か無言。何とも複雑な表情をしている。

「…気になる？」

かと思えば、そう言ってユリアンは私との距離を一步縮めて、顔を近づけて来た。

ユリアンの匂いが強くなる。

ミントの匂いと、微かな獣の匂い。

何だかこの感じ、女の子の扱いに慣れてそうだな。まあ、イケメンは大抵そうだよな。偏見だけど。

私は真面目な顔で答える。

「…うーん、5人くらい居るんじゃないの？」

「なんだよそれ！」

ユリアンに突っ込みを入れられてしまった。
怒った顔で見てくるけど、私はしれっと笑って見せる。

するとユリアンは拍子抜けしたように、私から目をそらすと、一歩下がってさっきと同じ距離感に戻った。

「アマミヤはどうなんだよ？」

ユリアンに聞かれて、私は一瞬返事に詰まる。
あの子の笑顔が思い浮かんで、胸がひどく痛んだ。

「私…は」

胸が詰まって、ちょっと呼吸が早くなる。
ああもう、こんな軽い話で、こんなに大げさに反応してしまうなんて…。

私は涙が出そうになるのを、懸命にこらえながら答えた。

「…いないよ。彼氏も、好きな人も」

ユリアンは私の反応に驚いて、何かあったの？と聞いてくれた。ユリアンはやっぱり良い奴だ。私だったら、こんな反応されたらちょっと困っちゃうかもしれないから。

ユリアンに感心しつつ、いつもの調子を取り戻す私。

「ごめん、昔のこと思い出して」

「何、痛い失恋でもしたことがあるの？」

その年で？とちよつと馬鹿にしてくる。いや、17才ならそんな話ひとつやふたつあるもんでしょ！

「子供扱いしないでよ」

ユリアンをジロつと睨むと、急によそよそしく視線を外された。

「…うん。ごめんなさい」

ユリアンはあさつての方向を見ながら素直に謝ってきた。

…勝った。

私の睨みの迫力に屈したようね。

私たちがそのまま話をしていると、そのうちに、トラックの外から、ユリアンと呼ぶ声がした。部屋の窓を開けてユリアンが応えようと、双子が窓の下まで駆け寄って来た。

「ユリアン、アリが居なくなつた！」

「何だつて」

双子は焦っていて、早口で交互に話した。

「アリが見つからないんだ」

「とりあえず僕ら、アリにみんなの衣装の洗濯を頼んでただけど

…」

「洗濯室に行ってもアリが居なくて、誰に聞いても、みんな見てないって言うんだ」

「探しに行きたいけど、もうすぐ開演で…僕らは行けないんだよ」

「分かった。僕に任せて、お前らちゃんと演技に集中しろよ」

「…うん、ユリアン、お願いね」

双子はそう言うと、私にちょっと会釈をして、ステージのある巨大なテントに走って行った。

ああ、やっぱり恐れられてる。怖い先輩みたいな扱いになってる…

いや、今重要なのはそこじゃない。全然そこじゃない。

ア리가いなくなったって？

「アリ…自分から居なくなったのかな？」

心配だ。まさかさっき走り去ってから、居なくなったのかな。

「たぶん…。もしかしてあいつ、家に帰ろうとしてるのかも」

ユリアンは深刻な表情を浮かべる。

「アリの家って…？」

「飛行用の車でも3時間はかかるよ。歩いてなんて絶対に帰れない場所だ。それにアリは、遊ぶ金欲しさで父親に売られたんだ。…戻ったところでまた同じことの繰り返しだよ」

「…」

内心、飛行用の車って何？って聞きたいけど、またこのタイミングではちよつと聞きにくいのでとりあえず放置。

アリ…さつき、もっとちゃんと話を聞かせてもらっただった。

あの子は何を考えていたんだろう。
大きな、きれいな紫の瞳の奥で。

クチナシの甘い香りのする、可愛い女の子…

クチナシの香り…？

はた、と私は気づいて、思いついたことをそのまま口に出していた。

「ユリアン、私…匂いでどこにいるのか分かるかも」

24話 スメルズ・ライク・ガーデニア

「匂いを辿れば、あの子を見つけられるかも」

そう言って私は、クチナシの残り香を探し始めた。

鼻に意識を集中させると、さっきまで感じなかった、様々な匂いに気付いた。普段意識していなかっただけで、狼の嗅覚はいつもほんのかすかな匂いまで感じていたらしい。

「アママ、獣の姿になれば、今よりさらに嗅覚も上がるはず……ってことも知らないの？」

「そうなんだ！知らなかった！」

私はユリアンの言葉をうけて、すぐさま狼になる。

何故かもう、狼に変身する方法というか、感覚というのか……そういうものが私には分かっている、瞬時に獣の姿をとることができた。

狼になった瞬間、様々な匂いの洪水に襲われて、一瞬意識が朦朧とする。

意識するのとしなのとは、感じ方にものすごく違いが出てしまっている。

クチナシの匂いを追いかけて私はバスを出て移動する。ユリアンも変身して、後から追いかけて来た。

匂いは一直線に、一座のテントのある広場から、大きな道路を挟んだ向こう側の、ビルが建ち並ぶ都市の中に続いていた。

ビル??

それは元居た世界のように、発達した都会で、私はあっけにとられてしまった。

初めて降り立ったのが荒野だったからか、こんな街並みがあるとは想像していなかったのだ。

遠くに、一際大きな、全てがガラスでできたクリスタルの卵のような形のビルがあり、それを除けば、元居た世界の雰囲気とほとんど変わらないように見えた。

「こっちに行っちゃったのか…」

人型にもどったユリアンが、困り顔で呟いた。

この都市の反対側の場所は逆に豊かな森林が広がっているらしい。まだ森の中なら追いかけ易かったのに、とユリアンはつぶやく。都市からは、一座のトラックと同じような、塩素みたいな匂いがした。それと、食べ物の腐ったような匂い、古い油の匂い…その他、様々な臭気が漂っている。人口の多い街なのだろう。

アリのクチナシの甘い香りは、それらの匂いに紛れ込み、判別し辛い。けれど、全く感じられない訳じゃなかった。

会話をするために、私も人の姿に戻る。

「ユリアン…この街、治安悪かったりする？」

私が聞くと、ユリアンは頷いた。

「今見えてるこの街は、マグニフィセント・セブン。サンディニスタのビジネス街だ。けどちょっと裏に入ると花街があつて、その辺りはマフィアやなんかが幅を利かせてる地域になる」

「そんな所…アリみたいな小さな子が一人で居たら、危険だよね！？」

「うん…アリの匂いは？分かる？」

「ちょっと分かりにくくなってるけど、大丈夫だと思う」

「まだそんなに遠くへは行つてないと思うけど…参ったな。人を呼んでみんなで探そう。この街はちよつとヤバいんだ」

「ヤバい？」

「ノラ犬が多くて、たまに処分をする為に捕まえたりしてるんだ。犬科の幻獣が、獣の姿になったままでうろついていて捕まったらって話も聞く」

「それって…下手したら殺されちゃうってこと！？」

「いや、そこまではいかないと思う。幻獣か本当の獣かは分かるようになってるはずだから。ただ、保護されて、一座には戻れないだろうね」

「もう会えなくなるってこと?」

「そうだな」

「そんなの…駄目だわ」

私はまたすぐに獣の姿になると、匂いを辿って走り出した。ユリアンが背後で叫んでいる。

「アマミヤ! 獣の姿は危険だって…」

みるみるうちに私は遠ざかり、その先はもう聞こえなかった。

危険かもしれないけど、獣の姿が一番早く動けるのだ。アリを早く見つけたい一心で、私は狼のまま走り続けた。

通りを進んでいる車のボンネットに飛び乗り、隣の車のボンネットへと飛び移って進みながら、私は街に入った。

匂いを追いかけて走り抜けながら、私は通りの様子を観察した。

近代的なビルが立ち並び、レストランやカフェがところどころに点在している。その光景は、私の元居た世界にそっくりだった。

コンビニのような店まである。

電球のない街灯とか、たまに意味不明なものがあるけど…

けれど、街の様子は元居た世界と似ていても、やっぱり道行くのは異形な、幻獣の姿の人ばかりだ。

恰幅がよく、スーツを着てどう見ても普通のサラリーマンなおじさ

んは、頭からまっすぐな角が一本伸びている。

ユニコーン…とか、かな？

…いや、これは予想が外れて欲しい。ユニコーンと言ったら、もうちよつとかっこいいイメージだもん…

颯爽とした白いパンツスーツで歩く美人なOLさんは、頭の横に耳ではなく、小さな白い翼がはえている。

ああ、これは素敵だ。似合ってるし。

この人は、天使かな？

イタリアの天使像で、こんな風貌のものを見たことがあった。

何なんだろう。この世界。

改めて不思議に思う。

会うつのは幻獣ばかりで、人間をまだ見たことがない気がする。

…まあ、元人間の自分は置いといてだけど。

そんなことを考えながら道行く人たちの脇を走ると私はすり抜け、猛スピードで突っ走っていた。

突然、悲鳴が聞こえた。

すぐ後ろの方で聞こえたので、驚いた私はスピードを緩めて振り返った。

悲鳴をあげたのは、さっきの天使っぽいOLさんだ。

どうしたんだろう？と様子をうかがうと、彼女は、私を指差して言った。

「お…狼よ！！」

その声に、道行く人々が一斉に振り返る。

ちよっ…え？

私？

道を行く人波に、どよめきが起こる。

「警察を呼んで！」

「逃げろ！変わった色だが、あれは狼だぞ！」

あああ、ヤバい！！！！

人々は散り散りになって逃げ惑い、私から離れて行く。

狼の扱いが猛獣級だったこと、すっかり忘れてた！

私はとっさに、目についたビルとビルの間路地裏に飛び込んだ。

これは、隠れながらアリを追いかけるしかないみたいだ。

けれど、不意に気配を感じて後ろを振り返ると、背後から誰かが追いかけて来ていた。

それは体格のがっしりした男性で、警察官の帽子に似たものをかぶっている。

真っ黒なスーツの上に真っ黒なコートを着て、コートの上から金色の金具のベルトをつけて、真っ黒なごついブーツを履いている。そしてその背中には、大きなコウモリの羽がついていた。

「その狼、止まりなさい！」

私を追いかけてながら青年は命令口調で声をかけてくる。

まさか警察？

…来るの早すぎでしょ！！

てゆうか何で追いかけてくんの！？
私何にも悪いことしてないじゃん！

私は焦って、さらに足を早める。
アリの匂いを懸命に探す、集中できず、不確かな方向に進んでしまふ。

なんなんだあいつは。コウモリの羽があるから、ルーと同じマントイコアかな？

気になってちらりと振り返ると、その背後の光景に、一瞬思考が停止した。

そこには青年の姿はなく、私の二倍はある、ドラゴンがいた。

そんなの反則だよ!!!

頭の中で意味不明な突っ込みをしながら、私はがむしやりに走った。路地裏や大通りを、周りを気にする余裕もなく通り抜け、車やポストや、人まで飛び越えて、なりふり構わず私は逃げた。

何が何でも捕まりたくない!

ドラゴンとか怖すぎだもの!

警察官らしきドラゴンはそれでもしつこく追いかけてくる。

深緑色のウロコに覆われた肌は爬虫類のようで、イラストや絵画なんかで見るドラゴンそのままの姿だけど、ちょっとだけ私のイメージよりもほっそりとした体で、羽ばかり大きく見える。

羽…

羽があるってことは、コイツ飛ぶんじゃね？

そう考えた瞬間、案の定、ドラゴンは羽を羽ばたかせ始めた。

いやあああああ！

飛ぶ気満々じゃん！

もう無理！

絶対無理！

私終わりだ！！

涙目になりながら、私は必死で打開策を考える。

このままじゃあ捕まるのも時間の問題だ。羽のあるものに勝てるわけない。

『逃げてても逃げてても追ってくるなら、どうするっ。』

『…それなら、立ち向かうしかない』

私は突然立ち止まり、ドラゴンの方に向き直った。

かかってこいやあ！

とばかりにドラゴンを待ち構える。

ドラゴンは私の行動が予想外だったのかちょっと躊躇したが、走っていた勢いのまま、私に飛びかかって来た。

私はその場に立ち尽くし、ドラゴンをまばたきもせずじっと睨みつけて、それを待った。

我ながら馬鹿だと思う。

いくらいま狼の姿をしているとはいえ、体格から言って、どうしたって私が不利。

だって…ハルカの言葉を思い出してしまったんだもの。

逃げても意味のないものが追ってくるなら、闘うしか選択肢はない。

あの子はずっとそうやって、自分の病と闘っていたから。

こんなときにそれを思い出すのも、どうかと思うけど。

何をされるか分からないんだから、ひとまずぶつかってみようと思っ
てしまったんだ。

ドラゴンの大きな腕が、私の喉元を狙って振り下ろされる。とっさ
に私はその腕に噛みついてやろうとして構えた。

その時、強い風が吹いた。いきなりのことだ驚いて、目を閉じてし
まう。

突然、体が浮き上がる感覚がして、気づけば私の体は、何者かに抱
え上げられていた。

ドラゴンに捕まったのだ、と思った私は、ジタバタと激しく暴れて
抵抗する。

ふと、すぐそばでクチナシの香りがした。

さっき必死で追いかけていた香り。

ハッとして顔をあげると、すぐ横に、アリの顔があった。

第25話 アマミヤと泥棒、その友人とアリ

アリは不安げに私を見ている。

私は話をするため、人型に戻った。

「アリ！？良かった。心配したんだよ」

私はほっとしてそう言った。

アリも安心したのか、笑顔を返してくれる。

「笑ってる場合じゃねーぞ！」

いきなり、頭の上から何者かに激しく突っ込まれた。

見上げると、金髪の青年がこちらを見ている。

その人からは、陽向の香りと、アーモンドチョコレートみたいな香りがした。

「ん？？」

私は改めて自分の現状を確認する。

お腹だけを青年の左腕に抱えられていて、振動が激しくて怖い。
しかもこの体勢、意外と腹筋使って支えてないと保てないから、お
腹超痛い。

…って！

誰よこの金髪！？
そして何この体勢！？

金髪青年は、右側にはアリ、左側には私を小脇に抱えて、軽々とフェイス街を駆け抜けて行く。

振り向くと、ドラゴンは未だに諦めもせず追いかけて来ていた。
ときおりぞっとするような咆哮をあげている。

そんな恐ろしげなドラゴンを引き連れた私達が通り過ぎるたびに、
人型の幻獣OJさんや幻獣サラリーマンが目を丸くしてこちらを振り返り、驚いて声をあげている。

めっちゃ注目浴びてる…この体勢といい、すごく恥ずかしいっ

どうも、私がドラゴンに襲われそうになっていた所を、この青年が助けてくれたようだ。

しかし何故アリと一緒になんだろう。探す手間が省けたけど。

この人、いったい何者？

私は怪しみながら金髪青年を見上げる。

その顔には、何の表情も浮かんでいない。

そのときあることに気づいて、私は息をのんで彼の目を見つめた。

その双眸は、漆黒。

私が普段見慣れているはずのそれは、この世界では、とても珍しいもの。

この世界に来てから自分以外に、髪でも瞳でも、体のどこかが黒い人に会うのは初めてだった。

金髪青年は私の視線に気づくと、目を細める。

「…あんたさ、自分で歩いてくれる？」

そう言うと彼は、私の体をポイツと進行方向に放り投げた。

はいいいい！？

私は慌てて瞬時にまた狼に変身し、受け身を取って、スライディングしながら着地した。

セ、セーフ！

怖！信じられない！

何てことすんの！？

金髪青年は非難がましく睨みつける私を気にもとめず、知らん顔で脇をすり抜けていく。

私は体勢を整えて、すぐに金髪青年を追いかけた。

私は青年の隣を走りながら抗議の唸り声をあげる。

「今はとにかく、ドラゴンの奴をまくのが先だ」

金髪青年はうつとおしいと言いたげに、私をちらりと横目で見るだけで、目も合わせずに言った。

しかしとにかく無表情で、何を考えているのかよくわからない。

考えてみると…この世界の人って、私に対して酷くない？

初対面で首絞められたり失神させられたり投げられたり…

暴力はんたい！

そんなことを頭のなかで考えていたら、金髪青年が突然声を落として言った。

「次の十字路で、二手に別れる。お前は左に行け。俺は右に行く。

角を曲がったらお前のふりをした俺の仲間がいるから、隠れ家に飛び込んでそいつと入れ替われ。ドラゴンとは絶対お前の方を追って行くから、急げよ」

「え？でも、そんな…」

私は戸惑って言いよどむ。

他人を危険に晒すわけにはいかない。

しかし、私のふりをした仲間ってどういう意味だろう…変装ってことかな？

「今は言うとおりにしろ。そいつは絶対ドラゴンには捕まらないから、その方が楽に逃げられる」

私がさらに抗議しようと口を開けば、金髪青年は、口答えするな、

と鋭い目で睨みつけてきた。

何でこの人は、ここまでしてくるんだろう？

そう思いながら私はしぶしぶ頷いた。

夢中で走っていると、広い十字路が見えてくる。

私は青年に言われたとおり、スピードを落とさないまま左に曲がった。

ちらりと背後をうかがうと、ドラゴンの姿は角の建物の壁が死角になっ
て一瞬見えなくなる。

すぐに前に向き直った私は、そこで、「私」と出会った。

目の前に立っていたのは、黒いロングヘア、とがった獣の耳、黒い
しっぽ、見慣れた高校の制服を着た少女。

私を見てにこりと笑う、その顔は、その姿は、私と寸分違わない。

…え？

呆然とする私はいきなりその「私」に、建物の地下へと続く階段に
突き落とされた。

ぎゃあああ！

ポフッ

いきなりのことで受け身もとれず、一瞬死ぬかと思ったけれど、私
は何かの上に落ちて無傷。

見上げると狼の姿に変身した「私」が走り去るところが見えた。そ
れを追うドラゴンは、階段の下の私に気づくことなく通り過ぎる。

私はいつの間にか人型に戻っていて、心臓を痛いほどバクバクさせ、
荒い呼吸をしながら呟いた。

「今の…なん、だったの…？」

すると、背後から返事が返って来る。

「今のは、あなたの姿をしたジン。あらかじめあなたの姿を見て、
トレースしていたのよ」

私は驚いて咄嗟に振り返った。

「びつくりした？」

すぐそばに、目を見るほど美しい女性がいた。

ラズベリーのようないやい香りと、ロータスのような上品な香りに、頭がクラクラした。

その女性は、苺のような鮮やかな発色の赤いウェーブがかったロングヘアで、額には真つ赤な宝石が埋め込まれ、背中にはドラゴンと同じように、大きなコウモリの羽がある。

その顔の造形は、大きな緑色の目に、整った鼻梁、ふっくらとした愛らしいピンクの口元。

…なんて美しい人だろう。

笑うと少しアヒル口で、それは完璧過ぎない愛嬌があった。

そして何故か彼女の白いしなやかな手は、私を背中から抱きしめている。

「あの、…離してもらって良いですか？」

こんな美人に抱きしめられてるなんて、何か緊張しちゃう。

彼女はニヤリと笑って言った。

「あら、私が抱き止めなかったら、あなた潰れたトマトになっていたのよ」

ひい！トマトって、潰れたトマトってあなた！

やめてそんな恐ろしいことそんな美しい顔で言わないで！

でも、私はとりあえず納得した。
突き落とされたとき、この美女にうまいことキャッチしてもらったんだ。

…よく考えたら、彼女は命の恩人じゃないか。そんなふうに身を挺して助けてくれた人に対して…私ったら態度悪！

「わあ！ごめんなさい！助けてくれてありがとうございます！あの…怪我とか、ないですか？」
私は慌てて謝った。

「私は大丈夫。それよりも、あなたジンを見たのよ？驚かないの？」

美女は不思議そうな顔をして言った。

…ジン？何だろう？人の名前？

「ジンって、誰ですか？」

私が首を傾げて聞きかえすと、美女は絶句した。

私があまりに常識知らずだと、驚いていたヴァンの顔を思い出した。

私はいったい何度、この世界の人を絶句させてしまっただろう…

「…なるほど。あなたったら、一筋縄ではいかないのね」

「え？」

どういうこと？

私が意味を聞こうとした瞬間、美女の背後から声がした。

「コートニー、トキは？」

コートニーと呼ばれた美女は振り返る。

私もつられてそちらを見る。そこには羽も角もない、何の変哲もない青年の姿があった。ヴァンと同じ年くらいに見える。緑がかつたグレーの髪、グレーの瞳。変わった髪の色だ。染めているのかな。幻獣には染料が効かないとヴァンがいつていたから…彼は人間？

「まだよ。でも、さっきラナーが行ったから、すぐに…」

コートニーが言い終わらないうちに、階段の上に、アリを抱えた先ほどの金髪青年が姿を表した。険しい表情で階段を駆け下りる。

…そういえば、この金髪青年も羽や角や変わった部分はないな。

彼は不思議と全く息が上がっておらず、汗の一つもかいていなかった。

…アリはちよつとぐったりしているのに。大丈夫かしらあの子ったら！

「トキ！お疲れ様。首尾はどう？」

コートニーが声をかける。

「最悪だ」

トキと呼ばれた金髪青年は不機嫌そうに声をあげる。

「あのドラゴン、応援呼びやがった。しかも『幻覚』が通用しない部隊だ。さすがにラナー1人じゃ無理だな」

そこで言葉を切って、トキはアリを床に下ろす。その手つきは思いやりに溢れていて、さっき私をぶん投げた乱暴な人とは思えないほどだ。

アリは床に降り立つと、少しフラフラしながらも私に駆け寄り、抱きついてきた。

私もアリを抱きしめ返して、背中をポンポンと軽く叩く。

…アリは、ちょっと元気がない。大丈夫かなあ。

トキは横目でアリの様子を伺いながら、話を続けた。

「狼一人に大層な対応だよ全く。…たぶん、保護を名目に黒い狼を捕まえる気なんだろう。この場所は怪しまれる。すぐに移動するぞ」

「ここ以外で…どこに？」

コートニーは首を傾げる。

「サーカスが一番安全だ」

トキは吐き捨てるように言った。

コートニーは表情を曇らせる。

「トキ、それじゃ何のために…」

「他にあそこ以上に良い場所があるなら教えてほしいね」

「それは…そうだけど」

「それに…たぶんこの狼、俺と同じ場所から来ている。ヴァイオリンはこちらの世界にはない楽器だからな」

「まあ！本当に？トキのお仲間なの？」

打って変わって、コートニーは顔をほころばせた。

私の頭の中は疑問でいっぱいだった。

まず、2人の会話の意味がよく分からないこと、トキは何故私がヴァイオリンを持っていることを知っているのか、そして、わたしがトキの「お仲間」？

それってまさか、もしかして…

私は思わず呟いた。

「トキも、違う世界から来たの？」

トキは初めて私と目を合わせると、無表情のまま頷いた。

「…そうだ。俺は3年前にこの世界、『コール』にやってきた。俺は人間だ。この世界に来てからは、魔法なんてもんが使えるようになったけれど。アミヤ…アミヤなんて名前なら、お前も日本人なんだろう？」

ということとは、この人も日本から来たのか…私と同じ境遇だ。けれど、私のように幻獣になったりはしなかったのか。

私は驚いた。本当なら、すごく安心して、嬉しくなれると思う。

けれど、この人…なんだか引つかかる。

「…どうして私の名前を知っているの？」

私は聞いた。トキは眉根を寄せた。

「…何故その質問なんだ？他に知りたいことがあるだろ」

「あなたが信用できないから」

私は即答する。

その場に緊張が走った。

トキ以外の二人は、私から少し距離を取り、私を警戒し始める。

そんな二人とは逆に、トキは、ただ首を傾げて言った。

「…何故だ？お前を助けたのは、他ならぬ俺だっていうのに」

「…だってあなたは、サーカスが嫌いみたいじゃない」

私は言った。

トキの顔を眺めていると、突然思い出した。

「…あなた、私がヴァイオリンを弾いていたとき、そこに居た？テントの中で」

「…バレたか。変装したのになあ」

トキは別段気にする風もなくそう言った。

私がテントでヴァイオリンを披露して、バラを降らせたとき、この青年の顔を私は見ているのだ。

私に「変わった楽器だね」と言っていたのは、金髪に薄い緑の瞳の青年だった。…けど、間違いなくこの顔だ。
整った顔で、美青年と言えなくもないけど、とにかく無表情だと思
った覚えがある。

「一度だけ見たその他大勢の俺をよく覚えていられたな」

トキは首を傾げる。

「あなたみたいな仏頂面の人、そうそういないもん」

私はつい本音をこぼしてしまった。

その途端、トキはピタリと固まる。

やべっ

「お前、俺にケンカ売ってんのか…」

「売ってません！ドラゴンから助けてもらっちゃって感謝感激雨霰
です！」

オーバーに感謝する私を、トキは胡散臭そうに見ている。私は話を
変えようと焦って言った。

「でも何で助けてくれたの？あと、なんでアリと一緒にだったの？」

トキは、腕を組んで言った。

「俺たちは、盗賊だ。お前らを捕まえて売り飛ばすつもりだったのさ。サーカスは、まあ、ライバル会社みたいなものかな」

…何でみんなして、人を売り飛ばしたがるのかしら！

第26話 ドナドナ・アマミヤ

「売るためにアリを捕まえたわけ？」

私はトキを睨みつけて言った。

アリは一度ヴァン達に売られている。自分が奴隷のように売り買いされてしまうなんて、きつと恐ろしい体験だったことだろう。また同じような体験させようなんて…まだ小さいのに、トラウマになったらどうしてくれる！

たぶん恐ろしい形相でトキを睨みつけていた私は、アリの声で我にかえった。

「アマミヤ、大丈夫だよ！この人、アリを助けてくれたんだから」

「え？」

私はポカンとして、アリとトキを交互に見た。

「…その子がマフィアにさらわれそうになっていて、トキがそれを止めたのよ。売る為って言ったのは…トキの照れ隠し」

そう言ったのはコートニーだ。

トキを見ると、力いっぱい目をそらされた。

…何この子、照れ屋？

「あの人ね、すごいんだよ！強いのに！」

アリはキラキラした満面の笑みを浮かべて言う。

「そうなの？」

アリの話を聞きながらちらりとトキに目をやると、私はそこで見た光景に驚いて絶句してしまった。

トキは優しくに微笑んでアリを見ていたのだ。

会った時からずっと仏頂面で、トキが笑うなんて想像もできなかったけれど、その表情は思いのほか柔らかかった。

アリには笑顔を見せるんだ。

え…トキって、ロリコン？

「…お前、今度はビルの屋上から下にぶん投げてやるつか」

トキが地を這うような低い声で私に言った。

やだ…思っただけのつもりが、言っちゃってた

ぎゃあああ！

あの人怖！なんかもう寿命が縮みそうなくらい恐ろしい形相で睨んでくるよ！

この…鬼！

「…死にたいんだな？」

また口に出してたあああ！

私の馬鹿！

すいませんほんとすいません！

その時、ずっと沈黙していた灰緑色の髪の青年が口を開いた。
今気づいたけど、彼からは微かに潮の…海の匂いがした。

「トキ、その狼をむざむざサーカスに返すつもりなんですか？…仲間にするんでしょう？」

苛立ちを抑えているような声色で彼は話している。

トキは眉をひそめてその青年を見た。

コートニーが咎めるような声をあげる。

「ラス！」

「だって、もう言ってしまった方が手っ取り早いでしょう？もう既に彼女に警戒されてしまっているんだから、さっさと正直に説明した方が良くないですか。…僕達の目的を」

「…目的？」

私は首を傾げた。

トキはうつむいてため息をついたけれど、顔を上げると私を真っ直ぐに見つめて言った。

「お前を、俺たちの仲間にほしいんだ」

率直な言葉に、何だか胸がドキツとした。
…いやいやいや。私は聞き返す。

「…私を仲間に？どうして？」

「探してたんだよ、お前を…黒い狼を。それが俺と同じ境遇の者だ
つてことは、予想外だったが。黒い狼がいれば、俺の『条件』は満
たされるんだ」

「条件？何の話？」

私は眉をひそめて腕を組んだ。トキの話が全く見えない。

「『透明な子どもたち（トランスペアレンシー）』に聞いてないのか？…お前もこの世界には目的があつて来たんだろ？俺も俺の目的の為に来た。その目的を果たす為に、何か守らなきゃならないことがあると言われなかったか？」

「…ああ」

なんとなく分かった気がして、思わず私は声をあげた。

『トランスペアレンシー』が、あの白い男の子のことだとしたら。

この人も私が会ったあの男の子に連れて来られたとしたら。

だとしたら条件ってあれか、白い少年に言われた、「何があっても君は君であることを誓いなさい」ってやつ。

私は一応あの言葉通りに動いていたつもりだけど、それってハルカに会うために果たさなきゃいけない『条件』だったの？

そんなの聞いてないよ！

そもそも、私の行動って、その『条件』にあつてたのかな…？
考えていたら、急に不安に襲われた。

もし私が『条件』の解釈を間違えていたら、ハルカに会えないかもしれない？

黙り込んだ私を、納得したと思ったのか、トキは言った。

「俺の条件は意味は分らないが、『黒い狼と白い狼を仲間にする
こと』だったんだ。白い狼ならすぐに見つかったが、黒い狼なんて
見つからなかったから、困ってたんだよ。アマミヤ、俺と来てくれ」

そう言つて、トキは手をさしのべてきた。その表情は、心なしか和
らいで見えた。

トキの『条件』は私のと比べてすごく具体的だ。

黒い狼はヴァンに言わせると「生態系を揺るがすくらい」珍しいみ
たいだから、見つけるのはすごく大変なんだろう。

まあ黒い狼なら私じゃなくてもいいんだろうけど、困っているみた
いだし、同じようにこの世界にやって来て、それも私よりずっと長
くいる人に話を聞いてみたいとも思う。でも…

「あなた、サーカスが…ベガーズ・バンケットのみんなが嫌いな
の？」

私が言つと、トキはあいまいに首を振る。

「嫌いつてわけじゃない。…相容れないだけさ」

私は心を決めて、口を開いた。

「…そう。私ね、この世界には昨日来たばかりなんだ。だけど、ベガーズ・バンケットの人たちが助けてくれた」

私は一呼吸置いて言った。

「だから、私の仲間は、ベガーズ・バンケットの人たち」

ユリアンやヴァン、お世話になったベガーズ・バンケットのみんなに話してもせずに、ここでこの人たちの仲間になるなんて言ってしまうわけにはいかない。

けど、困ってる人のお願いをむげに断るのも人としてどうかと思うし…てゆうかこの人私やアリを助けてくれたんだった！

信用できないとまで言っちゃったけど…アリに優しい様子を見ると、悪い人には思えなくなった。

慌ててフォローする。

「でもあの、私も話を聞かせてほしいし、何かできることがあるなら、喜んで協力するし…」

「お前が…」

トキは私の言葉を遮って口を開いた。

低く感情を抑えた声にハツとしてそちらを見れば、彼は冷めた瞳で

私を見ていた。

「お前がどう思っ­ていようが関係ない。仲間になるかならないかを決める権利は、お前には無い」

「…俺が決める」

そうトキが言っ­たたん、ラスが私に飛び交っ­て来た。

私はそれを避けようとしたが、アリがそばに­いることを思いだして、とっさにアリを私の背後に突き飛ばした。

私は背後のアリに叫ぶ。

「逃げなさい！」

力加減がわかんなくて結構力んじやっ­た…怪我してなきゃいいけど。

ラスはその隙に、意気揚々と私を押さえつけて馬乗りになっ­た。

…なんかめちゃくちゃ楽しそう…S同士っ­てことで、ユリアンと気が合っ­つんじゃないかしら。

っ­て冷静に傍観して­る場合じゃないから私！

現在進行形で襲わ­れてんじやんよ！！

もう何度目！？

全力で自分に突っ込みを入れていた私だったけど、次のトキの言葉に驚愕した。

「ラス、そいつそのまま縛って袋にでも詰め込んじゃえ。外から見えないようにな」

マジで！？

勘弁して下さい！

この人本当に鬼だよ！

ラスはひよろい体のどこにこんな力があるのか不思議なほどの馬鹿力で、必死の抵抗も虚しく、私は強制的に足を縛られ、腕を後ろ手に縛られてしまった。

これ意外と苦しいんですけど！

そう言おうとしたら、口にグルグルと布を巻かれてしまう。目にも布が巻かれて、もうまさに手も足もでなくなってしまった。

頼りは五感だけだ。私は周りの音や匂いに神経を集中させる。

「無駄話に時間を食い過ぎた。すぐにサーカスに移動だ。変装して時間はないから、全員に『幻覚』をかけるぞ」

トキがイライラした声でそう言うと、ラスが困惑しているような声で言った。

「幻覚？サーカスのテント内では、魔法が使えないじゃないですか」

「俺たちはテントまで入らなくても良いだろ。『目』をつけられた狼を、トラッカー・ドラゴンたちから逃がすだけなんだから。狼に

は『幻覚』はかけないで、ラナーが抱えてテントの中にかくまえばいい。行くぞ！」

トキのそのかけ声と同時に、私には何か大きな布が被せられて、誰かに抱えあげられた。

うわぁっ

人を物みたいに…

私は苦痛に喘いだ。

口に強めに巻かれた布で息苦しく、縛られた手足は既にひどく痛む。このまま、私はどうなるんだろう？

サーカスに行くって言ってるけど、まさか送っていつてくれるわけではないだろう。

もう嫌…

私は抵抗することも諦めてガックリと頭を垂れる。

すると、すぐ近くでアーモンドチョコレートのような匂いがあることに気付いた。私を担いでいるのはまたしてもトキのようだ。

アリは大丈夫かな…？あんな一瞬の間ではあったけれど、背後にいたアリの匂いが遠ざかって行くのを、私は感じていた。

それに、走りながらコートニーが「クー・シーを逃がしてしまったわ」とトキに耳打ちしていたのを聞いている。

アリは無事逃げおおせたのだ。

「…良かった」

私は安心してため息をついた。

しかし、アリは何故街に入ったのだろうか？

一座から逃げようとしていたとは、私には思えなかった。

トキの肩に担がれて揺られながら、私は考え込んだ。

第27話 TEENAGE CASUALTIES

トキ達に連れて行かれて数分。縛られて担がれて、無理な体勢に疲れてしまった私はぐったりして身動きもしなかった。

…もういや。こんなの…

この世界に来て初めて私は、元の世界に戻りたいと思った。
こちらに来てから、酷い目にあつてばかりいる気がする。

ユリアンには首を絞められ、ヴァンには殴られ…

私はこの世界に歓迎されてないんじゃないかとさえ思えてきた。

…いやいやいや！

そう考えたけれど、すぐに首を振って頭を切り替える。

ユリアンもヴァンも、もう仲間じゃないか。

初対面が最悪だったってだけで。

だから大丈夫。この世界に敵しかいないって訳じゃない。

何があっても私は、ハルカに会うまで諦めない。

私の大切な男の子。

耳がちょっととんがった、優しい男の子。

ハルカに会って、言いたいことがあるから…聞きたいことがあるから。

絶対、ハルカにもう一度会うんだ！

私は朦朧としていた意識を奮い起こして、逃げることを考え始めた。

目も口も布を巻かれ、手足は縛られその上全身布を巻かれて、全く自由のきかないこの現状。

…絶望的。

試しに狼の姿に変化しようとしてみる。けれど、何かに阻まれているようで、変化できなかった。

縛られた手足に力を込めてみたけれど、紐はびくともしない。

今の私は、自分が思った以上に怪力なんだと思う。

昨日、革のベルトを引きちぎって起き上がるっていう怪力を発揮した私なのに、何故、紐や布くらいで身動きがとれなくなってしまったんだろう？

革のベルトの方が丈夫に決まってるのに…

狼は怪力で凶暴…ってユリアンもヴァンも言っていたし、ユリアンは魔法を使わないと私を捕まえていられえないと言っていた。

これはやっぱり、魔法？

狼になれないことからしても、そうなんじゃないかな…

もし今魔法で私の体の自由を奪っているのなら、トキ達は魔法を使わないと私を押さえていられないのかもしれない。

だったら、トキが魔法を解いた瞬間が、チャンスなんじゃないかな？

この世界の「魔法」がまだよく理解できていないけど、ユリアンが魔法の道具を使ってきたときや、私がヴァイオリンを弾いた時の魔法は、永遠に続くようなものではなかった。

魔法というものに、作用する制限時間が決まっているとしたら、解ける瞬間が必ずくるはずだ。

だから、私を抑えるためにかけられた魔法が無効になった瞬間に行動を起こせば、逃げることもできるんじゃないだろうか。

…問題は、その瞬間が分かれば苦労はしないんだぜ！ってことだ。

それに、めちゃくちゃ長いこと効く魔法とかだったら、もうお手上げだ。

今、何故かはよくわからないけれど、トキ達はベガーズ・バンケットのみんながいるサーカスのテントに向かっている。

サーカスにはユリアンもヴァンも居るはずだし、ルーやふたごも居る。

もしかしたら助けてもらえるかも！？

ただ、今の私は布にくるまれて周りからは分からないし、声も出せないから、気付いてもらえないかもしれない。

トキの言っていた『幻覚』も気になる。

もし言葉通りに周りの人に幻覚を見せるような魔法があるなら、トキが布にくるまれた大きな荷物（私）を抱えていることさえ、誰にも分からないかもしれない。

参ったなあ…

私が途方にくれたたちょうどそのとき、私を担いで走っていたトキが突然足を止めた。

「お前…！」

トキはひどく動揺した声をあげる。

何が起きたんだろう？

私が緊張して耳をそばだたせると、密やかな足音が、ゆっくりとこちらに近づいてくるのが分かった。

「やあ、お前がトキか。貴重な黒い瞳の人間でありながら、国際的指名手配犯…盗賊団『ヨシユア・ツリイ』の頭。義賊ぶった愚か者とボスは言っていたかな」

私はその『誰か』の声を聞いてぞっとした。

それは、感情のこもらない、冷やかで抑揚のない話し方。

何にも興味の無さそうな…

いや、むしろ、全てを諦めているような。それはまさに「ロボット」のような、機械的な声だった。

今まで、こんな不気味な声は聞いたことがない。

「お前の狙いをボスは知っているらしいが…しかし特に相手をしてやろうとも思わないと言っていたな」

「！」

その言葉に、トキは動揺している。けれど、彼は何も言わない。私はすぐ近くににいるから、なんとなくトキの緊張が伝わってくる。

「…お前は、アマデウスだな？」

トキはその人物に問いかける。

アマデウス？

どこかで聞いた名前だな…

「ああ。わたしはアマデウス・ヴォルフガング。我がボスのお言い
ついで推参したところだよ」

アマデウス・ヴォルフガング？

まさか…

ユリアンの大切な人を喰い殺し、ヴァンの狼トラウマのもとでもあ
るあの狼？

自分が同類だなんて絶対思いたくないような恐ろしい銀色の狼、ア
マデウス。

…が、今ここにいるの！？

気づくと、トキはじりじりと後ずさりしていた。
逃げるつもりなんだ。

「フロイデのお抱えのライカンスロープが、何の用だ？」

トキが慎重に言うと、アマデウスは囁くような声で答えた。

「いや、お前に用はないんだ」

アマデウスの声がする場所が、トキがじりじりと離れているにも関
わらず変わらないで、だんだん近づいて来ている。

と、突然私のすぐ耳元で、声がした。

「お前が抱えている荷物に用があつてね…」

「んうっ!？」

声があまりに近くで聞こえたので、私は驚きのあまり叫んでしまった。

口に巻かれた布のせいで小さな唸り声になったけれど、アマデウスには聞こえていたはずだ。

「わたしの部下が、珍しい黒い狼を見たと言っから、ボスがいたく興味を惹かれてね、私が確認しにきたんだ」

「その荷物、同朋の匂いがするなあ…ちょっと見せてくれよ」

アマデウスはわざとらしく猫なで声を出す。

私は背筋が凍りついた。

アマデウスの狙いは私？

何のため？

それに、部下って…

私は逃げ出したくてたまらないけれど、先ほどから少しも動くこと

ができないでいる。

どうなっちゃうの私！？

まさか…喰われてしまうの！？

お食事的な意味で！？

「動くな。お前達、舐めた真似はするなよ」

アマデウスは言った。コートニーとラスに牽制しているようだ。
あの2人は闘おうとしているのだろうか。

そのとき、トキが叫んだ。

「アマミヤ！魔法を解いた！逃げろ！」

同時に、トキは私を布ごと高く放り投げた。

またかああああい！！

ぎゃあああ！浮遊感！ジェットコースター落ちるときの気持ち悪い
感じがする！！

私は無我夢中で手足を動かした。すると、先ほど必死で引っ張って
もびくともしなかった紐が、少し力を込めただけでちぎれてしまっ
た。

私は手足を自由にすると、体に巻き付いていた布を引きちぎりながら、夢中で道路に着地した。

目隠しを取って目に入ってきたのは、日が暮れて、街灯の明かりでかるうじて通りの様子が分かるような、人気のない路地裏だった。

トキ達を振り返ると、逃げて行くコートニーの後ろ姿と、トキがアマデウスに飛びかかろうとしている姿が見えた。
しかしアマデウスはトキの方を見ていない。

…こつちを見てる？

アマデウスと目があつた。

白い街灯の明かりに照らされて見えたのは、作り物のような美しい顔の、銀髪の青年だった。儚げな顔の造りとは裏腹に、冷酷そのものみたいな表情でこちらを見ている。

全てを見下しているような表情に見えるかと思えば、何もかも諦めて絶望しているような表情にも見えた。

かと思えば、私と目が合った瞬間、その顔がパツと輝いた。

「黒い狼！！ああ、本当に、本当に居たなんて！」

笑顔で私を見て、アマデウスは大きな声をあげた。
終始感情のこもっていなかった声は、打って変わって歓喜に震えていた。

…何この人？

…しかも何この反応？
何でそんなに嬉しそうなもの？

全く理解不能だともいながらも、私は前を向いて一目散に走り出した。

とにかく、今は逃げる！！！！

でも、追いかけて来たら、狼同士だし、捕まっちゃうかも…？

そう思つて一瞬振り返ると、走りだそうとしているアマデウスをトキが魔法か何かで足止めしているようで、アマデウスは悲しげな、今にも泣き出しそうな表情でその場に立ち尽くしていた。

「待ってくれ！」

アマデウスの悲痛な、ともすればちょっと良心が痛むくらいの悲しげな叫び声を振り切つて、サーカスの匂いを探りながら、私はその場から走り去つた。

私は無我夢中でアマデウスから離れようと走り続けた。

…けれど。

結果的にはトキがおとりになって私を逃がしてくれた形になってしまった。

それを気にもとめず、自分だけ先に逃げてしまふなんてことは、やっぱりできない。

それに、ちょっと感動してしまった。私を置いていけば闘わずに逃げられたかもしれないのに、トキは躊躇もせずに私を逃がしてくれたから。

まあ私が戻ったところで、トキの助けにはならないかもだけど…。

私は明かりの少ない通りを駆け抜けると、すぐにビルの隙間の暗がりには隠れた。そっとビルの裏に回り、狭い通路を進んで戻り、隠れたまま2人に近づく。

トキはアマデウスと向かい合って険しい表情をしていた。アマデウスの表情はこちらからは見えない。

「お前、あと数秒で魔法が切れるな。死にたいのか？」

アマデウスは冷ややかに言った。

「…道具ならまだある。お前一匹くらい、どうとでもなるぜ」

トキは笑って言う。余裕がありそうだけど、無理をしている笑顔にも見えた。

「…一匹？貴様、わたしを馬鹿にしたな」

冷静で機械的な話し方だったアマデウスが、初めて怒りを顕わにして声を荒げた。

「…喰ってやる!」

そう言い放つと、アマデウスはトキに牙を剥いて飛び交った。魔法の力が切れてしまったのだ。

私はとっさに、トキの前に飛び出そうとした。けれど、その瞬間、誰かが私の視界を覆った。

第28話 薬指の思い出

「わあっ」

驚いて短く叫び声をあげたけれど、すぐに「アマミヤ！」と聞き慣れた声に名前を呼ばれた。

そして、清潔そうなミントの匂いに包まれる。

見上げると案の定そこには、ユリアンが立っていた。

トキの方を見てみると、トキをかばって、大きな獣がアマデウスに襲いかかっていた。

ライオンの体にコウモリの羽が生え、尻尾はなく、代わりに蠍の毒針がある。

一瞬その姿が見えなくなったかと思えば、アマデウスの上に馬乗りになったルーが姿を現した。

さっきの獣姿はルーの正体、マンティコアだったようだ。

「ユリアン！ルー！」

驚いて、私は声をあげた。

ユリアンの方に向き直ると、腕組みをして私を見下ろしたまま、ユリアンは無言で突っ立っていた。

ユリアンは無表情でどう見ても怒っている…だけど、それでも私は安心して泣きそうになってしまった。

助かったあああ!!!

2人ともナイスタイミング！

嬉しくてお礼を言おうとしたけれど、同時にユリアンは表情を強張らせて言った。

「アマミヤ、ここから動くな。それから絶対に奴に近づくなよ。絶対だ。約束してくれ」

そのユリアンの剣幕に圧されて、私は何も言えずに頷いた。

ユリアンは私が頷いたことを確認するとすぐに、持ち前のジャンプ力を発揮して、二度の跳躍でアマデウスのそばに降り立った。

アマデウスはルーに取り押さえられていて、トキの魔法の道具でまたしても動きを封じられているらしく、座り込んだまま動かない。

トキは無事だ。私はホツとしてため息をついた。

けれどもアマデウスは、動けないというのに、薄く笑顔を浮かべていた。

魔法をかけられている上に、3対1で、どうしたって劣勢なのに。

ユリアンは、アマデウスを見据えながら立ち尽くしている。

どうする気だろう…？

アマデウスはユリアンの親友のかたきだ。

復讐すると誓ったと言っていたけれど、復讐って、具体的に何をするつもりなのだろう？

…まさか、殺すとか？

私はぞっとして、ユリアンに声をかける。

「ユリアン！駄目だよ！」

「アマミヤ…動くなって言ったる」

ユリアンは一瞬振り向いて言った。その刺すような鋭い目つきを見て、私は少し恐ろしくなった。

アマデウスに近づくユリアンを、ハラハラしながら見守る。

「アマデウス…俺を覚えてるか？」

ユリアンは立ったままアマデウスを見下ろして言った。

「…やあ。誰だったかな？」

アマデウスが薄く笑うと、ユリアンは表情を変えずにいきなり、履いている黒い編み上げブーツの爪先で、その頬を蹴りつけた。

私はあまりのことに目をつむってしまふ。
あれが、ユリアン？

あのいじけ虫で、泣き虫な…

妹を、親友を守れなかったと泣いていた優しい青年が…

あんな酷いことをするの？

アマデウスは頬に傷を負って、それでも何とも思っていないような無表情でユリアンを見上げた。

「弱虫なウサギは動けない者にしか立ち向かえないのか」

「…黙れ」

「まあ、妹一人も守れないような男だからな。お前は」

「黙ってるよ…！」

ユリアンは今度は、アマデウスの肩を蹴りつけた。アマデウスは小さく呻き声をあげて、横倒しに倒れる。痛々しくて、見ていられなかった。

アマデウスは人喰いだ。

…恐ろしい殺人鬼なんだ。

それを頭では分かっているながらも、私はユリアンを止めたくてたまらなかった。

少しも抵抗できず、無言で攻撃を受け止めている姿が、哀れで…。

けれども、アマデウスは何ともない風で、倒れたまま涼しい顔でユリアンを見上げた。

「仇を前にしてこんな軽い反撃しかできないのか？ ユリアン・フロ
ーゲ。脆弱で愚かな小ウサギよ。ほら…俺を殺せるもんなら、殺し
てみるよ」

「このっ…」

ユリアンは目を見開き、その表情は憎悪に染まっていた。

私はとっさに走り出していた。

どこから取り出したのか、ユリアンはアマデウスにピストルを向け
る。

「望み通り、殺してやるよ！！」

ユリアンは吠えるように叫んだ。

気づけば、私はアマデウスとユリアンの間に割り込んで、2人の間
に手を広げて立って、夢中で叫んでいた。

「待って！！！」

けれどもユリアンは表情を変えない。目を見開いたままでピストル
を私に…アマデウスに向けたまま立ち尽くし、冷静さを失っている。

「…今度ばかりは、君が何を言っても無意味だ。どいてくれ。僕はそいつを殺さなきゃならない」

私はそれでもアマデウスの前から動かなかった。

「ユリアン、アマデウスを殺すのなら、それがどいつことか、考えてみて」

私は必死で訴えた。

「ユリアン、アマデウスを殺したらあなたはきっと後悔する。ピストルを下ろして」

私の言葉に、ユリアンは興奮して声を荒げる。

「…君に僕の気持ちがかかるっていうのか？目の前で親友を喰い殺された僕の、僕の気持ちが！？」

「分からない」

私は即答する。ユリアンは眉根を寄せて私を見た。

言葉を選びながら、私は慎重に続ける。

「あなたの苦しみは分からない。…でも、あなたの悲しみは分かると思う」

私は努めて冷静に語りかけた。ユリアンの憤怒に触れて、声が震えそうなのを必死に堪える。

「…あなたも、他人の悲しみが理解できるでしょう？」

ユリアンは何も言わない。

「だってあなたの悲しみは、誰かの悲しみと何も変わらないんだよ」

ユリアンは目を伏せる。私は言いつのつた。

「そうじゃない？」

「…そうでなくては、誰も人の気持ちを分かってあげられない。この悲しみ、この苦しみを、他の誰かにも味わってほしいと、ユリアンは本当に思う？」

私はユリアンに語りかけながら、いつの間にか泣き出してしまって

いた。

「誰かを失う悲しみを、この絶望を、あなたはあなた以外の誰かにも感じて欲しいと思うの?」

この恐ろしい喪失感を。

この救いの無い絶望を。

初めから希望の無い、果てしない暗闇のような、この感情を。

誰かにも与えたいと思うか?

大切な人を亡くした人にしか分からない、この恐ろしい感情を、悲しみを、自分の手で作り出したいと、本当に思うのか?

頬に流れる涙を拭うのも忘れて、まっすぐにユリアンを見つめたまま、私は必死で話を続けた。

「ユリアン、アマデウスを殺したら、誰かの悲しみを作り出すかも知れない。あなたはきつとまた、そのことで苦しまなければならぬよ」

「分かってるでしょう?」

私がそう言つと、ユリアンは瞳を揺らめかせて、悲しげに顔を歪めた。

「じゃあ、それなら…僕は、どうしたら良いんだ？」

「君は僕にどうしろって言つんだ？」

彼は途方に暮れて、私を見返した。

その冷酷に凍っていた表情は溶け出して、困った表情の、いつものユリアンに戻っていた。

「…あなたの信じることをしたらいい」

「あなたは大丈夫。ユリアン、大丈夫だよ」

私はユリアンを一瞬抱き締めて、言い聞かせるように囁いた。

「だってあなたは、悲しみを知っていますでしょう。愛したことを、覚えているでしょう？」

離れようとした瞬間、ユリアンに力強く抱き締め返される。そうしながら、ユリアンはふっと息をついた。

「まったく、君だけだ。こんな風に…言ってくれる人は」

ユリアンは私から離れると、ため息をつきながら髪をかきあげた。

「…うん。よし。もう大丈夫」

そう言つて微笑む。

ああ、いつものユリアンだ。

私は胸をなで下ろした。

ユリアンは、アマデウスを睨みつけて言った。

「話は聞いていたな？僕はお前なんか殺さない。しかしお前は…お前の罪は、裁かれるべきだ」

アマデウスはうなだれて呟いた。

「…ああ……殺してくれて良かったのに」

私はその言葉を聞いて、頭にきてしまった。

アマデウスのシャツの襟元を力を込めて掴んで、顔を引き寄せて、至近距離で睨みつけた。

「アマデウス・ヴォルフガング！」

名前を呼んで、視線を合わせる。

「本当に私の話を聞いていたんですか？あなたはあなた以外のたくさんの人に絶望を、悲しみを与えてしまったんですよ」

「だからあなたは、死ぬことなんかには逃げないで、そのことをしっかり考えなければならぬ」

私はアマデウスにだけ聞こえる声で言った。アマデウスの目をまっすぐみると、子供のような、不思議そうな顔をしていた。

「逃げないで、考え続けなさい。自分のしたことについて。あなたにふりかかったことについて。でも、されたことのせいになんてしたって、辛いのはあなただからね」

アマデウスは目を見開いた。震える声で、囁いた。

「…わたしのことを、知っているのか？」

「いいえ。でも、分かるわ」

私はそう言うと、ちょっとだけ微笑んだ。

アマデウスはキョトンとしていたけれど、一瞬逡巡すると、決心したようにまっすぐ見返してきた。

「…黒い狼、あなたの名前を教えてください」

「雨宮香子」

私は答える。

「アマミヤ…あなたに免じて、私は…」

「この者達を、許しましょう」

アマデウスは突然立ち上がった。

トキが驚いて声をあげる。

「…まさか！動きやがった…魔法の効力はまだ続いている筈なのに」

「今夜は、この正義感溢れる我が同胞、黒い狼に免じて、お前達に手を出すのはやめておこう。ボスもお前達については何も言うてはいなかったから」

先ほどとは打って変わって、自信に満ち溢れ、余裕の表情でそう言う、アマデウスは私を引き寄せて、耳元で囁いた。

「アマミヤ、私はあまり『感情』を持ち合わせてはいないから、あなたの話を完全に理解できてはいない。でも、何故なのか…またあなたの話を聞きたいと思った」

「きつとまた、すぐにお目にかかりましょう」

「それでは、失礼を」

アマデウスは私の手の甲に自分の唇を押し付けると、いきなり指に噛みついてきた。

「いたっ」

私が小さく叫び声を上げると同時に、アマデウスは飛び上がった。ビルの入り口の屋根に降り立った。

そのまま行ってしまうおとしたが、思い出したように振り向いて、ユリアンの方を見た。

「お前、我が同胞のおかげで命拾いをしたな。私に殺意を持って攻撃すれば、それが全て貴様に跳ね返るところだった」

アマデウスはそう言い残すと、壁を走り、そのまま角に消えていった。

緊張の糸が切れて、私はその場にへたり込んだ。

トキとユリアンに声をかけられていたらしいけれど、気付かず、放心したままアマデウスの消えていった方を見ていた。

噛みつかれた薬指がひどく痛んで、知らないうちに、自分の手を抱きしめていた。

第29話 ミッドナイト・クラクション・ベイブ

私は安心してへたりこんでいたけれど、しばらくして突然ルーに抱き起こされた。

「アマミヤ、大丈夫かい？手を噛まれていたな…見せてごらん」

私はぼうつとしたままルーにされるがままになっていたけれど、ユリアンが真っ青になって立ち尽くしているのに気づくと、心配してくれているルーに構わず咄嗟に駆け寄った。
私が近づくと、彼は放心状態で口を開いた。

「殺意を持って攻撃すれば、それが僕に跳ね返る…だって？あいつ、『エコー』の魔法を使っていたのか…？」

ルーがユリアンの言葉に驚いて声をあげた。

「そんな馬鹿な！自分の命を削る魔法だぞ！？口先だけに決まっている！」

「…でももし本当だったとしたら、アマデウスを殺そうとしていたら僕は死んでいたんだ。アマミヤ…」

私はユリアンに、力強く抱き締められる。その体はこころなしに震えていた。

「危なかった…君のおかげだ…」

私はよく理解できず言った。

「どういうことなの？」

「あいつがさっき言っていたこと。アマデウスに殺意を持って攻撃すれば、全て僕に跳ね返るところだったんだ」

「それも魔法？」

「そう。禁じられている魔法だ。魔法であつても武器であつても、自分が受けた攻撃を敵に返す魔法なんだよ。しかも、何倍もの威力で。これを受けたら確実に死んでいた」

ユリアンがアマデウスを殺そうとしていたら、逆にユリアンが死んでいた…っていうことらしい。

「そうだったの…それは…良かった!!」

さっきは、思った以上に危ないところだったんだ。でも、ユリアンが無事で良かった。

私はホッとして笑った。

ユリアンは私の反応を見て目を丸くしたけれど、すぐに目を細めて微笑んだ。

「…うん。良かった。殺さなくて」

でも、とまじめな顔に戻ってユリアンは付け加える。

「この魔法は両刃の剣でもあるんだ。数百年前の大戦で使われたもので、魔法で守られる筈の本人も、長時間解かないまましていると魔法に精神を食い尽くされて、死に至る。すぐに魔法を解いたとしても、確実に体は蝕まれる。…ほとんど自殺行為だよ。アマデウスはそんな魔法を自分にかけてまで、何をしようとしていたんだろう？まさか僕を殺す為なわけではないだろう。僕達がここに来る保証なんてなかったはずだから…」

ユリアンはそう言いながら目を細めて、まるでそこにアマデウスが居るかのように、虚空を睨みつけた。

そのあと、私達は太急ぎで、走ってサーカスのテントに戻った。

その時にやっと気づいたけれど、トキはいつの間になくなっていた。

もう会えないのかな…？

私は少しがっかりした。

この世界のことを聞いてみたかった。

まあ、誘拐とかはナシで…。

テントに向かいながら、急いで帰るのには訳があると、ルーが走り

ながら説明してくれた。

「アマミヤ、トラッカー・ドラゴンに追いかけてたんだって？
よく無事だったねえ」

ルーはそう言いながら街灯をスレスレのところではける。

そういう私も道端の花壇を踏みそうになって、とっさに跳び越えながら応えた。

「…トラッカー・ドラゴン？…警察っぽい人のこと？」

このビジネス街、マグニフィセント・セブンに来てすぐの頃に追いかけてきた緑色の細身のドラゴンを思い出す。私の二倍はあったな。あれは怖かった…と思い返しながら、私は言った。

「…そうか、君はすつごく、すつごく世間知らずだって、ユリアンが言ってたっけ」

……その通りなんだけどさ。

なにそのしつこい強調。

馬鹿にしてるのかな！？

眉を寄せて苦々しい表情の私を見て苦笑しながら、ルーは詳しく説明をしてくれた。

「トラッカー・ドラゴンってのは、警察のドラゴン特殊部隊の呼び名だよ。この部隊は、危険な幻獣が街に出て来たりなんかした時に

捕まえるのが専門なんだ」

「へえー！」

そんなのがあるんだ…ドラゴン部隊だなんて、この世界ならではの部隊だなあ。

私は感心しながらルーの話聞いていた。「今日君が街で獣姿のまま走り回っているのを見て、誰かがトラッカー・ドラゴン呼んだんだろうね」

私は首を傾げて聞いた。

「ねえ、呼ぶってどうやって？そういう道具があるの？ドラゴン達、近くに居たのかってくらいすぐに現れたよ？」

そう言いながら、携帯電話つてあるのだろうかと内心疑問に思った。インターネットみたいなものがあるんだから、ありそうだけどな。

ルーはちよつと戸惑って言った。

「『遠距離会話』の魔法道具のことか？そんなもの使わなくても、警察を呼ぶには、呪文を口にするだけでいい…それも知らないの？本当に世間知らずだなあ」

ええ！世間知らずですいませんね…

しかしなんて便利な魔法があるんだろう！

誰にでもセコムがついてるようなものじゃないか！
これなら犯罪なんてなくなっちゃいそうなのにな…

「けど、この『警察召還』の呪文は、大体どこの国でも、小さな頃から、学校や家で教え込まれてるはずなのになあ…」

ルーは首を傾げる。

ちよつと怪しまれているみたい。

この世界の住人なら常識なことでも、違う世界からやってきた私にとっては、知らないことばかりだ。

ユリアン達は私を遠い国からやってきたとずっと思ってる。違う世界からやって来たと正直に言うことも考えたけど、何だか信じてもらえないような気がする。それで通していたから、今さら言っても更に信じてもらえないと思うし…。

何となく、思ってたんだよね。

本当のことを言わない方が良い。そんな気がした。

何故かはよく分からないけど…

とりあえず話を変えるべく、私はルーに質問した。

「そ、そつえばさ、トキが、私がドラゴンたちに『目』をつけられたって言ってたんだけど…」

「ああ、うん」

ルーは私の思惑に特に気づく様子もなく、素直に頷いた。

「『目』って何なの？」

私がそう言った瞬間、ルーは人にぶつかりそうになり、すんでのところですよけて悪態をついていた。

「…ああ、びっくりした。こんな夜中に女の子が1人で歩いてちや危ないよなあ」

ルーは体勢を整えて私に追いつくと、話を再開してくれる。

「…『目』をつけられるとちょっと厄介なんだよね。ドラゴン達は警察にしか扱えない魔法道具を持っていて、それが通称『目』って呼ばれているものなんだ。詳しくは分からないけど、魔法と科学を複雑に融合させた作りになってるらしい。発動させると、その使用者の半径3〜4メートル以内にいる人全員に、探索魔法をかけられる。この道具で魔法にかけられてしまうことを、『目』をつけられるって言うのさ」

ルーは何かのお店の前の巨大な犬の置物を飛び越えながら付け加える。

「本当なら探索魔法は1人の魔術師が1人の被魔法者しかつくれないはずだけど…」

ルーが何を言っているのか全然分からん！

私は走ってきた車をジャンプで飛び越えると、思わず言った。

「ごめん、探索魔法って何？それと、被魔法者って？」

「そうだな…すごく簡単に言うと、探索魔法はその名の通り、魔法をかけられた人がどこににいるのか、調べられる魔法のこと。被魔法者ってのはまあ単純に、魔法をかけられた人のことだね」

うーん…何か変な感じ。

「まあとにかく、『目』は、高等魔法である探索魔法を簡単に大勢にかけられてしまう、厄介な道具なんだ」

「で、今すぐにサーカスのテントに行かなきゃならないのは、その『目』を避けるためだね。サーカスのショーの為のテントの中では魔法は使えない。魔法の道具の効力もテントの中では無効になってしまう。だから、警察に筒抜けの君の動向を知らせないために、サーカスのテントで『目』の魔法がとけるまで待機しようってわけ」

「そういうことだったんだ…」

私はさらに感心して何度も頷いた。

あれ？でもちよつとまでよ？

「それって、そのテントの前で警察が張っていたら、おしまいじゃない？」

私は言った。

テントの中が魔法を使えないのは、そういう決まりになっているとユリアンは言っていた。だとしたら、警察がそれを知らないわけは

ないじゃないか。

私は焦っているのに、ルーは朗らかに笑った。

「そうだね！そうすれば簡単だもんねえ。でもいいかい？実はあまり知られていないけど、魔法禁止の場所って結構たくさんあるんだよ。サーカスのテントくらい大きな範囲の魔法禁止区域はそう無いけど、一部の病院や工場、警察や学校なんかでは、魔法禁止区域は大体あるんだ。たくさんあるそれを警察が全部探して、君を見つけるのは至難の技だよ。ついでに言うと、今は君にかけられた『目』に簡単な『混乱』の魔法…かけられた魔法が正常に作用しない魔法をかけてある。まあ、その場しのぎで効果が短いから、急がなきゃ解けちゃうんだけどね。とにかく、警察は君の行く先がサーカスだなんて分からないよ。だから安心していい。サーカスに黒い狼が居るってことは、一応極秘になってるし」

「そうなんだ…」

やっと納得し…あれ？

なら何故、トキはサーカスに行こうとした？そういう場所が他にもたくさんあるなら、「相容れない」って言ってたサーカスをわざわざ選ぶだろうか。

前から走ってきたバイクを2台連続でうまく飛び越えながら、私は考え込んだ。

ルーに聞こうと思って顔を上げると、ルーは前を走っていたユリアンに追いついて、話をしている。

質問をするタイミングを失って、私はずっとそのことを悩みながら2人を追いかけた。

サーカスのテントに着くと、魔法がまだ解けていない私はテントの中で一晩過ごさなければいけないと言われた。

まあ、今朝の牢屋よりは大分まだ。

「2人とも、助けに来てくれてありがとう」

落ち着いた所で私はお礼を言う。

「無事で良かったよ」

ルーは笑ってそう言うのと、「おやすみ」と言って、自分の部屋に戻って行った。

そういえばもう真夜中だ。

ユリアンは毛布とクッションを持って来てくれて、観客席のベンチの隅っこに、簡単な寝床を作ってくれた。

「ユリアン、アリはちゃんと帰って来た？」

ずっと気になっていたことを私は口にする。

ユリアンが口を開こうとしたちょうどその時、アリがどこからか駆け寄ってきた。

「アリ！良かった！無事だったんだ！」

アリは私の膝に抱きつくと、小さな声で言った。

「アマミヤ、ごめんなさい…」

「アリが、君が危ないって教えてくれたんだ。アリが犬の嗅覚で君の匂いを追いかけて、僕らを君のどこまで案内してくれてさ。アマデウスが居たから、危ないんで先に帰らせたけど」

ルーが言う。

「そうだったんだ！ありがとう、アリ」

私はアリの頭を撫でてお礼を言う。けれど、見上げてくるアリの表情は、少し曇っていた。

また元気がないみたいだ。

疲れちゃったんだろう。今日は色んなことがあったから…

そういえば、なぜあの街に入ったんだろう？

「アリ、なんでマグニフィセント・セブンに行ったの？家に帰ろうとしてたの？」

「うーん…ちょっと、行ってみたかったんだ」

アリはその会話には興味がないみたいで、ちゃんと答えてはくれなかった。ユリアン達にこつてり叱られたから、もうその話はしたくないらしい。

まあ、無事だったからいいか。

背中に登ってきたアリと話していると、『守護』の魔法をかけてくれていた（この魔法があれば、明日の朝までテントに誰も、ドラゴンも入ってこれないそうだ）ユリアンがつかつかと歩み寄って来た。

「そういえばアマミヤ…?」

「あの街に獣姿で入ったら危険だって、僕は言ったよな?」

ユリアンは先ほどまでとは打って変わって、冷たい声を出した。

その硬い笑顔からも、トゲトゲしい雰囲気からも、ユリアンが静かにはあるけれど、確実に激怒しているのが分かった。

「話はアリと一緒に明日、たっぷり聞かせてもらっからね」

そう言ってユリアンは、自分の部屋に戻って行った。

「…怒られちゃったね」アリがポツリと言った。
私は引きつった笑顔で返した。

「多分、明日はもっと怒られるんじゃないかな…」

第30話 MUKAI MORNING

翌朝、テントの開いた隙間から差し込む朝陽が眩しくて、私は目が覚めた。

目をこすりながら体を起こすと、私の隣のベンチで眠っていたアリが身じろぎしてぼんやりと目を開く。けれどすぐに目を閉じて、また眠ってしまった。

時間はまだ早朝らしく、辺りは鳥の声以外は聞こえず静かで、空気は冷たく張りつめている。

私も二度寝してしまおうかとぼんやり考えていると、突然、誰かの気配を感じた。

「？」

私はゆっくりと振り向く。

「お目覚めか？」

後ろの方のベンチに、トキが相変わらずの仏頂面で、座っていた。

「トキ!？」

私は驚いて一気に目が覚めた。

また誘拐されるのだけは嫌だ!!

そう思いながら、アリを背中に身構える。

昨日縛られたのは大分苦しかったんだからね！

けれど、何故だかその時のトキからは、昨日のような敵意は感じられなかった。

「…警戒するな。話し辛い。もうあんなことはしねえよ」

無表情のままそう言っていると、トキはゆっくり近づいてきて、私の隣に座った。

「でも、やっぱりあいつらは仲間には勧めないな。お前、ベガーズ・バンケットが人身売買で生計をたてていること、知ってたか？」

「うん」

私がすぐに頷くと、トキは驚いた顔で勢いよくこちらを見た。

「知ってた？…それでお前はそんな仕事をしているあいつらが仲間で、本当に良いのか？」

その言葉に私はムツとして、眉をひそめてトキを見た。

「失礼なこといわないでよ。アマデウスの言っていたことが本当なら、あなただって盗賊なんですよ？」

「俺たちは人身売買はしない。金持ちから金目のものをちよつと拝借して、本当に必要としている人に渡すだけだ」

トキは真面目な顔でそう言った。アマデウスが言っていた、義賊ってそういうことか…と私は納得する。

「…でも、ユリアン達はもう人身売買を辞めるんだよ」

私がそう言つと、トキは目を丸くした。

トキは無表情だ無表情だと思っていたけど、話していると気にならなくなった。ほとんど変わらないトキの表情の、ほんの少しの変化が分かるようになったからかもしれない。

「辞めるだど？」

トキはすごく驚いて、大きな声をあげた。

「何故！何かあったのか？俺が何度辞めろと言ってもヴァンは聞かなかったのに…」

戸惑っているトキに、私は正直に言った。

「…うん…実は、取引したんだよ。私を売って大金を手に入れたら、もう人身売買を辞めるって」

「はあ!？」

トキは今度は顔色が悪くなる程驚いている。いや、呆れてるって言った方が合ってるかも。

「お前はそれで良いのか!？」

トキは私の腕を掴んでゆすりながら、憤慨して言った。

トキは朝から元気だなあ…

興奮しているトキの激しいリアクションに、私は的外れなことを考えてしまう。

でも、こんなに他人を心配してくれるなら、やっぱり悪い人ではないのかもしれない。

…心配とはちよつと違う気もするけど。

「大丈夫だよ！私を売るけど、その後私を逃がしてくれるんだから」

私はトキを安心させようと笑いながら、胸を張って言った。

すると、トキは頭を抱えてうめいた。

「そういう問題か！？…何なんだお前は！全く理解できない！自分が売られるっていうのに！そんな楽天的にかまえていられるなんて！それに、そんな怪しい取り引きを簡単に信賴するのか？」

うわっ

なんかすごい怒ってる！

ちよつと意外。こんなに感情を露わにする人だったんだ…。

「お、落ち着いて…」

私はビクビクしながら言った。

トキは私をじろりと睨む。

「これが落ち着いていられるか！……お前は这个世界に来て日が浅すぎる。それにまだ何にも知らないガキだ。だから悪人にそんなうまい条件を持ちかけられて、信用してしまうんだ」

私はユリアン達を悪人だなんて言われて、カチンときた。
しかも私、ガキとか言われてる！

抗議しようと口を開いたけれど、トキの言葉に遮られてしまった。

「よし、俺が世間知らずなお前に、この世界のことを教えてやる。
この世界が元の世界と変わらない…残酷な世界だってことも」

トキはそう言って、一瞬、悲しげな表情を浮かべた。

トキは私がユリアンやヴァンに騙されていると誤解しているみたいだ。誤解をとかなきゃと思ったけれど、トキの悲しげな表情のことが気になって、私は黙ってトキの話を聞き続けることにした。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺は向井時生。ムカイトキオ…アママミ
やってのは名字か？」

「うん。フルネームは雨宮香子」

少し落ち着いたトキと私は向かい合って、改めて名乗り合った。

「じゃあ、アマミヤ、この世界について最初から説明してやる…」

トキが話し始めたけれど、我慢できずに私は言った。

「その前に、一個だけ質問させてくれない？昨日気になってしょうがなかったことがあるんだけど」

「…なんだよ」

トキは話を遮られて、少し不満げに言った。

「昨日はどうして、まっさきにサーカスに向かったの？魔法が無効になる場所は他にもたくさんあるって聞いたよ。なのに、どうしてわざわざ『相容れない』とか言ってたサーカスを選んだの？」

「…そんなことか。いいか？魔法の効果の強さや作用時間は様々だ。まあ、工業製品にかけられた魔法は一定だったりする様な例外もあるけど。魔法禁止区域にも強力だったり弱かったり、ランクがあるわけ。その中でもサーカスは、非常に強力な禁止区域になるんだ。まあ、他にも強力な場所はあるけど、ユリアンの魔法は…信頼できるからな」

「…このテントに魔法をかけてるのって、ユリアンなんだ？」

ちよつと驚いて私は言った。

「もちろん。ユリアンは魔術師の中でも、若手にも関わらず凄腕で有名なんだぞ」

「そうなの？」

知らなかった…ちょっと見直したよユリアン！てゆうかトキ、ユリアンのことは認めてるんだ。なのにどうしてサーカスが嫌いなんだろっ？

私がそう言つと、トキは言った。

「俺はヴァンもユリアンも認めてる。ヴァンは馬鹿みたいに真面目だし、ユリアンは、まあ、本心が読めない食えない奴だけど、魔法の腕は一流だ。…なのに二人ともあんな仕事をしているのが許せん！」

人としては、認めてる。でも、仕事は気に入らない。

ということらしい。トキはサーカスのみんなが嫌いな訳じゃないんだ。

私はちよつとほつとした。

「まずはそもそも、この世界のことを話そうか。この世界の名前は『コール』。これはこの惑星の呼び名だ。たくさんの想像上の生き物、幻獣が住んでいて、人口的には普通の人間の方が少ない世界だ」

惑星って…

ここは違う星なの！？

「……」

驚いて何も言えないでいる私に気づかず、トキは続ける。

「科学と魔法が共存していて、不思議なバランスが成り立っている。

科学は俺たちの元の世界と同じかそれ以上に発達したテクノロジーもあるが…かと思えば、そうだな…街灯に電球が無いのに気づいたか？」

「あ、そういえば…」

マグニフィセント・セブンに始めて行った時に見て、気になってたんだ。でも、夜にはちゃんと灯りがついていただけ…

「あれは、魔法で灯りがつく街灯なんだ。そもそもこの世界には、電気がない。だから電球が存在しないんだ。灯りからコンピューターから全て、光の魔法でまかなっているからだ。そんな風に、魔法に頼りきっている部分がある」

私は目を丸くした。思わず声をあげる。

「ふうん…おもしろいね！」

「そうだな。全ての人が魔術師なわけではないが、機械を動かしているのは全て魔法だ。この世界のほとんど全てに魔法のエネルギーが関わっている。この世界で言う魔法つてのは、『魔法』と呼ばれる『科学物質』であると考えてもいいかもしれない…」

うん？なんか難しい話になったような。

「トキ…ちょっと話がずれてない…？あの、トキの話は面白いんだけどね」

ハッとしてそうだった、と呟いて、トキは話を戻す。

「とにかく、魔法がとても重要なんだ。この世界では…魔法と言うと、できないことはないんじゃないかと思わないか？」

「うん。だって、魔法でしょ？ハ。ー・ポッターでしょ？なんでもできそうな楽しいイメージだよ」

「その通りなら、どんなにいいか…」

トキはため息をついた。

「魔法というものがあるせいで、この世界は格差が激しい」

「魔法が使えればそれなりに暮らせる。しかし、使えなければ働き口さえない酷い地域だってある。そのせいか、未だに身分階級の残る国がたくさんあるんだ。人身売買やら、犯罪でももちろん魔法を利用している」

トキは苦々しく言った。

「元の世界と何も変わらないだろ？魔法は便利なものだが、使う人間が最低なら、最低な結果しか生み出さないんだ」

返す言葉が見つからない私に、トキは続けた。

「…ここは夢の世界じゃない。俺達の元の世界と同じように…いや、それ以上に、悪夢みたいな世界だ」

トキはそう言うと、沈黙した。相変わらず無表情だけど、彼は、これから言うことをためらっているようだった。

その顔を見ながら私は、何故この人は、この世界をそんなに嫌うの

だろう？

何故、こんなに悲しそうなんだろう？

ずっとそれを考えていて、この世界についてのいろんな疑問よりも、トキの気持ちの方が気になってしまっていた。

彼はずっと、悲しそうだ…。

トキはしばらく視線をさまよわせてから、やっと口を開いた。

「お前は、何故この世界に来たんだ？」

「…それは…」

予想外の質問に私が口ごもると、トキは焦って言った。

「いや、いい！言いたくなければ言わなくていい。あー…俺の仲間にはなれないと、昨日お前は言ったな」

「うん」

「それでもいい。俺達の盗賊団の仲間にはならなくても。必ずしも同じものに属さなくとも、手を組むことはできる」

トキはまっすぐに私を見つめて言った。

「俺の願いは一つ。無くした物を見つけること…。そのためには、お前の力が必要なんだ。俺を、助けてくれないか？昨日あんなことをしておいて、むしが良い話なのは承知の上だ。代わりにでき得る限りお前の手助けもしよう。頼む。黒い狼なんて、お前の他にはいないんだよ」

トキの必死で悲痛な願いに、私は胸を打たれてしまった。彼の無表情もほんの少し崩れて、すごく悲しげな表情を浮かべている。

こんなに必死で、こんなに悲しげな人の願いを断れるわけないと、私は思った。

第31話 MUKAI MORNING 2

「ねえ、それにしても、どうして今日はそんなに大人しいの？」

トキに協力すると約束してから、私はずっと不思議に思っていたことを口にした。

「…どういう意味だよ」

トキは睨んでくる。

「だって…昨日はひどかったよ。私を縛ったりしたのは誰？」

私がそう言つと、トキは目を細めて言った。

「…今日も、そのつもりで来たんだけどな」

「ええ！？」

私はちよつとトキから離れる。

「…冗談だ」

嘘だ！目が本気だったもん！

それでも私が警戒しているのを見て、トキはため息をついた。

「…気が変わったんだ。お前が……まあいいか」

言いかけて言葉を濁すトキ。

「まあいいって何？気になる！」

「気にするな…昨日はな、虫の居所が悪すぎた。お前がこっちの必死の願いをバツサリ断ってくれたもんだから、腹が立って…ちよつと強引な手を使った。なにせ、俺は黒い狼を長い間…3年間、探していたんだからな。条件通りにしないと『トランスペアレンシー』は願いを聞き入れないんだ」

「3年間…！？」

私はそれを聞いて愕然とした。

3年間も…そんな長い間、どんな気持ちでいたんだろう。

せつかく願いを叶えるためにこの世界に来たのに、ずっと足止めをくらっていたんだ。

そこで、やっと条件通りの私に出会って…

それなのに私は、その願いをむげに断ってしまった。

私だったら、どんな気持ちになるだろう？

怒って当然かもしれない。

長い間、必死でハル力を探して…そしてやっと会えたとしても、拒絶されてしまったら？

私ならきつと絶望する。

トキは、どんな気持ちで…

どんな気持ちで…いたんだろう。

「どっ…どうした？俺に腹を立ててんのか？」

トキが私を見て慌てている。
気づけば、私は泣いていた。

「あっ…ごめん」

そう言いながら、私は零れ落ちる涙を拭った。
けれども、何かのスイッチが入ったかのように、涙はボロボロと溢れ出してしまった。

私は我慢できずに、しゃくりあげながら言った。

「……ごめん…！ごめん…なさい…」

トキに必死に謝った。

「話も聞かずに…断っちゃって…」

「わ…私のせいで、悲しい…思いを、させちゃったね」

「…っ…ごめん…」

私はしゃくりあげながら、泣きながら、トキに謝った。

顔を手で覆い隠していたから、トキの表情は分からないけれど、きつと今、すごく困った顔をしているんだろうな。

でも…涙が止まらない。

私はひどいことをしてしまった。トキの気持ちを思うと、胸が苦しい。

「泣くほどのことじゃないよ。俺こそ昨日は悪かった。縛ったりしたのはやりすぎたと思ってる」

トキが優しい声で言った。

「なあ、俺はお前を見つけられて、嬉しかった。昨日は断られて途方に暮れたけど、結局お前は俺を助けてくれるんだろう?」

私は嗚咽を堪えて、ただ頷いた。

「ありがとう。…おい、そんなに泣くなよ」

そう言ってトキは私の頭をちょっと乱暴に撫でた。

私はひどいことをした償いがしたいと思った。

顔を上げて涙をぬぐい、トキを見つめた。

「私は何をしたら良い?」

トキは少し戸惑った顔をして目をそらし、首を傾げた。

「そうだな…具体的には、俺の『無くしたものを見つけること』を手伝ってほしいのと、『トランスペアレンシーの名前』を協力して探したいと思ってる」

「名前…そうだね」

白い少年…もとい、トランスペアレンシーの名前を見つけること。
それが、元の世界に戻る条件なんだ。

とりあえず今は知識をつけとけ、と、トキはまたこの世界についての説明をしてくれた。

「…お前がなつてしまった、幻獣っていうのは、人型、獣型、半獣型の3種の姿に変化できる生き物だ。

先進国や人口密度の高い国では、幻獣達は他種族同士でもコミュニケーションを円滑にとれるよう、基本的に平素は言語が統一された人型や半獣型をとっている。

その為、都市に住む幻獣は、自身の獣姿というのをあまり表す機会がなく、もう何年も獣姿になっていないという者も居るのだそうだ。

「だからマグニフィセント・セブンでお前が狼のまま走り回ったのが原因で、大パニックになったんだ。反省しろよ」

「…うん。ごめんなさい」

私は反省してしょんぼりうなだれる。

「…今後は気をつけろよ。本当に、危なかったんだからな」

トキは分かったか？と念をおしてくる。

こうして普通に接しているとトキは、面倒見の良いお兄さんって感じの人だ。

…無表情だけどね。

「…そうだ！トキ、ありがとうね！」

私がそう言つと、トキは眉を寄せて、意味が分からない、という顔をした。

「ほら、トラッカー・ドラゴンから助けくれたじゃない」

すると、トキは幾度か頷いて言つた。

「ああ…。うん。礼なら、ラナーに言え」

「ラナー？」

「俺達の…盗賊団ヨシユア・ツリイの仲間のジンだ。ジンってのは…ほら、あれだ。ランプの精」

「アラビアンナイトの？願いを叶えてくれるあの？」

「ああ。別にラナーは願いは叶えてくれないけどな。ランプに住んでるわけでもないし。そう言う珍しい人種なんだ。魔法を使わないで姿を変えられる、唯一の生き物なんだと。この世界でさえ、噂しか聞かない幻の生き物だと言われていたらしい…」

「そういえばコートニーがジンがどうのって言つてたっけ…あのとき、私の姿になってトラッカー・ドラゴンをまいてくれたのは、ラナーだったんだね？…ちゃんとお礼言いたいな」

でも、あのとき私を階段から突き落としたのもラナーなんだよね…。まあ、多分、助けるつもりでやってくれたんだろうけど、ちょっとやりすぎなんじゃ…とも思う。

「今度、俺達の店に来いよ。拠点にしてる居酒屋があるんだ。仲間を紹介する。その時に、ラナーにも会えるだろ」

「いいの？」

私は喜んで頷いた。

そしてトキは話を戻す。

「それから…幻獣の中には、ごく少数派だけど、本来の姿に誇りを持つているからあえて人型にはならないっていう、獣姿に強いプライドを持つ個人や種族もいる。そういう人を『エル・アイ・ベトLIB』と呼んでいて、俺達の仲間にもいる。フレディってやつなんだけど、間違ってもそいつに人間になってみるとか言っなよ。すげー怒るから」

「ふうん…その人は何の幻獣なの？」

「んー…何だっけ…食べ物っぽい名前だったんだよな…」

食べ物？それって…

「パン？」

「そう、それだ！よく分かったな」

ハルカも、よくこんな風にいつもうる覚えだったな…。

ハルカと一緒に読んだ本の内容を思い出しながら私は言った。

「パンは、ギリシャ神話に出てくる牧神だったよね。…上半身が人間で、足だけが山羊の足なんだっけ？」

「その通りだよ。…あいつが神話に出てくるのか？…お前詳しいな」
トキは目を見張って言った。

「そういうのが好きな友達が…いるから。…そうだ、トキ、狼については何か知らない？」

私がそう言つと、トキは斜め上を見つめながら応える。

「そうだな…実は、俺の仲間にも一人いるんだよ。条件をクリアするために最初に探し出した奴で、白い狼なんだ。狼は社会的に認められ辛いから、苦勞してきたらしい」

「認められ辛い？」

「ああ。狼は基本的に、アマデウスの野郎みたいに凶暴で好戦的で…人を食う。あ、そいつは大丈夫だ。人は食わないから」

私はゾツとした。

「それって…人を食べるのって、アマデウスだけの話じゃないの？」

「ああ。お前も知らない人間には、人喰いだと思われてしまうだろうな」

「そんな…」

私はショックで何も言えなくなった。狼の種族がそこまで恐ろしいとは思ってもみなかったのだ。

本当に種族全体で人喰いだと思われているんだ。それなら恐れられて当然じゃないか。

マグニフィセント・セブンで、自分を見た人々の悲鳴を思い返しなから私は思った。

でもアマデウスは…私には、そんな恐ろしい、化け物みたいな人には見えなかった。

アマデウスと対峙したとき、私が感じたのはただ、彼がひどく苦しんでいるということ。

それが何かは、わからないけど。

彼の行動は、ただ残忍なだけじゃない。

彼の行動には、何か理由があるんじゃないだろうか。

だって、「殺してくれて良かったのに」なんて、例え油断させる為だったとしても、アマデウスのような人が言うだろうか？

私の目に映った彼は…絶望していた。

アマデウスがやったことは許されることじゃないけれど、アマデウスはそれを、後悔しているんじゃないか…。なんとなく、そう思う。でも、なんの根拠もないし、ただの思い込みかもしれない。

「…トキ、そういえば気になったことがあるんだ。アマデウスが私を見て…なんだか…こう言うのも変だけど、すごく、嬉しそうだったんだけど」

「ああ…無理もない。狼種にとっては、黒い狼は幻のヒーローだからな」

「ヒーロー？」

「狼種にとって、黒い狼はおとぎ話で語り継がれてきた、特別な存在らしい。狼達のおとぎ話では、黒い狼は夜の神で、夜に闇が訪れるのは黒い狼が太陽を食べようと追いかけてきて、太陽が狼を恐れて隠れるからなんだと。俺の仲間の狼も、お前の話を聞いて興奮してたよ」

「そうなの？」

「ああ。すごく驚いて、お前に会いに行きたいってうるさい」

「ふうん…その人にも、会ってみたいな」

「じゃあ、明後日、迎えにくるからな」

「あさって？」

「俺が来てたって、言うなよ」

私が呼び止める間もなく突然、トキはテントの入り口から出て行ってしまった。

「ト…」

呼び止めようと大声を出そうとしたけど、背後の気配に気づいて私は口をつぐんだ。

「…今、誰か居た？」

振り向いた次の瞬間、テントの反対側のもう一つの入り口から、ユリアンが入って来た。

「…え、私、一人だよ？」

私はとっさに嘘をつく。

ユリアンは不思議そうにキョロキョロと辺りを見回して言った。

「そう？声が聞こえた気がしたんだけど。おかしいな…僕の魔法の端っこが緩んでる」

「緩んでる？」

「昨日かけた魔法がね。頑丈にかけたつもりだったんだけど…。どこかの魔術師が隙間から入り込もうとしたみたいだ」

「…そうなの？」

そういえば、トキも魔法が使えるんだっけ…

ユリアンがまた何か言おうと口を開いた瞬間、テントにまた誰か飛び込んで来た。

「アマミヤ！！獣姿で街中を走り回ったと！？」

怒り狂ったヴァンが、私に掴みかからんばかりの勢いで近寄ってき

た。

「なんて馬鹿なことをしたんだ!!」

ああ…やっぱり怒られるんだ…

私はガツクリと肩を落とした。

第32話 t a s t e o f s a u r y

朝、テントにて。

今、私は床に正座して座り込み、ヴァンは私の正面のベンチに腕を組んで座っている。

私たちは向かい合って、じっとお互いの目を見つめていた。

私は口を開いた。

「ヴァン…」

ヴァンは私の眼差しをまっすぐに受け止めると、目を伏せてため息まじりに言った。

「アマミヤ…」

次の瞬間、私は勢いよく土下座した。

「どうか、外出させて下さい!」

「ダメだ」

ヴァンは即答する。

「……トキと約束したんだよ!」

「絶対に、ダメだ」

言いつのる私を、ヴァンはきっぱりと切り捨てた。

「何でダメなの!？」

「お前が世間知らずだからだ!」

「…君たちさあ、さつきからそのやりとり、何回目？」

「諦めなよアマミヤ。ヴァンは一度言いだしたら聞かないから」

呆れた声をあげたのは、ルーとユリアンだ。

私たちの横でベンチに座って、マグニフィセント・セブンのカフェで買ってきた、ローストビーフをはさんだ大きなパストラミとキヤラメルラテで、優雅に朝食をとっている。

おいしそう…

黄金色になるまで炒めたタマネギと、たっぷりのローストビーフと瑞々しいレタス、甘く香ばしいパンの匂いがいやでも鼻について、説教で朝ご飯おあずけ状態の私のお腹は鳴りっぱなしだった。

先ほど、小一時間ヴァンのお説教をくらった私は、まさかの外出禁止を言い渡されてしまったのだ。思わず「お父さんか!」と突っ込みを入れてしまった。

ヴァンは冷静に「違う」と返してきたけどね…。

困った私は、とっさにトキとの約束を口にした。それが地雷だったようで、ヴァンは更に怒り狂い、来週に早まった私自身のオークションの日まで、私は一週間もの外出禁止になってしまった。

「だから、なんでトキに会いに行ったらダメなの？」

トキが私を攫おうとしていたことなんて、ベガーズ・バンケットのみんなは知らないはずなのに…。

私がそう思いながら首を傾げていると、ヴァンは言った。

「アママヤ、お前はわかってんのか？自分が本当に危険だったことが？」

「…獣姿で街に入るのは危険。狼なら尚更、危険な猛獣だから街に入った時点で射殺されていても文句が言えない。珍しい色だから生け捕りしようとしていたみたいで助かったけど、運が良かっただけで、もう二度とやっちゃダメ。あと、犯罪者集団『ヨシユア・ツリ』と言えば、名の知れた盗賊団で、リーダーのトキはお尋ね者だから、知り合ってたって百害あって一利なし…でも、トキ達がやっていることは、ベガーズ・バンケットのシルク・ド・ノワールとどう違うの？」

私は、ヴァンにさっきの説教でくどくど言われた内容を簡潔に言うのと、ヴァンの目を見つめて質問した。

「……」

ヴァンは複雑そうな顔をして、言葉に詰まる。

「トキ達の仲間に、狼が一人いるんだって。私、その人に会ってみたいんだ。色々聞いてみたい。ねえ、もう絶対に人前で獣姿にはならない。約束する。だから、行かせて下さい！お願い！」

「トキは俺たちを嫌ってる。お前に何かしてくるかもしれないぞ」

「だーから、トキはアリと私を助けてくれたんだよ？そんな人が、何かしてくるわけないでしょ？」

私がかしく思いながら言うと、ヴァンは首を振った。

「そんなことは分からない」

どうしても意見を曲げない、かたくななヴァンに、とうとう私は根負けした。

「もう…分かったよ！」

私はそう叫びながらテントから出て行った。

…我ながら子供っぽかったと思う。

ずっと私の側から離れないアリと一緒にテントの脇に座り込んで、抜け出す方法について考えていると、ユリアンが私とアリの分の朝ごはんを持って来てくれた。

「アマミヤ…君も大概、頑固だね」

呆れた顔で言うユリアン。

「ヴァンはトキが嫌いなのか？トキはヴァンとユリアンを認めてるって言うたのに」

私が言うと、ユリアンは困った顔をした。

「あれは…ヴァンはちよっと、トキをライバル意識してるんだと思う」

「ライバル意識？」

「ヨシュア・ツリイのジンのこと、聞いてる？」

「ラナーって人でしょ？トラッカー・ドラゴンに追いかけられた時に私を助けてくれたよ」

「そう。ラナーは、ヴァンの恋人なんだよ」

「え！そうなの！？」

「というか、婚約者の方が近いかな。ジンは普通の人間とも幻獣とも違う。ジンの寿命はすごく永いんだけど、生きていくために何かものを『よりしろ』にしなければ消滅してしまうらしい。それで、ラナーの『よりしろ』を、ヴァンが持っているんだ」

「よりしろ？」

「ジンは魔法も使わずに、自由自在に変化できる。でも、魂だけはずえられず、ものにとり憑いていないといけないんだって。置物とか、ランプとか…そういうもの。ラナーは自分のそれをヴァンに持っていてほしいって渡したんだよ。ヴァンはベガーズ・バンケットにラナーを誘ったんだけどさ、ラナーはヨシュア・ツリイでトキを助けたんだって断っちゃったんだ」

「それで…」

「…ユリアン、口が軽くなったな」

私が口を開いた瞬間、すぐ近くに来ていたヴァンが言った。
私は気付くのが遅れて、ちよつと驚いてしまった。

「…いいだろ。本当のことだし」

ユリアンは悪びれずに言った。

ヴァンは苦い顔をする。

「…全く、病気だな」

「は？どういう意味？」

ヴァンの言葉に、ユリアンがいぶかしむ。

「薬で治せない病だよ。お前が幼女趣味とは知らなかった」

そう言いながらヴァンは一瞬私を見た。

うん？なんで今、目があったんだ？

今の会話、私関係ないよね？

すると突然、ユリアンは勢いよく立ち上がって言った。

「お前こそ、正体の無いものが恋人じゃないか」

「……取り消せ」

「そっちこそ」

何の話をしてるのかよくわからないけど、喧嘩し始めちゃったよ!!
ピリピリした雰囲気の中、私はおずおずと声をかける。

「あ、あの……」

2人は応えない。にらみ合って、今にも互いに掴みかかりようとしている。

「子供たちが見てますけど……」

私がそう言つと、ヴァンとユリアンはすごい勢いでこちらを向いた。座っている私の背中に抱きついて怯え気味のアリと、いつの間にかやって来て私の隣に座り込み、興味津々で見上げてくる双子を目にすると、ヴァンとユリアンはバツが悪そうに一瞬見つめ合って、ため息をついた。

「ねえねえ、痴話喧嘩ってやつ？」

双子の1人がニヤニヤしながら言つと、ヴァンはその頭を叩こうとした。その手をするりとよけて、双子は笑いながらどこかに散って行った。

「…とにかく、一週間大人しくしておくんだ」

ヴァンは私を見てそう言うと、素早くテントの中に戻って行った。

「ねえ、ケンカなの？2人とも怒ってた」

ア리가不安げに言う。私が口を開く前に、ユリアンが応えた。

「大したことじゃないよ。僕とヴァンはよく口論するんだ。気にするな。…アマイヤも、ヴァンが言ったこと、気にすること無いから」

「何が？ユリアンは幼女趣味だロリコンってこと？」

私がパストラミにかじり付きながら言うと、ユリアンは叫んだ。

「違う!!」

アリと朝ごはんを食べ終わってから、私はまた、抜け出す方法について考えていた。

「何でそんなに、あいつに会いたいんだ？」

悩む私を見て、ユリアンが不機嫌そうに言う。

そのとき、ユリアンの方を向いた瞬間、私はひらめいた。

私が抜け出せないように魔法をかけるのは、一座に他に魔法使いが居ないと言っていたから、ユリアンだ。だからユリアンを見方にすれば、楽勝でトキ達に会いに行ける！」

「そうだ！ユリアンお願い！あさって抜け出すのに、協力してくれない？」

「…じゃあどうしてそんなに必死なのか、教えてくれよ」

「それを言ったら、協力してくれる？」

「…どうかな」

「ユリアンは優しいから、きっと助けてくれるよ」

私はにっこり笑って言う。ユリアンは眉を寄せて腕を組んだ。

「私、幻獣や狼について…っていうか自分についても、全く分かってないでしょ、世間知らずって言われるし」

ユリアンは無言で頷く。

「だから、トキの仲間の狼に話を聞きたいと思うんだ。同じ種族の人に話を聞けたら、気をつけなきゃいけないことが分かるし、狼の自分の立場が知れるでしょ」

「真面目なことを言うね」

ユリアンがニヤリと笑って言った。
私は戸惑って、押し黙った。

「……」

「本当にそれだけ？」

ユリアンは首を傾げる。私のトキに会いたい理由がそれだけではないことを、ユリアンは分かっているんだ。

私は決心した。

ある程度なら、ユリアンに話してしまう方が良いかもしれない。

「…私、白い男の子に連れてこられたって言ったでしょ？」

ユリアンは頷いた。

「白い男の子が、『会いたい人に会わせてあげる』って言ったから、私はついてきて、気がついたらあの荒野…ステッペンにいたの」

「会いたい人に会わせてあげる…？よくまあ、そんな怪しい話にのったね」

「…うん。あとから思えば、本当にそうなんだけど。でも、その言葉は嘘じゃないと思うんだ。それでね、その子に、『会いたい人』に会いたいなら、その子の名前を探せって言われてたの」

厳密にはちよつと違うけど…まあ、これ以上話すと、全て言わないといけなくなる。本当のことを言わない方が良いつて予感が変わらないから、黙っておこう。

「名前？」

「白い男の子の名前だよ」

それから私は、トキも同じ様に白い男の子の名前を探さなければならぬので、協力することになったと説明した。

「だから、どうしても行かなきゃならないの。力を貸してくれない？」

ユリアンはためいきをついて、それからしぶしぶ頷いた。

「そんな話をされたら、協力しないわけにはいかないじゃないか…」

「ありがとう！！やっぱりユリアンは優しいね」

「…会いたい人って？」

ユリアンに聞かれて一瞬言葉に詰まってしまったけれど、なんでもないふりをして私は応えた。

「…幼なじみだよ」

「ふうん…」

ユリアンはそれ以上何も聞いてはこなかったもので、私はホッとする。

ハルカの事となると、私は途端に弱気になってしまっただ。

本当は、不安でしょうがない。

ハルカに会うには、トキの様に何年もかかるのかな？

…そもそも、ハルカに…本当に、会えるのかな…？

そう思うと不安で、泣きそうになってしまったけれど、ぐっと我慢する。

ユリアンは下を向いて考え込んでいたので、そんな私の様子には気づいていなかった。

突然、ユリアンが呟いた。

「そうだな…男になってみる？」

「ええ！？」

ユリアンがまた変なことを言い始めた！

ユリアンは驚愕する私を見て吹き出して、笑いながら言う。

「魔法で、だよ。僕の魔法は自分で言うのもなんだけど、複雑で騙しにくいんだ。僕がアマミヤを助けたってヴァンにバレると面倒くさいから、アマミヤがただ単純に思いついた策がはまってしまったことにしよう」

「どういうこと？」

「魔法をかけるときに、『ある部屋から誰も逃がさない』って感じで、不特定多数を見張るのは手間なんだ。隙間無く魔法を定着させなきゃならないから、広ければ広いほど大変だ。そこで、エネルギー

「の節約のために僕がいつもやってるのが、ドアや窓に、捕まえた人と同じ性別の人間が通れない魔法をかけること。例えば、捕まえたのがアマミヤみたいに女性なら、女性がそこから出られないように魔法をかける。そうすると、楽に確実に留めておける。ただ、これには欠点がある」

私は頷いて先を促す。

ちよつとためてから、ユリアンは目を細めて言う。

「男装して男のふりをするだけで、この魔法は騙せてしまう」

「何それ！」

「実はこの魔法、外見で性別を判断してるんだ」

「そうなんだ」

魔法にも色々あるんだなあ。

しかし男装か…

まあ、そのくらいなら簡単そう。私はそう思って、喜んで了承した。

…のが、間違いだった。

第33話 モノローグ・オブ・カレン・コベイン

その日、私は生まれて初めて、漆黒の少年を見た。

彼の瞳も髪も、黒々と艶めいていた。

それは、完璧な黒だった。

深遠な、闇のようだった。

今日はずっと、コートニーの機嫌が良い。
だから私、カレン・コベインは機嫌が悪い。

黒い狼を捕まえる為に、トキとラスと一緒にベガーズ・バンケット
に行っていたはずのコートニーは、手ぶらでラスとヨシュア・ツリ
イの拠点であるバーに帰ってきた。にもかかわらず、とても上機嫌
だった。

「コートニー、何かあったの？」

私が聞くと、コートニーは顔をほころばせて、花のような笑顔にな
る。

コートニーは竜と人の混ざった幻獣、ヴィブルの種族で、額に宝石
のガーネットが埋め込まれた驚くほどの美人だけど、笑うと別人み
たいに可愛い。

「カレン、黒い狼、すごくかわいらしい女の子だったのよ。それにその子、トキのお仲間なんですって」

「お仲間……？」

「ほら、よく言ってるじゃない。違う世界の」

「ああ」

私は頷いた。

トキは、ヨシユア・ツリイのリーダーだ。

彼はいつも、自分が違う次元、または違う空間からやって来たと主張する。

珍しい黒い瞳を持っていて、それを人から指摘される度に言っているから、それはただの口癖のジョークだと私は思っているし、ヨシユア・ツリイの仲間達も、誰も信じてはいない。

トキの話をみんなが笑う中、コートニーだけは信じているという態度を取るけれど、それは彼女が優しいからだ。本当のところは彼女も、それがトキのお馴染みのジョークだと分かっている。

「黒い狼も、ちょっとイタい子なんだ？」

私が顔をしかめて言うと、コートニーは悲しげな顔をする。

「カレン、そんな言い方、トキが可哀想よ。きつとあの狼の女の子が気に入ったんだわ」

「え？狼を？」

私はさらに顔をしかめた。

「トキの趣味は変わってる…」

「あら、私もあの子なら、狼でも構わないわ」

コートニーが笑う。私は沸き起こる不機嫌な気持ちを隠そうと、無表情を装う。

「でもそれが本当なら大変じゃない、スーズとラスが黙ってないでしょ？」

スーズ・スーはキキーモラの種族で、外見は10才位の女の子だけど、本当は27才だ。トキの事をものすごく崇拜している。ラス・ウルリツヒは人魚の青年で、彼もトキが全てって感じで、トキの命令ならなんでも聞く。

トキに気に入った人がいるなんて聞いたら、この2人が大人しくしているわけがない。

けれどそう言っただけで困惑する私に、コートニーはにっこり笑って答えた。

「あら、面白くなりそうじゃない？」

私は呆れて言った。

「あんた本当、いい性格してるわね」

それが、一昨日の夜のこと。

そして今朝、コートニーはまたしても上機嫌だ。

手の爪に金色のマニキュアを塗りながら、嬉しそうに笑って言う。

「今日来るのよね、黒い狼の女の子、あれからずっと気になっていたのよ。楽しみだわ」

私は無意識に顔をしかめて言う。

「そういえばその子、仲間になるのは嫌だけど、トキに協力はしてやるって言ったんですって？」

「あら、嫌なんじゃなくて、ベガーズ・バンケットのみんなに悪いからって断ったのよ」

「偽善的」

私は蔑むように言った。けれどもコートニーは聞いていない。

「…本当にかわいらしい子だったわ」

「あんたはそればかりね」

呆れて私はため息をついた。

コートニーが黒い狼のことばかり話すから、私はイライラしてしまう。

「ちょっと一服してくる」

気分を変えたくて、コートニーから離れて、地下にある店から出て地上に上がった。

煙草に火をつけながら下を向いて階段を上っていたので、誰かが目の前に居ることにぶつかる寸前まで気づかなかった。

ふと顔を上げると、真っ黒な影が視界を占領して、私は驚いて反射的に後ずさってしまった。

「きゃあ！」

小さく叫び声をあげて、私は背後の階段の方によろめいた。

落ちる！

夢中で私は空中に手を伸ばした。すると、黒い影がその手を掴んだ。

「え？」

気づけば私は、誰かに抱き寄せられていた。突然のことに何が起こったのか、一瞬分からなくなる。

「大丈夫ですか…？」

その声に顔を上げると、真っ黒な瞳と目があった。

闇色に艶めく短い髪と獣の耳、繊細な漆黒のまつげ。綺麗な白い肌、口角が上がった桃色の唇。黒目がちの強い眼差しは、まっすぐに誠実そうに、私を見つめている。

何て美しいんだろう。

私はそう思った。

外見はもちろんだけど、何か、活き活きと輝く、圧倒されてしまうような力強い雰囲気、その少年は持っていた。

「あの…？」

「あ、あら、ごめんなさい」

少年に見惚れて固まっていた私は慌てて下を向いた。

「危なかったですね。驚かせてごめんなさい」

少年が申し訳なそうに言った。

その声は少し高めで、まだ見かけより幼いことが分かる。身長も私と同じくらいだ。

「いいえ、私もぼんやりしていたから…助かったわ。本当にありがとう」

そう言いながらも、私は少年から目が離せなかった。

黒い瞳は珍しいけれど、トキで見慣れている。でも、本物の黒い毛

皮の幻獣なんて初めて見た。思わずしげしげと観察してしまう。

彼は一体なんの種族だろう？大きな三角形の耳に、太い豊かなしっぽ。

ん？

大きな三角形の耳に、太いしっぽ？

猫の幻獣なら、細いしっぽ。

犬の幻獣なら、耳はもつと小さいはずだ。

「あなた…もしかして狼！？」

「あ…はい。そうです」

少年は頷いてにつこり微笑んだ。

私はそのとき反射的に、少年から一步距離をとった。

狼は人を喰べる。

それは、世界中の子供たちが、幼い頃から学ぶこと。おそらく、唯一世界中で共通している事象だ。どこでも例外なく、狼は危険な生き物なのだ。

けれども、もちろん例外もある。現に仲間の一人、クリスチャン・ノボセリックは白い狼だけど、ベジタリアンだから人を食べる心配はない。

この人も街中に居るってことは、大人しい狼に違いないのに。先ほどの優しい笑顔は、少しも害のないものに見えたのに、拒否してしまった。

私は距離をとったことを後悔した。

気まずく思いながら顔を上げると、一瞬少年は悲しげな顔をしていた。

「あの…」

弁解しようと口を開こうとしたけれど、少年が先に柔らかく微笑んで言った。

「安心して。…ベジタリアンなので、あなたを食べたりしません」

「ごめんなさい。そんなつもりじゃ…」

私が謝ると少年は屈託なく笑った。

「いいんですよ。だって、この世界では当たり前なんじゃない？」

「この世界…？」

「あ、えっと、あ…当たり前のことだから、あなたは気にすることないって意味です」

少年の変な言い回しをいぶかしむと、少年は慌てて言い直した。

この世界…トキと同じ様な言い方をする。まるで当たり前のように、世界は他にも存在するのだと言う。

そう言えば、黒い狼が今日ここに来るはずで…

聞いたこともないくらい珍しい、黒い狼なんて、そう何人も居るはずがない。

「ねえ…あなたもしかして、アマミヤ？」

「はい」

少年はすぐに頷いた。

「あなたは、ヨシユア・ツリイの方ですか？」

少年に聞かれて、私は困惑しながら頷いた。

黒い狼って、女の子じゃなかったのかしら？

目の前の少年は痩せぎすで、さつき抱き寄せられたときも、手も肩も骨ばっていて、あまり女の子らしくはなかった。でも、コート――が女の子を間違える筈はないし…。

「黒い狼って…女の子なんじゃなかったかしら？」

私が思わずそう口にする、アマミヤは慌てて言った。

「あ、すみません！私、今ちょっと変装してて…」

アマミヤは自分の前髪の毛をつまんで引っ張った。

アマミヤの髪にかけられていた魔法がするりとほどけて、短く見えていた髪が一瞬逆立ち、瞬時に長い黒髪が現れた。同時にアマミヤの雰囲気はがらりと変わり、骨ばった体つきの見かけはあまり変化しなかったものの、女の子だとはつきり感じられるようになった。

艶めいて流れる漆黒の髪に、私は目をみはった。

ああ…やっぱり。この子、なんて美しいのだろう。

「『両性別』の魔法ね？」

『両性別』は、性別を他人に分からない様にする、幻影の魔法の一種だ。

変装だけでは完全に違う性別に見せかけるのは難しいが、この魔法ならそれが簡単に出来る。

現代では、異装マニア…つまり女装をする人や、男装をする人が好んで使う魔法だけれど、大昔、戦争中なんかは、スパイや、女性が身を守るために男の振りをするとき、役立っていた魔法。

「なんで変装なんか？」

「ちょっと…のっぴきならない事情がありました」

アマミヤは困った顔で笑う。

「まあ、気にしないで下さい。それより、中に入っても良いですか？」

「あ、ええ。じゃあ、先に行って、トキを呼んでくるわね」

「すみません。お願いします」

私を先頭に、私たちは地下への階段を下りていった。

先ほどぶつかりそうになった（…）というか危うく私が殺しそうになった（…）カレン・コベインと名乗ったストリートロングの金髪美女（履いているぴったりしたジーンズが、びっくりするほどボロボロだ）に促されるまま、私は階段を下りた。

ブラックライトで照らされた階段の下の踊り場の壁には、金色のノブのついた大きな黒い木のドアがあり、札が下がっていた。札には、ローマ字で「The Joshua Tree cafe」と書いてある。

「カフェ？居酒屋とか言ってたっけ…」

私が呟くと、金髪美女カレンは応えてくれた。

「カフェよ。昼間はね。夜は、会員しか入れないバーになるの…会員と言っても、私たちだけだけどね。毎日全員が揃う訳でもないし。でも今日はあなたが来るから、全員揃って待っているはずよ」

彼女が金色のドアノブに触れようとしたちょうどそのとき、ドアが外側に少し開いて、トキがチラリと顔を出した。私の方を見てちょっと訝しげな表情をしたけれど、ゆっくりドアを開いてくれた。

「よくきたな。仲間を紹介する」

トキはそう言うと、ドアを押さえて私をお店の中へと促した。

けれども、私はお店の中を覗き見た瞬間、足がすくんでしまった。

あまり広くない店内では10人の男女が、思い思いの席に座りながら、全員私を見つめていたのだ。

みんな私を値踏みするように眺めてくるうえ、にらみつけてくるのも何人かいる。

…なんでにらむのかな。

ほとんど全員と初対面のはずなのに！

やっぱりまた、狼だからって嫌われているのかな？

お返しに私は一人一人、しっかり目を合わせて、まじまじと見つめ返してやった。

張り詰めた空気のなか、沈黙を破ったのは赤毛の美女、コートニーだった。

「アマミヤ、ようこそヨシユア・ツリイへ」

そう言って、彼女は花のように微笑んだ。

「あいつが、狼のクリスチャン・ノボセリック。その前に座ってるのが人魚のラス・ウルリツヒ、その後ろがワームのイアン・メイ、その隣がヴィグルのコートニー・ラボワ、カウンターに座ってるのが、右からパンのフレディ・マークス、スクオンクのジャン・バテイスタ・リュリ、バイコーンのフラン・ハイドン、カウンターの上の女の子がキキーモラのスーズ・スー。カウンターの前にいるのがジンのラナー・ライ・タハとバステットのデイビッド・グロール…そしてお前の後ろに立っているのが、ハーピーのカレン・コベイン。」

で、俺は人間の向井時生。ここにいる全員がヨシユア・ツリイの団員で、総勢12名だ」

一気に紹介しないでほしい…

覚えきれないでしょうが！

とトキの早口な紹介に激しく突っ込みたい衝動にかられながら、私は必死で頭の中で名前と顔を覚えていた。

狼のクリスチャン・ノボセリックは白い肌と白い髪に、青い瞳をした男の子で、年は多分私と同じくらい。私と同じで、大きな狼の耳がはえている。青と白のボーダーのＴシャツに黒いパンツ、青いスニーカーを履いている。

私をまじまじと見つめてくるので、ちよつといたたまれなくなつて私は顔を背けてしまった。

…だって彼、すごい目が輝いてるんだもの！何だか…どんな顔していいかわからないよ。

人魚のラス・ウルリツヒはこのまえも会っているからいいとして。しかし、彼は人魚だったんだ…だから海の匂いがしたり、髪が緑色だったのか。

ラスは薄いブルーの仕立ての良いシャツにカーキ色の細身のワークパンツ姿だ。

ワームのイアン・メイは、茶色いアフロっぽい髪型のいかついマツチョ。ピンク色の変な柄のＴシャツ着てる…

そして、ワームがどんな幻獣だったか思い出せない。彼の見かけは普通の人間に見えるんだけど。

ヴィヴルのコートニー・ラボワも会っているからよし。とにかく美

女。目の色と同じ鮮やかなグリーンのサテンのドレスワンピースを着ている。ゴージャスだ。他のみんなはカジュアルな格好だからちよっと浮いてるけど。

パンのフレディ・マークス…身長がすごく高い。この人が人型にはならないって決めている人だ。でも服を着ていると半獣型のユリアンと大差ない。クリンクリンの亜麻色の髪に、丸まったヤギの角がはえていて、服装はネイビーのジャケットにジーンズで…足元をよく見ると、ヒツメだ。

スクオンクのジャン・バティスタ・リュリは、ちよつとぼつちやりしているけれど美形で、水玉柄のシャツを着たイタリア人っぽい男の人。薄いグレーの髪にグレーの瞳。ニコニコしながら私と目を合わせているけれど、その目だけはわずかも笑っていないと感じられる。

バイコーンのフラン・ハイドン、尖った短めの角がストレートの茶色い髪から覗いている。…鬼みたいな感じ。ラフな格好で、Ｔシャツにジーンズ。遠い目をして、なんだかぼんやりしているように見える。でも私に対して好意的ではない証拠に、目が合うと眉根を寄せて逸らされた。

カウンターのテーブルの上にあぐらをかいて座っている、キキーモラのスーズ・スーは、痩せてガリガリの１０才くらいの女の子だ。カールした長い髪はプラチナブロンドで、瞳は青紫。かわいい子なんだけれど、この子が一番私をあからさまに睨みつけてくる。かといって、目が合うとすぐに逸らされてしまった。

ジンのラナー・ライ・タハ。…さつき見た時は私と同じ真っ黒ストレートの長い髪だったのに、今は真っ青なショートカット。顔色も青い肌になったり真っ白になったり…

変わる度に私が驚いてまじまじと見ると、ラナーはニヤリと笑う。からかわれてる…。ラナーは、普通にしているとそれはまばゆいくらい美しい女性だ。この人がヴァンの恋人なんだ。

バステトのデイビッド・グロール。バステトってたしか、エジプトの神様じゃないかな？猫の顔に体は人間の。眼鏡をして、白い猫耳に猫しっぽの男の人だ。二十代後半くらいで、落ち着いた雰囲気がある。高そうな黒いジャケットを着ている。

真面目そうな外見だから、猫耳猫しっぽに凄く違和感を感じる。でも、そう感じるのはやっぱり私だけなのかな…。

そして、ハーピーのカレン・コベイン。

さつき印象的な出会い方しかったから、すっかり覚えた。しかし、今初めて彼女の背中を見て気づいたけれど、カレンは背中にあいたセクシーなトップスを着ていて、そこに大きく彫られたタトゥーが目を惹いた。真っ赤な体のドラゴンの絵柄だ。そしてそのドラゴンの目は鮮やかなグリーン。

あれ？これってもしかして…

私が首を傾げて考えていると、トキが言った。

「おい、アマミヤ、早く中に入れよ」

「え？ああ、ごめん」

私は中の人たちの視線に気圧されて、店のドアの外に立ち尽くしたままだったのだ。

私がそつと中に足を踏み入れると、みんな息を飲んで無言で私を見つめていた。

なんだこれ…
居心地悪いなあ…

一瞬間の沈黙の後、メンバーの誰かが口笛を吹いた。それをきっかけに、少し騒がしくなる。

怪訝に思っただけを見ると、満足そうに頷いているのが見えた。

どうしたんだろう？

私がトキをじっと見てみると、彼は私の方を向いて、口を開いた。

「みんな、こいつは最後のメンバー、黒い狼のアマミヤ…なんだっけ？」

忘れてやがる…

「…雨宮香子です」

私が応えると、トキは頷いた。

「そう。アマミヤ・コウコだ。…本物の黒い狼だぜ！やっとな条件が揃ったぞ！」

トキが声高にそう言うと、ヨシユア・ツリイのメンバーは皆立ち上がり、感極まったように歓声を上げた。

「な…なんでこんな反応!？」

さっきまで私を胡散臭そうに見ていたのが嘘のように、メンバー達

は満面の笑みで私に駆け寄って来た。

「本物だ！本物の黒い狼！！やっと会えた！」

「長かったぜ…3年は」

「本当に居たんだ…黒い狼。来てくれてありがとう！」

そう口々に言われ、頭を撫でられたり耳やしっぽや髪の毛に触られたり…もみくちゃにされたけど、どうも歓迎されているらしい。

「これ…どういうこと？」

トキに目配せで助けを求めるも、トキは珍しく微笑んで、見ているだけだ。

「お前が本物の黒い狼だったんで、皆喜んでるのさ」

トキはそう言って笑った。

その屈託のない笑顔を見て私は、仲間の前なら結構笑うんだな…と意外に思った。

「このドアは俺の特製品で、夜になると俺が認めたヨシユア・ツリイのメンバーしか通れない。だからさっきは、最後のメンバーとして俺が決めた、本物の黒い狼しか通れなかったわけ。実は何度か、偽者の黒い狼をここに連れてきてしまったことがあったからな。みんなお前が本当に黒い狼なのか、半信半疑だったんだよ。このドアを無傷で通れたから、お前は本物だってみんな納得したのさ」

無傷って…

「いったい偽者はどんな恐ろしい目に…？」

まあとにかく、それで最初睨んで来たわけね。みんな、私がまた偽物だと思ってたのだ。

「でも、ちよつと皆喜び過ぎじゃない…？」

「いや…僕らは、これでやっとスタート地点に立てたんだ」

ラスが私の隣に来て言った。

「…黒い狼を探してたのは、トキだけじゃないの？」

「…俺たちは皆、アマデウスとネーフェに復讐を誓っている」

困惑する私をよそに、トキは嬉しそうに言った。

「お前は、俺たちの切り札だ」

「切り札？…どうしてそうなるの？」

トキの「願い」を叶える為に必要な条件は「黒い狼を仲間にする」と…だから、黒い狼である私は力になれると思う。

けど、私がヨシユア・ツリイの仲間になることと、ネーフェやアマデウスへの復讐とが、いったい何の関係があるんだろう？

私が首を傾げると、トキは少し顔を曇らせた。

「俺の願いを叶えるための条件は、実はお前に言ったことで全てじゃあないんだ」

「え？」

静かに、言っなければ厳かに、トキは語った。

「俺がトランスペアレンシーに言われたのは、本当はこうだよ」

「…ネーフェを殺せ」

「こ…殺せ？」

「その為に必要なのが、白い狼と黒い狼だと、トランスペアレンシーは言っただ」

私は頭が真っ白になった。

「…願いを叶えてやる代わりに、人を殺せって、そう言ったの？」

愕然とした。

あの白い少年が、そんな恐ろしいことをトキにさせるなんて。

「それでトキは、本当にネーフェを殺す気なの？」

トキはまっすぐに私を見つめて、無言で頷いたのだった。

第35話 アローン・アゲイン

「自分の願いの為に人を殺すなんて…トキは、それで良いの？」

私がそう言つと、トキは何の感情もこもらない表情で私を見つめ返し、無言で目を伏せた。

他人を自分の願いの為に殺す。

そんなこと、許されない。

そんなの、間違つてる。

本気なの…？

そう考えているとき、ラスが静かな口調で言った。

「トキのことも、ネーフェが僕たちに何をやったかも知らないくせに、君はそんなことが言えるんですか？」

「……」

私は言葉に詰まってしまった。ラスの言うことに、反論できなかった。

ラスの言う通りかもしれない。

この人たちに私が、何を言えるだろう？

何があつたのか、何を思っているのか、何ひとつ知らないのに。

事情も知らずに自分の考えを主張したところで、聞いてもらえない。当たり前だ。

… だけど。

私は嫌だ。

だってきつとそんなことをしたらトキは、罪悪感で苦しむことになると思う。人の心配をして怒っちゃうくらい、とても優しい人だから。

トキの苦しみが生み出されることを止められるなら、止めたい。

それは、私の身勝手な言い分だって分かっではいるけれど。

それだけは譲れない。

私が私であること。どんな時でも変わらない、私にとって正しいものの。正しいと、信じているもの。

けれどトキは、口を開きかけた私の言葉を制して、こちらを睨みつけて言った。

「… お前の正義が、誰にでも通じると思うなよ」

その冷たい声を聞いて、私はゾツとして動けなくなった。あまりにも荒んだその目つきに、トキに一体何があったのかと、思った。

「お前が何を言ったって、俺のやることは変わらないんだ」

トキは静かに、怒りを抑えながら言った。

私はそのとき、やっと気づいた。トキは無表情だけど、もちろん、無感情なわけじゃない。

この人は、自分の感情を抑え続けているだけなんだ。

本当は、何を考えているんだろう？

「ねえ、人が死ぬと、残された人はどうなると思う？」
トキを見つめたまま、私は思わず口走っていた。

トキの人生に、一体どんなことが起こったのか。
トキの話を、聞かせてほしい。
私はただその一心だった。

だから、怒らせて、本音を引き出そうなんて思って…ひどい言い方をしてしまった。

思った通りトキは、ものすごい形相で私を睨みつけた。

「…あいつは、ネーフェは天涯孤独だ。自分で自分の家族を殺した奴だぞ。それに、直接ではないが、あいつのせいで何人も殺されている。それが、あいつが死ぬば、そんな人達を救えるかもしれない」

「だからって…」トキはそう言うけれど、私には、トキが本当にそれをすべきだと思っっているようには見えない。そう伝えようとしたけれど、トキとラスの鋭い視線にとらえられて、何も言えなくなってしまった。

ユリアンがアマデウスを殺そうとしたときは、ユリアンは話せば冷静になってくれた。でも、今の私では、どんなに話しても、トキには伝わらないと分かってしまった。何かの為に自分の人生を犠牲

にして、誰かの命さえ犠牲にする。そんな道を選ぶトキの気持ちが、私には理解できない。

まだ、トキから何の話も聞いていないから。まだ、トキに何の話もしていないから。

「それに、俺はな、誰の…ネーフェでもアマデウスでも、例えお前だったとしても、そいつを殺して自分の願いが叶うなら、俺は何人だって、殺す」

もう、決めたんだ

最後にそう、囁くように告げた、トキの淡々とした酷薄な言葉に、私は目の前が真っ暗になった気がした。

トキは、そこまでして何を求めているんだろう。
そんな恐ろしいことを、そんな悲しいことを決心しているなんて…

「…トキに、何があったの？」

私はじっとトキを見つめた。

「あなたは、何がほしいの？」

トキは私と目を合わせると、悲しげに顔を歪めた。

「俺の欲しいものは…」

口を開きかけたトキの言葉を、私は反射的に遮って言った。

「い…言いたくなかったら、言わなくていいよ！」

無理やり話を聞き出すのはやめようって決めていたのに、このままじゃ本人の意思に関係なく聞き出してしまいそうだ。

そんなことはするべきじゃない。

話すことを望んでいない人を無理やり話させるなんて、残酷なことだ。

話すのが辛いことなんて、私にだってある。

ハル力のことを話さなければならぬとしたら、辛すぎて、きっと耐えられないだろう。

今は、まだ。

トキだって、同じように、話すのが酷く辛いことがあるかもしれない。

「私…何にも知らないのに…ごめん…」

私がそう言いながら口ごもると、我に返ったトキはばつが悪そうに横を向いた。

「いや、俺が悪かった。…嫌な言い方したな。でも、今はこのことは聞かないでくれ。いずれ話すから…」

私は無言で頷いた。けれどすぐにまた聞いてしまった。

「でも、黒い狼と白い狼が必要だって、一体どういことなのかな…？」

トキは腕を組んで首を傾げた。

「俺もよくわからないが…たぶん、どちらかが…」

「どちらかが？」

「…いや、何でもない」

トキは一瞬暗い表情になっていたけれど、すぐにいつもの無表情に戻った。

「？」

私は気になってしょうがなかったけれど、その時は何も聞けなかった。

トキはきつと、私が今まで出会った人の中で一番頑固な人だ。私以上に、自分の考えを曲げない。

今はまだ、私にはトキに納得してもらえることが言えないかもしれない。これから、トキのことをもっとよく知って、それからもう一度このことについて聞いてみよう。

私は自分にそう言い聞かせた。

そうしないと、トキに自分の考えを押しつけてしまいそうだったから。

（誰かを殺して叶う願いなんて、おかしい）

そう言ってしまいたい気持ちを、必死に抑えこんだ。

第36話 レディー・マドンナ

「黒い狼！会いたかったんだ！僕の隣においでよ！」

考え込んでいた私は、気まずい雰囲気吹き飛ばすような、明るい声に顔を上げた。白い狼、クリスチャン・ノボセリックが嬉しそうに顔をほころばせて、私に手を振っていた。

トキが目を細めて、呆れた顔で白い狼を見ると、私の方に向きなおって言った。

「…まあ、好きなところに座れよ」

私は苦笑いしながら頷いて、白い狼の座っている場所に近付いた。

円形の黒い木製テーブルに、プラスチック製のなめらかな貝殻のような椅子が2脚。白い狼はその一つに座っていた。私は空いている方に座る。

「初めまして。クリスチャンさん」

そう言っただけで軽く会釈すると、白い狼は首を横にぶんぶんふりながら言った。

「そんな…クリスでいいよ！トキにはそう呼ばれてるんだ。あいつ、クリスチャンって呼ぶのが長くてめんどくさいとか言うから。あなたは、黒い狼は…」

「雨宮香子です」

私が応えると、クリスは人なつっこい満面の笑みを浮かべる。

「そうだ、トキがアマミヤって呼んでたね！僕もアマミヤって呼んでいい？…ああ、黒い狼に会えるなんて、本当に感激だよ！」

クリスは勢いこんでそう言つと、目をキラキラさせて、何かを期待するように私を見ている。

何だか、やり辛いなあ…

アマデウスといい、クリスといい、何で狼は私を…歓迎？してくれるのかな。

「感激つてなんで？…黒い狼が神話に出てくるから？」

トキの話を思い出して聞いてみると、クリスは目を丸くした。

「うーん…違う、かな。いや、まあ、それも無いことはないけど…あれ…君はまさか、何も知らないとか言わないよね？」

「…何のことを？」

「ほら、狼のことだよ。黒い狼が現れたら起こること。そうだな、例えば、特別な魔法を君は持っていたりするんじゃない！？」

クリスは目を輝かせ、まばたきもせず私を見ている。
何この高すぎる期待！？

「…ごめん、何が言いたいのか、よくわからないんだけど…」

私がそう言つと、クリスは絶句してしまい、目を見開いたまま固まつて動かなくなつてしまった。
なんかショック受けてる…？

「あ、あの…」

私が戸惑つてクリスに質問しようとしたとき、背後にやって来たトキが突然クリスの頭をはたいた。

「いだっ」

クリスは呻いて、頭を抱えた。

「トキ！痛いよ！何すんだよ！」

「お前の都合で他人の価値を決めるなよ。お前は、他人に自分を先入観で決めつけられるのがいちばん嫌いなんじゃなかったのか？」

トキの言葉に、クリスは目をしばたいて、うなだれた。

「…そうだね。アマイヤ、ごめん」

「待つて待つて、私には何が何だか分からないんだけど…」

そう言つと、真面目な顔になつてクリスは言つた。

「僕達は狼だからさ、狼以外の種族には、毛嫌いされてるだろ？僕等みたいにベジタリアンを貫いてる狼まで、知らない人から見れば

同じように僕自身も人喰いだと思われて、散々な目に合うじゃない。でも、君の見た目で勝手に期待した僕も、僕に散々ひどいことをした奴らと同じだ…ってこと。悪かったよ」

クリスは肩をすくめて、悲しげな表情になる。

私はいまだに話が見えなくて、困惑して言った。

「私の見た目で、何を期待したの？毛皮が黒いと、何かあるの？」

そう言ったら、

「…そこから!？」

って、店に居るメンバー全員に突っ込まれた。

…仲良いね。ヨシユア・ツリーのみんな。

「なんで狼なのにそんなことも知らないんだ？」

「こいつ本当に狼か？」

ヨシユア・ツリーのメンバー達に、口々に疑問を浴びせられて混乱する私を見かねて、私がこの世界のことをほとんど知らないことを、トキが説明してくれた…一言で。

「こいつは、俺と同じ世界から来てるって言っただろ」

「ああ…はいはい」

「分かった分かった」

「それならしょうがない」

「言ってる」メンバー達はその一言で違った意味で納得してしまっ
たようだった。

うそお…

大丈夫かなこの感じ…

全然信じてないよね!?

絶対冗談だと思われてるよね!?

…まあ、それでも別に困らないからいいか。

クリスは、それならしょうがない、と詳しく説明してくれた。トキ、
この感じだとみんなトキの言うこと全然信じてないよ…

「狼族にはね、古い言い伝えがあるんだよ。黒い狼についてね…黒
い狼が現れたとき、狼に『救い』が訪れる。そう言われているんだ。
その『救い』がなにかはわからないけど、僕の考えではね、狼達が
人を喰わなくなるんじゃないかと思ってるんだよ。それは僕のいち
ばんの願いだったから、黒い狼が現れたって聞いたとき、すごく期
待しちゃったんだ」

うなだれるクリスに、私は何だか申し訳なくなって言った。

「そうだったんだ…なんか期待にそえなくて、ごめんね」

「いや…いいんだ…」

クリス！目が死んでる目が死んでる！

私がちょっとクリスを揺さぶってやろうかと思った瞬間、私は後ろから肩を叩かれた。

…って言うより、つつかれた感じがした。

振り向くと、キキーモラの女の子、スーズ・スーが立っていた。彼女は私をギラリと睨みつけてくる。

何故だか嫌われてる？…と思いながらも、私はスーズと目を合わせて首を傾げた。けれど、私をにらみつけたままスーズ・スーは何も言わない。しびれをきらして私は先に口を開いた。

「あなたは、スーズ・スーだね…」

そう私が言つと、スーズ・スーは眉間のシワを深めた。その表情は、かわいい女の子なのに、おでこがまるでパグ犬みたいだ。

そう思つて、私は思わず笑ってしまった。慌ててすぐにフォローのつもりで言つた。

「…かわいいね。スーズ」

にやけた顔はごまかせず、笑いながら言ってしまったから、ちょっとまづかったかな…とスーズ・スーの顔を窺った。すると、彼女は頬を赤らめて私を見ていた。

びつくりした顔で、私をまじまじと見つめてくる。…どうしたんだろう？もしかして怒っちゃった？

私が不安に思いながら見返すと、スーズ・スーはハツとして、すぐに口をへの字に曲げて不機嫌そうな表情をつくった。頬は赤いままだけど…

「…スーズじゃなくて、スーって呼んでくれる？」

絞り出すようにスーズ…じゃなくて、スーは言う、気を取り直して、私をまた睨みつけた。

「ああ…。スーズが嫌だったの？ごめんね、スー。雨宮香子です。よろしくね」

私が謝ってそう言うと、スーは腕を組んだ。

「あなたの名前はさっき聞いた。何度も言わなくていいわよ」

…はつきり言う子だなあ…

「あと、あなた誤解してると思うから言っとくけど。私、あなたより年上だからね」

「…え？」

私はその場に凍りついた。

このロリな女の子が私より年上！？

どう多めに見ても、12才位にしか見えないのに！

「そうなの…？」

私はトキの方を見て聞いた。するとトキはこともなげに頷いた。

「そうだぞ。俺も初めはびっくりした。キキーモラはそう言う種族なんだってさ。子供の姿で成長が止まるそうだ」

「そうなんだ…ちなみにスーは、本当はおいくつ…」

「秘密」

スーはウィンクしながら言った。

何というか、どう見ても子供なのに、スーは色気がすごい…キキーモラってなんて恐ろしい種族なのかしら！

そうやって私が戦慄しているところへ、トキが首を傾げて言った。
「そういえばお前って、女じゃなかったっけ？」

「何をいまさら…あ、でも、ちゃんと自己紹介しなくちゃだよな」

そう言って、私は髪を引っ張った。魔法の効果が切れて、髪が伸びていく。

ふうっとため息が出た。

魔法がとけていくのって、何だか不思議な爽快感がある。…重たい服を脱いだ時みたいな感じ？

「うん。今、性別が分かんなくなる？魔法をかけてもらってるんだ。ヴァンに外出禁止を言い渡されちゃって。だから抜け出すために変装してたんだよ」

「やっぱりか。何か変だなとは思ってたんだ。お前の髪、長かったよ
うな…と思って」

鈍感過ぎるよトキ…。

昨日普通に話してた時は、性別なんて何も気にしていなかったってわけ？

…私、女として見られてなさすぎなんじゃ…

「…騙したわね!？」

突然、スーズが大声を出して、勢いよくお店から出て行ってしまった。

なんかめっちゃくちゃ怒ってた!？

やっぱり男のふりなんかするのは、失礼だったかな。ちゃんと最初に変装してますって言うておけば良かった。

「…ごめんなさい」

私がみんなに向かって謝ると、ラスが涼しげな顔で言った。

「いや、スーが愚かなだけです」

「だな」

トキやクリス、他のメンバーもその言葉に頷く。

「愚かって…」

意味が分からなくて首を傾げると、トキが首を振りながら言った。

「まあ、気にするな。あいつはちょっと…思い込みが激しいって言うか。まあ、すぐ戻って来るだろ。お前もあんまりあいつをからかってやるな。スーズは中身は年増かも知れないが、見かけが子供だから、甘やかされるのに慣れてんだよ。からかわれるのは慣れてないんだ」

からかったつもりはなかったんだけど…。顔見て笑っちゃったのはちょっとよくなかったかな。反省しよう…

「それよりお前、今魔法解いてしまつて良かった…の…」
そう言い掛けて、私の背後を見たトキの表情が凍りついた。

「え？」

つられて振り向いた私は、

「う、嘘…」

そう呟いた。

私の目の前に、鬼の形相のヴァンが立っていたのだ。

逃げなきゃ！

そう思つてとつさに立ち上がろうとした私は、トキに腕を掴まれて座らせられた。

怪しげな作り笑いをしながらトキは言った。

「よおヴァン。久しぶりじゃねえ？」

「お前に名前を呼ばれる筋合いはない」
ヴァンは冷たく言い放つ。

…何この空気！？

「ヴァ…ヴァンゲリスさんじゃないですかー奇遇ですねこんな所で会うなんてー…」

私はこの雰囲気のスルーすることにして、目を泳がせながら言った。

「何を白々しいことを…」

幸いヴァンはトキから視線を外して私の方を向いた。…殺気のこもった眼差しだったけど。

「俺の言いつけを守らなかったな…アマイヤ」

ヒイイイ！恐ろしい！

「や…あの、これには深い訳が…」

しどろもどろになりながら私が言い訳しようとする、ヴァンにはつこり微笑んだ。

「そうか…じゃあ、初めから終わりまで、俺が納得する説明をしてみろ」

イヤアアア！怖い！寒気する！笑顔なのに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9191m/>

狼のしっぽ

2011年10月7日09時45分発行